

---

# 口ウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

覚醒未遂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

口ウきゅーぶ！～脆弱な<sub>シックスメン</sub>6人目～

### 【Zコード】

Z2130W

### 【作者名】

覚醒未遂

### 【あらすじ】

男バスVS女バスの試合も終わり、本格的にコーチに就任した昂。朝のロードワーク中に出会った、喘息で苦しむ少年（実は少女）との出会いが、また新たな風を彼に吹き込むのであった。

これは、（一応）バスケ経験者の作者が蒼山サグ先生の作品口ウきゅーぶを読んで衝動的に書きたくなつた物語です。

1日1回更新を目指してがんばりますっ！！！  
ので、月・木・日の週3更新を予定しています。

は無理らしい

## プロローグ（前書き）

初めまして。覚醒未遂です。  
衝動的に書きたくなつたものですが、暖かい目で見守って欲しいと  
思っています。  
それではお楽しみください。

## プロローグ

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ…………！」

……情けない。まだたったの5分位しか走ってないのにもう息をするのも辛い。でも、ここで立ち止まつたらいつまでたつてもこの苦しみは克服できないよ。

そつやつて、悲鳴を上げる僕の肺を叱咤して更にペースを上げようとする。が……

「はあっ…………はあっ…………ひゅっ…………！」？」

苦しい…………息が…………。

「かっ…………ふっ…………」

そして、僕の意識はブラックアウトした。最後に覚えているのは、アスファルトに体が叩きつけられた痛みと一人分の足音だった。

「ううう…………？」

あれっ？ここは？僕は…………一体…………。

目が覚めたら、視界一杯に広がるのはアスファルトの黒ではなく、

晴れた青空だった。肺の苦しみがなくなつてゐるのに気が付き、ほつと息をついた。

「ねえキミ……大丈夫？」  
「うわああつー？」

び、びっくりした！驚かさないでよーーー」うを見て僕は結構小心者なんだ！！

恐る恐る声が聞こえた方に視線をやると、1人の男の人気が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

ちなみに言つておくと、今僕はベンチの上で精一杯身を縮ませているところだ。もちろん、その声の主から身をかばう形で、だ。その当人はと言つと、僕の反応を見て気まずそうに苦笑いしていた。僕も、過剰過ぎる反応をしてしまつたかな。少し反省。

「す、すみません……驚いてしまつて」「いや、こっちこそごめん。ランニングをしていたら田の前でキミが倒れたから、ここまで運ばせてもらつたよ」

なるほど。この人が面倒をみてくれたみたいだね。辺りを見回してみると、先程僕が倒れた場所から少し戻った場所にある公園の片隅にいることがわかつた。

「本当に、すみません。迷惑をおかけしてしまい……」「いいんだよ。気にしないで。もう体は大丈夫かな？」  
「あ、はい」「そつか、よかった。……あ、よかったらこれビーブル

そう言って、彼はスポーツドリンクを手渡してくれた。…………こ  
こは好意を素直に受け取ろう。

「ありがとうございます。あ、僕は掛樋＝C=慧と言います。先程は本当にありがとうございました」

「いや、当たり前のことをしたまでだよ。俺は長谷川昂」

僕が名乗ると、彼 昂さんも名乗り返してくれた。うん。いい人でよかったです。

「にしても、一人でランニングして倒れるなんて危ないな。今までこうこうことはあったのか?」

「いえ、意識を失うなんてことはなかったのですが、今日はちょっと無理が祟ったみたいで……強い発作が出てしまったみたいですね」「発作って……何か病気?」

しまった、ついべらべらと話しきてしまつたかな?昂さんが心配そうな顔で僕を見ているよ。

なるべく暗くならなによつ、努めて明るく話した。

「持病でちょっと喘息を。肺を鍛えるという意味で毎日走ってるんですけど」

「そつか。大変だな」

「ふふ、ありがとうございます。……それでは僕はこの辺で。

あ、スポーツドリンクありがとうござります」

「ああ、じゃあ気を付けてな」

微笑みかけた後、僕は走り出した。

まさかこの出会いが、僕をあの場所へ連れ出すことになるとは思いもしなかった。

## プロフィール

【名前】掛樋＝C＝慧（かけひ＝クロード＝けい）

【生年月日】3／10

【血液型】A

【身長】158cm

【クラス】6年C組

【所属係】掲示係

【学業】極めて良（ただし、体育で見学することが多い）

【特技】（ストリート）バスケ。家事全般

【好物】好き嫌いはない。あえていうならじゃがいもを使った料理が好き。（例：ジャーマンポテト、フライドポテト）

### 【人物】

母親が居らず、父親と兄3人と暮らしているためかなりのしつかりもの。だが、男系家族で育つた為口調が男っぽく、容姿も中性的。胸は寂しすぎるほどまつ平ら。父や兄、周囲の人間の影響でバスケットを幼少期からやっているが、部活などの“競技”<sup>スポーツ</sup>のバスケと言うよりも“遊び”<sup>パフォーマンス</sup>に近いストリートバスケスタイル。普段は礼儀正しく謙虚な性格だが、バスケットになると途端に相手をおちょくるような、一見相手で遊んでいるかのようなプレイスタイルになる。自身では男っぽいのを少し気にしているが、スカートなど女の子の服を着るのにかなりの抵抗や恥じらいを感じる上、自分を溺愛する父、兄たちが『可愛い格好をすると変な虫が寄る』と言つてあえて男の子っぽい服を着せるのでなかなか女の子らしくなれずにはいる。喘息のため、長時間激しい動きをし続けることが出来ない。

「あ、そうだ。今回の仕事が終わったら暫く日本に腰を落ち着かせることに決まったから」

僕の父さんは、有名な建築デザイナーだ。しかも専門は家屋ではなく、オフィスビルやスポーツ施設といった規模が大きいものなので、一回の仕事が長く続く。なので新しい仕事が決まる度に家を引っ越していた。それも国内ではなく国外だ。

だから、今まで沢山の国で沢山の人と出会ってきた。父さんの仕事がそろそろ終わると知っていたし、引っ越しもそろそろだと思っていた。

次はどんな町に行くんだろう。どんな人達がいるのだろう。お世話になつた人達にお別れしなくては。近所のリチャード君、寂しがるだろうな。

期待半分、寂しさ半分で次の引っ越し先と仲良くなつた皆のことを考えていた僕は、だからこそ父さんの言葉に驚き、料理を乗せたお皿をテーブルに置く形で手が止まってしまった。

「え？……どうしたの？」

「いやな、そろそろ日本食が恋しくなつたのと、御爺様が慧に会いたいと『ねるからな』

と、話す僕の父。掛樋<sup>ジョシュー</sup>＝ジョー＝ミッセル。45歳日本国籍のアメリカ人。いつでも心は日本人なんだそうだ。

確かに、ここ3ヶ月ほどお米を食べてない。味噌や醤油も近くでは売つていないので現地の料理になつてしまつ。お爺様とも半年くらい会つていなかつた。必要以上に僕を可愛がるお爺様。抱きつい

てきて蓄えられたひげをこすり付けられるのはひょっと痛いけど、僕もお爺様には会いたい。

「それにな、そろそろ慧にも……一箇所で友達を作らせてあげたいとおもつてね」

「父さん……」

「さ、慧が作ってくれた美味しい料理が冷めないうちに早く食べよう。兄さん達も起にして、食べ終わったら引越しの準備しておいてくれ」

「はい。じゃあ起にしてくるから先に食べててね」

全ての料理を並べ終え、父さんがそれに箸を突いているのを背中で感じながら、僕はリビングから出た。顔は、期待と父さんの気遣いから満面の笑みになっていたに違いなかった。

それが、つい3週間前のこと。

父さんの仕事も無事終わり、僕たちは日本に帰ってきた。新しい学校にも入学手続きは済ませたし、準備はぬかりない。今度から新しく通う学校は、私立慧心学園。制服を見た時はあまりの可愛らしさに赤面してしまい、着たくないと言うのが正直なところだけ……流石に無理だよね。まあその辺は慣れていくしかないんだろうね。学校には次の月曜日……詳しく言えば明日から違うことになっている。今日はこれからお世話になる町を詳しく知ると、ついでに田に当たりたいのとで散歩をしている。ついでに言えば、今朝危ないところを助けてくれた人に偶然でも出会えたら……とか思つていたけど、流石にそこまで都合よきかないでの、断念。

そして今、たまたま通りかかった公園でバスケットゴールを見つけ

た。こんなところにあるんだと驚きつつ、僕も今までバスケットで友達を作ってきたので大好きだ。自然と頬が緩み、近くに落ちていたボールを拾つてショートを打つてみる。

……ドンッ、バスツ

バックボードに当たり、リングを通過した。うん。爽快だ。調子がよくなりそのまま大技をやってみようかなとか思い始めた時、大声で怒鳴られた。

「あーー！何人のボール使つてるんだよーー！」

声に驚き振り返ると、僕の後ろ5㍍くらいのところにシンシン頭の僕と同じ年くらいの男の子がいた。眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに僕を……いや、僕が持っているボールを指差している。どうやら、このボールは彼が使っていたものらしかった。

「返せよーー俺のボールーー！」

「え、あ……」

僕が固まつて動けないといると、彼は不機嫌そうにズンズンと足音を鳴らしながら近づき、奪い返した。

「うー、ごめんね。悪気はなかつたんだ。ただ誰かの忘れ物かなつて

「……」「……」

思わず肩をすぼめて謝ると、彼を包んでいた怒氣のオーラが徐々に陰を潜めていった。

「うひあひや……わるかつたよ。いきなり怒鳴つたりして

「氣まずそうに、田を逸らしながらそう言つてくれた。ふふ、本当は優しい人みたいだね。

「うん。ありがとう」

「何お礼言つてんだ?」

「え、ああ。ボール、使わせてくれてありがとうひでね。……ねえキミはこの近くに住んでるの?」

「ああ、まあ……」

「僕は掛樋＝C＝慧。ついこの前引っ越してきたばかりなんだ」

「俺は竹中夏陽。お前、バスケやってるのか?」

その後、軽く僕は今までのことを夏陽くんに話した。今まで色々な国を転々としていたこと、しばらくぶりに日本に帰ってきたこと、これからは日本で住むこと。そして、僕が今までバスケットをやっていたことと、慧心学園に転入することを話したら、彼は凄く嬉しそうにしていた。彼も、自分はバスケットが大好きだと言つことを話してくれ、すぐに意気投合した。

そして、慧心学園にはちゃんとバスケットボール部があり、彼がそこに所属していることもわかった。

「なあ慧!! お前も当然バスケ部に入るんだろ!?」

「うーんどうかなあ。僕はしつかりとした団体でやつたことないから不安なんだ」

「やうなのか……じゃあ、せめて1対1で勝負しようぜ……」

「当然、こつなることも予想は出来ただろう。無論、僕はすぐに承諾した。

勝負が終わり、僕たちは地面に座っていた。今回は運良く発作が出なかつたから、最後までやりきることができた。結果は……僕の勝ちだつた。

「お前……強すぎだろ。」「

「ふふ、ありがとう。でも、夏陽くんも、上手いじゃない？」

「……まだまだだろ」

時計を見ると、そろそろ帰つて洗濯物を取り込んだり、夕食を作つたりしなければならない時間帯だつた。

「あ、そろそろ帰らないと……」

え！？もう帰るのか！？もうちよつとせりふを…。「

うるまの島の風景

「そつか……わかつた。じやあ明日な」

渋々と言つた感じで、彼はわかつてくれた。ほつと一息つき、僕はそのまま彼に背を向ける。

「お慧ー！」

公園から出たところで、夏陽くんが声をかける。

「何？」

同じクラスに、なれるといいな！！

ふふ、そうだね！！それじゃあまた！！

この町での始めての友達は、とても気のいい男の子だった。

でも、僕は一つ彼に大きな誤解を与えたままだつた。

## scene・2 転校生はハーフ

side・2

今朝の俺は、そつとう浮かれていたんだと思つ。もちろん原因は昨日のアイツ。

**掛  
樋** かけひ **C** クロード **慧** けい。金髪の、ちょっと頼りなさそつな顔をしたアメリカ人のハーフの少年。ストリートでバスケをやつていたといい、見たことも無いような技術で俺を圧倒した。そのくせ気取つたところは一切なく、負けても悔しいけど不思議と嫌な気分にはならなかつた。

そんなやつが入れば、間違いなく男子バスケ部にいい影響を与えてくれる。そう思つて、俺は慧を心待ちにしていた。

朝、席に座つていると真帆のヤツがうるわしく騒いでいた。

「ねえねえ！－今日テンコーセーが来るんだって！－」

「転校生？」

それを紗季がめんどくさそうに対応している。

「そう！－しかもアメリカから！－やつぱこつ……『二ホンスバラ  
スイーデスネツ！－ハツハ！－』とか言つのかな！？」

「そんなアメリカから来るイコールアメリカ人なわけじゃないんだから。もしかしたら帰国子女とかかもしれないでしょ？それだと席につきなさい」

「でさでさあ～

「

まつたくつるさいヤツだ。でも、真帆の言う転校生ってやつぱり慧のこと……だよな？ そうか、同じクラスか……これは楽しくなりそうだ。

日本にはあまり滞在したことはないって言つたし、じばらくは俺が面倒見てやううとか、D組のみんなを紹介してみんなでバスケをしようとか考えていると、チャイムと同時に美星先生が入ってきた。

「知つてこら人もいると思つたけど、今日は新しい友達がやつてきました！」「それじゃあ入ってきてーーー！」

やつぱりやうだ！！

俺の心臓が鐘を鳴らし、期待が頂点に達した。

先生の声から数拍置いた後、控えめに静かにゆづくじドアを開けてソイツが入ってきた瞬間。

ソレは、一気に落とされた。

side · K

うう、やつぱり恥ずかしい。僕にはこんな絶対に似合わないって……。ほう、みんなも僕をじっと見るし、ああ絶対顔真つ赤だ！— そう言えば今日の夕飯何にしよう？ 父さんは仕事で遅くなるって言ってたし兄さんたちも部活や仕事で遅くなるかもって言つてたから

少し手間をかけた料理でも作ろうかな。それにえつと……ええつと

。

「慧くん？あの……もしもし聞いてる？大丈夫？」

「はい？」 あ、す、すみません！…緊張してしまつて……」

「にやはは。大丈夫大丈夫。ほら、自己紹介して」

「あ、はい」

現実逃避していた頭を何とか戻して、みんなと向き合つ。これから仲良くする人たちだから、しっかりと挨拶しないといけないね。

「…………掛樋＝C＝慧です。父の仕事の都合で、L・A・から引っ越してきました。好きなことはストリートバスケです。日本にはあまり来たことがないので、常識が所々抜けているかもしだせんが、どうぞよろしく」

そう言い終わつた途端、1人の男の子が立ち上がり僕を指差す。つて

「な、夏陽くん！？」

「け、慧おまつ はあ！？はあ！？はああ！？！」

「何朝つぱらから3わけわからん。ポイントも獲得してんだ？」

「先生は黙つてよ！…慧お前女子だったのか！？」

「あ、あれ？言つてなかつた……け……？」

確かに、言つてなかつたような気がしなくもないような……。

「あれ？2人とももしかして知り合い？」

先生が意外そうな顔で尋ねてくる。夏陽くんは目を見開いて口をパ

クパクをせているし、僕が答えた。

「はー。昨日散歩中に偶然出会つて。……ジャージだつたから勘違  
いたせてしまつたみたいです。」めんね夏陽くん。その……隠して  
たつもりはなかつたんだ。ほら僕つて……男の子っぽいから、わ  
「

僕が謝ると、氣を取り直したかのよつてハツとなり、氣まずさつて  
目線を泳がせる。

「い、いこよ別に……ちょっと驚いただけだし  
「うん。」めんね。……ありがとつ  
「まあなんだかよくわかんないけど、丸く収まつたところだし、え  
えつと空いてる席は……」  
「みーたんみーたん……」  
「

見ると、栗色の髪を2つに縛つている女の子が自分の隣りの席を指  
している。  
つてかみーたんて……

「おーじゃあそこでいつか。慧くん。あそここり座つてね  
「はい。わかりました」

導かれるままに席に座ると、先程の女の子が話しかけてきた。

「あたし三沢真帆……よひしきなけつちん……」  
「けつちんて……うん。よひしき。真帆くん」

あだ名はちゅうと恥ずかしいけど、賑やかで話しあやすい子だ。

「ねえねえ……さつときてた“えるえー”つてビー」

「ロサンゼルスのことだよ。『Los Angeles』の頭文字をとつて」・A・

「ストリートバスケって何？フツーのとは違つの？」

「主に室外でやるバスケなんだけど、部活でやるスポーツってよりも、遊びでやるパフォーマンスって感じかな？あつちではけっこうメジャーなんだ」

「日本語上手だよね！！英語も話せるの？」

「父が親田家だから日本語はスラスラ言えるよ。英語とフランス語なら、日常会話程度に」

「あとね！…あとね！…」

……ひょっと賑やか過ぎるのが玉にキズ、かな？

「こら真帆。掛樋さん困ってるでしょうが。つてか授業中なんだから静かにしろ」

「うう、わかったよ」

真帆くんの後ろにいる子が、彼女の頭に拳骨を落とした。はは、痛そうだ。

「ごめんなさい掛樋さん。私は永塚紗季。紗季で構わないわ。クラス委員だから、困ったことがあつたら言ってね」

「うん。わかつたよ、紗季くん。僕も慧でかまわないよ。よろしくね」

そして、前を向いてマジメに授業に取り組むことにする。少しシステムがあつちと違つたけど、内容はわかつたからよかつた。

そして、休み時間になると5人の女の子に囲まれた。内2人はさつき話した真帆くんと紗季くん。

「初めまして。湊智花です」

「香椎愛莉……です」

「おー。ひなた。袴田ひなた」

「掛樋＝ヒ＝慧です。よろしく」

「あしたちバスケ部に入ってるんだ。ねえねえ、けっちゃんは部活入るの？」

「どうしようか迷つてるところなんだ。今まできちんととした団体に入つてプレイをしたことがないからね。少し不安で……」

情けなく苦笑いをするけど、真帆くんは笑つて受け流していた。

「そんな厳しこと」りじやないよ。すばるん優しいし

「すばるん？」

「長谷川昂さん。私たち女子バスケットボール部のコーチをしてくれているの」

「長谷川、昂さん……」

僕が聞き返すと、智花くんが説明してくれた。  
もしかして……

「ん？ビーフィたけっちゃん」

「いや…………うん。そうだね。次に活動する時に参加させでもらつてもいいかな？」

「おお！？本当か！？」

「！」迷惑じゃなければ、だけどね

「迷惑なんかじゃないよ！ね」

真帆くんが促すと、みんな頷いてくれた。

「ええ。駆け出しだから、かなり人数が少ないしね」  
「それに、やつぱり人数が多いほうが楽しいと思う」  
「おー。けいもいつしょ」

順に紗季くん、愛莉くん、ひなたくん。

「それに、アメリカでバスケをしてたんだよね？」  
「うん。あくまでストリートだけどね」  
「どんなプレイをするのか、とっても楽しみ」

と、笑顔で智花くんが言つてくれた。  
はは、本当に氣のいい人ばかりだな。

scene・3 聰ひの巻（前書き）

な、何とか間に合いました……。PV数が一つの間にか1  
を越えていたので凄く驚きです。さすが口ウキゅーふ。  
お気に入りも10件を越えていたので非常に嬉しいです。  
これからもよろしくお願ひします。

scene・3 恥りつ慧

Secret talk

慧

『ね、ねえ……ホントにこの恰好じゃないとダメなのかい?』

真帆

『ダメダメ。シンニユーセーなんだから』

慧

『だ、第一僕にはこんな格好似合わないし……恥ずかしいよ……』

…

ひなた

『おー。けい恥ずかしがり』

真帆

『あっ。その目線いいぞ!! 潤んだ瞳でアタックだ!!』

慧

『ねえ話を聞いてよーー!』

放課後、体育館では智花たち女子バスケ部が練習をしていた。昴が来るまでストレッチをしたり、軽く走ったりして身体を暖める。そして今、昴が体育館に入ってきた所だ。いつもならここから彼の指示にしたがつて練習を始めるのだが、今日は少しづかつた。

「え？ 新入部員？」

「そうなんです。今日転入してきた子が前の場所でもバスケをやっていたらしくて、話をしたら是非参加させて欲しいって」「へえいいじゃないか！ それで、その子は？」

智花の話を聞いた昴は、嬉しそうに顔を綻ばせる。だが肝心の慧が見当たらない。

すると、真帆が何か企んでいそうな笑みで手を上げる。

「ハイハイ！ すばるん！ けつちんなじつけだよーーー！」  
「おー。おこーちゃん！」ひづり

それに同調したひなたと一緒に、昴を体育館倉庫前まで引きずる。紗季たちも、またかとあきれ顔でその後ろについていった。

「じゃあちょっと待つってねーーー」

そして、単身倉庫の中へと入つていぐ。

「ああーーけつちんーー逃げんなーーー！」  
「無駄無駄ーーお前の服は全て預かってーーー！」  
「つつかまえたあーーーほら無駄な抵抗はよせえーーー！」

等々、かなり不安にさせる言葉が聞こえてきた。

「む、無理無理無理無理無理絶ツ対無理だよ……」こんな格好じゃあ出れないよ……」「

「諦めろ……」今は完全に包囲されている……わざと出たまうが楽だぞ……！」

「お願いだよ真帆くん……普通の服を着させて……！」

なんでこんなに細い腕なのに振り切れないんだ！？

僕は別室でこのメイド服に着替えさせられた後、倉庫へと連れられて中で待機するように言われていた。暗くて最初は自分の姿を意識せずにいられたのだけれども、着ている服の重みで徐々に自分がどれだけ恥ずかしい格好をしているかが嫌になるほど理解できた。いや、させられた。

そして、倉庫の外が騒がしくなったかと思つたらこきなり倉庫のドアを開け放つて真帆くんが現れ、現状にいたる。

それはともかく、この状況をどうにかしなくちゃ……そうだ……！

「やつ……」

「うあつ……なにい……」

僕が思いついた案。それは、顔を伏せながら僕が出せる最高速度で駆けて、僕と認識させないよつて教室にある予備のジャージを取りに行くところなのだ。

早速、今まで後ろに踏ん張っていた力を逆向きにして一気に駆け出すと、真帆くんは尻餅をついてこけた。  
よし……」のまま扉を開けて駆け抜ければ――

「あまあい……ひな……」

「おー。」

と思つたが、いつの間にかいたひなたくんが僕の前に両手を広げ、扉を背にして立ち塞がる。小さい体を一生懸命広げて見上げてくるその姿を見ると……。

「う……」

うう、切り込めない…………。この子に荒い手を使うとなんだか人として何かを失うような気がしてならない――

「隙あつい……！」

「しまった……！」

怯んでいる隙に、立ち上がった真帆くんが僕を羽交い絞めにした。くつ、振りほどけない。

「ひな……コアラアタックだ……！」

「おー。」あらあたーっく

「うあ……これは卑怯だ――！」

ひなたくんが、僕の体に張り付いてくる。これで僕が抵抗したらひなたくんが落っこちて、運が悪ければ怪我をしてしまうかも……。

「ひつひつひ。さあ年貢の納め時だ――！」

「あ……あ……ううう……」

終わった何もかも……。

「それはあんたよ」

「ぎやつ！！」

と思った時、救世主が現れた。紗季くんだ。

「なにケイ使つて遊んでるのよ。ひなも、前から真帆の言つことなんでも聞いちやダメつて言つてるでしょ？ケイ泣きそうになつてるじゃない」

「けつちんごめん」

「けいごめんなさい」

「あ、う、うん。大丈夫だよ。……できれば、早く服を返して欲しいけど」

2人は謝つてくれたが、僕はまだメイド服のままだ。はやく……開放、されたい。

「改めまして、初めまして……ではないですね？覚えてますか？」

「一チである昴さんを前にそう言つと、みんな（特に智花くん辺りが）驚いたように僕を見てきた。まあ、確かにそうなるよね。ついこの前まで外国にいた人間が初対面だと思つた人を前にこんなことを言つのだから。

「うん。覚えているよ。昨日あつたよね？もつ体は大丈夫？」

「はい。調子がいい時は出ないので。……それにしても、驚かないんですね」

「えつと……正直最初見たときは驚いたけどね。女の子だったとは……」

「あ、あのーーちょっとといいでですか！？」

急に、慌てたように智花くんが入ってきた。

「お、お2人はお知り合い……なんですか？」

縋るような目で、昂さんに問いかける。

「うん。ほら、昨日智花にも話したよね？ランニング中に倒れてた男の子を介抱してたから遅くなつたって。……それが慧だつたみたい」

「あ、そ、そなんですか……」

「うん。僕も驚いたよ。助けてくれた人がまさかこの学校で「コーチをして」いるとは思わなかつたからね。面白い運命のめぐり合わせだ」

あらかじめ、僕が酷い喘息持ちで酷いときは5分も走つていられなことは話してある。だから、昂さんとの邂逅もすんなり理解してくれた。

「それじゃあ改めて自己紹介もしなくていいよね？早速練習始めようか……と思つたけど」

昂さんの言葉に、みんなが注目した。

「慧も経験者らしいし、ここはこのゲームで慧の力とみんなの成長を見てみよつかと思つ」

なるほど。確かに、僕と言う新しいものが入ってきたら、いきなり練習よりも試合でどの程度の実力があるかわかつたほうがいいと判断するのは賢明だね。でも、

「あ、あの。ちょっとといいですか?」

「ん? どうした?」

「非常に厚かましいお願ひだとは思うんですけど、出来れば10コ1がいいです」

「え? でもなあ……」

さすがに難色を示すか。紗季くん曰く、智花くん以外は初心者であまり多くのプレーが出来ず、唯一の経験者である智花くんは小学生とは思えない技術の持ち主だと聞く。技術に極端な差があるから、10コ1では正しい能力がわからないと思つてゐるのかも。

「紗季くんから、経験者である智花くんはかなり上手くて、他のみんなは限られたプレーしかできないと聞きました。それって、試合はチームワークでなんとか回していることですよね? そんな中で、誰がどんなプレーを出来るのか理解できていない僕が割り込んだら、逆に足手まといになると思うんですけど」

「う、そういうわれれば確かに……」

「それに」

「それに?」

僕は智花くんの方に顔を向け、挑戦的な笑みを浮かべてから再び昂々と向を仰げ。

「強い人間と戦いたくなるのは、スポーツをしている人間では当たり前ですよね？」

この言葉が、決定打だった。

scene・3 恥りの意（後書き）

次回、やっとバスケに入れます……。

scene・4 王道VS邪道（前書き）

あまり上手くかけていないかも……『めんなさい』。

あ、言い忘れていましたが、この作品は2巻の初め。  
正式に就任した直後当たりからはじまっています！！

昴がコーチに

scene・4 王道VS邪道

「じゃあ試合は10分間。ゴール1回1点で5先取で勝利……で大丈夫だよね?」

「はいっ」

「大丈夫です」

別に断られてもよかつたのだが、僕が放つた挑戦的な言い方で智花くんに火がついたみたいで凄くいい目で僕を見てきた。さらに、真帆くんたちは反対するどころか僕と智花くんが対決するのを見てみたいといった。しかも……。

「やれけっちゃん!! もつかんは強いぞーー!!

「ケイーーしつかりーートモも負けるなーー!」

「おー。ともかもけいもがんばれー」

「け、怪我はしないように」

声援は五分五分だった。

じゅんけんの結果、僕がまずディフェンスすることになった。

まず、ここでこの試合のルールをおさらいしておこう。

試合は1対1。ルールはバスケットボールの公式ルールにのつとり、  
昴さんが審判。

例外としてショートは1本1点で、もちろん3ポイントはなし。ファウルによるフリースローはなし。

ハーフコートゲームで、オフェンスがショートを決める、もしくはディフェンスがボールを奪うとコートの真ん中を横断するハーフラインの中央からスタート。

……」んな感じかな。

「それじゃ、スタートッ！」

（注：試合は基本的に昴の一人称で進めます。あと、バスケの用語がでてきたら簡単な説明を【】内に入れますので、ご安心ください）

side・S

まさか、慧が自分から智花との1on1をのぞむとは思わなかつた。まあ、みんなはかなり乗り気みたいだけ。彼……いや、彼女はアメリカのほうではストリートでバスケをやつていたからちょっとおかしなところがあるけど目を瞑つて欲しいといつていた。さて、智花相手にどんな試合をするのか楽しみだ。

智花は慧の様子を見るようにドリブルはせず、腰の右側に両手にボールを持ったまま隙を窺つていた。

一方慧は、ディフェンスの基本である両手を上げると言つことはせず、腰を落とした状態で同じように智花の隙を窺つている。そのディフェンスは隙が多いが、微妙な距離感を保つていて、ショートを打とうと構えればブロックを、抜こうとドリブルをすればコースを防げるような位置取りは完璧だった。

「ああ、おいで……」

挑発するよつに弦く。すると、智花はあの鋭いドライブで慧を右側から抜こうとする。慧はそれにバツチリと反応するが、そこからが

智花の本領発揮だ。

智花はすぐに反転すると、逆側に切り込み、慧を振り切ってレイアップを決める。相変わらず軽い身のこなしだ。

「おお……わすがもつかん……」

「へえ……ほんとに上手いんだね」

慧は、悔しがる素振りを見せずにそう言って笑った。だけど、その笑みは今までのさわやかな感じは残っているが、どこか遊んでいるよつな感じだった。

智1 - 慧0

今度は、慧のオフェンス。智花にボールを渡し、それを返してもらう。いわゆるワンタッチだ。すると智花とは正反対に、すぐにドリブルを突き出した。腰を落とさず、ゆっくりとボールをついている。もしかしたら、チョンジオブペース【ゆっくりとドリブルをした後、急に素早いドライブをして、相手のタイミングをずらす戦法】なのだろうか？

智花もそれをわかっているのだろう。ドライブを警戒して少し下がり気味で構えている。

「そんなんに離れて、大丈夫かい？」

慧が再びそつ尋ねる。どうやら、慧は試合になると口数が多くなる性質なのかもしれない。

次の瞬間、ボールはゴールに向って放たれていた。

「えっ？ あつ！！」

智1 - 慧1

智花も、そんなショートとも思えないような行動に呆気にとられていた。

慧は、ドリブルをしていたボールが自分の手についた瞬間、それを片手の下投げで放つてショートを打ったのだ。そしてそれに全員が釣られているうちに自分はゴール下まで走りこみ、リングには当たらなかつたがバックボードに当たつて跳ね返ってきたボールを空中で受け取つたままひょいとゴールを決めた。そして、地面に降り立つと振り向いて右手を上げた。

振り向いた彼女は、ニコッと笑う。

「これで同点だね」  
「うおおおお！？けつちんすげーーー！」  
「あ、あんなやり方があつたの？」  
「おー。けいじょうず」  
「か、かつこいい……」

コートの外で見学の4人はそれぞれ歓声を上げ、慧を褒める。俺も、かなり驚いた。ストリートの技を見るのは初めてだが、これだけはわかる。慧は、かなりやり慣れている。

智花は、ギラギラと更に目を輝かせてさらに闘志を高めていた。

「それが、ストリートバスケ？」  
「うん。言つたよね？パフォーマンスのバスケだつて」

再び両手を下げる形のティフォンスの構えを取ると、ニヒルな笑みを浮かべた。

「カツ！」よくそれでいて狡猾に。それがストリートだよ  
「それじゃあ、私はスポーツのバスケで勝つてみせる！…！」

こんじは、その場所からあの綺麗なフォームでシュートを放つ。完全に反応が遅れた慧は、飛び上がってブロックをしようとするが、ボールには届かず。綺麗な放物線を描いてボールはリングへと吸い込まれる。

再び歓声が上がるが、慧は呆然と、ボールではなく智花を見ていた。

「凄い……綺麗だ」

その唇はそう、呟いているように見えた。

智2・慧1

慧のオフェンス。

また、ゆっくりとしたドリブルから始める。だが、これがチエンジオペースなのか、それともショートなのかはわからなくなつた。だから、智花も距離を詰めてプレッシャーを与えることにしたみたいだ。

智花が近づくと慧は左手を前に出して、右手でついているボールを守るようにドリブルをしている。

慧の手からボールが離れたタイミングを狙つてボールに触れようと智花が身をかがめた瞬間、再びショートが放たれていた。

智2・慧2

俺は自分の目を疑った。慧は、信じられないような方法でシュートを打つたのだ。

智花が前に出ようと身をかがめた瞬間、慧はビハインドパス【ボールを持つている手の手を背中に回し、逆側にパスを出す高等技術】の要領で、そのままシュートを打っていた。しかも、それはバックボードに当たってリングを一周した後、中へと吸い込まれていた。そしてまた、右手を上げて振り返っていた。

「ビハインドシュート。こんな技もあるんだよ」

「うおおおお！？ かけーーー！ ねーねーすばるん！…すばるんもあーゅーの出来る！？」

「いや……普通無理だろ」

一体どんな体の構造をしているのだろう。いやまあ、あんなシュー  
トを実現させていることに驚きを隠せない。  
そして、智花のオフェンス。

「慧くん……どこでそんなシュート身に着けたの？」

「ああ。あっちでは僕は一番背が低かったからね。勝つために考  
えたのが、そういう手だっただけだよ」

そう二ツコリ笑う。

今度は、智花はドライブで抜いてきた。慧もそれに食いつき、な  
んとか着いて行くが如何せん智花のほうがスピードは上だ。初動が  
遅れた、慧を抜き去りまたレイアップを決めた。

智 3 - 慧 2

慧のオフェンス。

先の2回で、普通の考え方では慧の攻撃は止められないと判断した

智花は、なるべく近づいた位置で構え、決して自分からは行動しないようにする。

今度は慧はさつきのよくなじみのドリブルではなく、ボールハンドリング【ボールを持ち、体の周りを周回させる初心者がまず最初にやる基礎中の基礎】を始めた。腹回り、そして足を開いた間を前、後ろから通す8の字。

……行動がわからなすぎる！！

そして、右手から背中の後ろを通して左手に渡した瞬間に動き出す。急に左足から踏み込んで智花の顔の右側に手を伸ばすと、そのまま手のスナップを利かせて更に逆側に伸ばしていた右手で受け取った後、そのまま後ろに跳んでフェイダウェイショートを打つ。だが、それは惜しくもリングに弾かれた。

智 3 - 慧 2

ここで初めて、点数に差がついた。

## scene・5 決着（前書き）

この作品で慧がやつてこむ技は、作者覚醒未遂が持つてているストリートバスケのゲームを参考に出しています。

現実には実現不可で、挑戦しようとするとフォームを崩してしまつて、体に思わず怪我を負ってしまつ可も能性もあります。よこ子の皆さんには真似しないように。

あとすみません。すつじく短くなつてしまつましたー！

scene・5 決着

side・S

「あつちやあ～。外したあ」

跳ね返ったボールは智花のもとへと跳んだので、そのまま慧のオフェンスは終了。智花はほっと一息つき、慧は少し大きめに頭を抱えて天を仰いだ。

そして、智花のオフェンス。

余裕のできた智花だが、ここでペースを崩さずに一気に攻めて差を広げにかかるだろう。

また、智花の鋭いドライブ。だけど今度は慧もそれにバッチリ反応してついていく。だが、それでは甘い。

「つ……！」

智花は鋭いドライブの勢いを一気になくし、ストップ＆ショート。慧は勢いに逆らえず、智花を置き去りにして自分だけ前に進む形で追い抜いてしまう。

これでまた、智花がシユートを決めると思つた瞬間。

「なつ…………！？」

慧が、また俺達の度肝をぬいた。  
シユート体制に入った智花を置き去りにした慧は、すぐに両手を地面につき、足を逆立ちをするように振り上げる。智花の手からボ-

ルが離れた瞬間、足で蹴つてソレをブロックした。

「つんっ！？」

「おおっ！？」

智花や、周りのみんなから驚きの声が上がる。  
でもな慧……

『ピッ』

「キックボール【足でボールを蹴ること。相手ボールからスタートする】」

それ、ヴァイオレーションだから。

なんとか智花のショートを防いだ慧だけ、やっぱり一つ一つのプレイの動きが大きすぎるので、慧よりも荒い息をしている。

智花も、変則的過ぎる慧の動きに翻弄させられていつもより息が上がるのが早い。

再び、智花のオフェンスからスタート。

智花は今度は様子見をせずに最初からドライブで切り込んできた。今まで最初は少しでもお互いに隙を窺つていただけあって、慧は驚いたような顔をして反応が遅れてしまった。

「……なんてね」

かと思つたが、慧は脇を抜かれた瞬間後ろに飛んで仰向けに倒れこむと、その状態で智花のボールを弾いた。

おいおい、なんて危なっかしいプレイを……。あと一步でファウルだ。場合によつてはインテンションナル【故意のファウル。フリースロー2本に加え、ファウルを受けた側からのスタート】をとられるプレイだろう。でも、慧は上手くボールだけに触り、すぐに体制を整えた後ボールを拾つた。

智3 - 慧2

「いやホント、智花くんは強いね」

「慧くんこそ」

「これからもキミみたいな人といつでも戦えると思ったらわくわくするよ」

慧のオフェンス。智花が警戒して様子見をしているのをいいことに、慧は話し出す。

「じゃあそろそろ……」

ボールを腰溜めに構え、一気に加速した。

今まで、慧は驚かせるような技ばかりで真っ向からの勝負をして来なかつた。それを俺は、慧が身体能力では智花に勝てないと思つてゐるからだと思っていた。だけどそうじやなかつた。慧の身体能力は決して低いものじやなかつた。

その証拠に、そのドライブに智花は反応するのに精一杯だ。

線のスピードは智花の方が上だが、点のスピード 要するに

瞬発力は慧も負けてはいなかつた。

そして慧は、智花について来られながらもゴール下までボールを持つていつた。そしてフリースローラインとゴールの中間辺りまで行つたところでロールターン。その勢いのまま、飛び上がり智花のブロックをすり抜けてシュートを決めた。

そしてまた、右手を上げて振り返る。

智3・慧3

それからは、一進一退を繰り返し、5点を上回ってしまい10分を過ぎたので引き分けとなつた。

scene・5 決着（後書き）

感想お待ちしております。

scene・6 邪道への歸路（前書き）

お待たせしましたーー！

今日は視点が「ロロロロ」変わっています。申し訳ございませんーー。

それではお楽しみください。

scene · 6 邪道その弱点

s i d e · K

「はあ……はあ……智花くん。やつぱり、強いや」

「そんなこと、ないよ。私なんてまだまだ」

昴さんの試合終了の合図の後、僕と智花くんはお互いの健闘を褒め称える意味で握手を交わした。

息も絶え絶えな僕と比べて智花くんは、まだ余裕がありそうだった。僕が喘息のハンデを抱えているとしても、それを差し引いてもここにはやはりかなりの差があるみたいだ。

「2人ともお疲れ。……慧。大丈夫か？」

「はあ……はあ……？はい。大丈夫、ですけど」

「でも、息が苦しそう」

「おまけに呼吸の音も変だぞ？やつぱりアレか？」

ああ、そう言えば昴さんは知っていても他のみんなにはまだ言つてなかつたつけ？

智花くんの言葉と、僕の異変に気付いたのかコートの外で見学していたみんなも心配そうに駆け寄つてくる。

「そうですね。……みんなには言つてなかつたね。実は僕は酷い喘息持ちでね。酷い時は5分も走つていられなくなるんだ」

そつに「う」と、みんなは驚き大きな声を上げた。

「ええっ！？本当かけっちゃん！？大丈夫か！？」

「あ、あんたそんな病氣抱えてトモと一緒にようなんて何考えてんのー?」

「ふー。けい。むりしちゃだめ」

「そ、そうだよ。体のこと大事にしなきゃ……」

「ほ、本当に大丈夫!?.苦しくない!?.」

あ、あれ?みんなの反応が予想していたのと違つよ。もつといつ単純に驚かれたり、(ろくに練習が出来ないから)ガッカリされたりとかそういう反応してくるかと思ったのに。まさか心配されるどころか怒られるとは思つてなかつた。

「そうだよ慧」

「え?す、昴さん?」

後ろを向くと、少し怒つたような顔をした昴さんが腰に手を当てて立つてゐる。

「そういうことは初めから言つてもらわないと。俺もそんなに酷いものとは知らなかつたぞ。しかも酷い時は5分でダウンだろ?試合10分もやつちましたんだから。心配もするし、怒るのも当たり前だ。前もつて言つてくれれば時間だつて減らしたのに……」

「いやでも……今日は調子も良かつたですし、引き際もわかりますし」

「そういう問題じゃない」

ビシッと軽く頭にチョップを落とされつぐつと呻く。でも、昴さんは構わず続ける。

「自分で調子がいいと思つても、急に悪くなつたりすることだってあるだろ?もしそれで試合中に倒れたらどうする?何も知らない

みんなはどう思う？それに、もし智花との接触の後に倒れたら智花は自分のせいだと責めるだろ？」

「ああ……やうか……。

「Ouchie……すみません。みんなも、ごめんなさい。そして頭が回らなかつたよ」

思わず自分の至らなさに頭を抱えてしまつ。僕は、もう一度みんなと向き合つた。

「ごめん。そして心配してくれてありがとうございます。……こんな僕だけ、部活に入つてもいい……かな？」

少し自信がなくなつてしまつたので、だんだんと小さくなつてしまつたが。

「あつあつたりまえだつてのー！」

「そうね。ま、素直に謝つたから喘息黙つてたことは許したげるわ

「おー。これから、けいも仲間

「うん。これからよろしくね」

「もういるんだよ。仲間が増えた嬉しい」

……ただの杞憂だったようだ。

智花くんとの1on1が終わつた後、やはりと言ひかなんと言ひか質問攻めにあつた。主に真帆くんから。

内容はむちむちん、僕のプレイを自分も出来るかどうかといったものだ。

「多分無理、かな」

「ええ～～～！？いいじゃん教えてよ～～～！」

「ふー。けちけちするなー」

「あはは、別にそういう意味で渋つているんじゃないでね……」

この2人はなかなかしぶとこ。愛莉くんや紗季くん、智花くんは興味はあるがやつてみたいとは思つていなこよつで、すぐに退いてくれたが、真帆くんとひなたくんはまだ食らい付いてくる。  
うへんこまつたな……。

「そうだね。理由はちゃんとあるんだ」

「理由？」

「うん。まず、体がとんでもなく軟らかいのと体のバネがよくないと僕の使つている技は出来ないってこと。そうだね……ほら」

「うわつなんだ気持ちわるい！？」

「おおーーー？」

そう言つて僕が見せたのは、差し出した右手。それをもう片方の手を使わないで右手だけで指先を手首につけるといったものだ。確かに、90°以上曲がる手首は気持ち悪いね……。

「背中に回した手でシューート撃つたよね？あれは、ほとんど手首のスナップだけなんだ。このくらい曲がる軟らかさと、あと大人がやつているように片手で上からボール持てるよつて出来ないと無理なんだ。だからごめんね」  
「うへんでもなー……」

まだ諦めきれないのか、自分の手首をぐにぐに曲げてこる。

……さて、本当に困ったぞ。

「真帆。ひなたちゃん。慧の言つとおりにねばっかりは諦めた方がいい」

そこに昂さんが現れた。

「えー……どうしておばるん……」

「そうだそうだ」

「ああいうプレイは、確かにカツコイイかも知れないけど犠牲も多いんだ。無理な体勢が多いから怪我につながることも多いし、ショートフォームも崩れる恐れがある」

昂さんが説得してくれるのはいいけど、これ絶対僕にも言っているよね？むしろ標的僕な気がしてならないよ。

「そうだね……悪いけど慧に実演してもうまつかな」

そんな感じに胸を痛めていたら、急に昂さんがボールを渡してきた。

「実演、ですか？」

「そう。試しに慧。その位置からジャンプショートを撃つてみてくれないか？」

「えつと……ワンハンドですか？」

「そこはお任せするよ」

今いる位置はフリースローラインから少し下がった場所。そこから撃てというのだ。ジャンプショートを。

ああ……あまりやりたくなかったんだけどなあ。説得のため。仕方

がない。

「はっ……」

膝を曲げて撃つてみると、久しぶりのジャンプシュートは違和感の塊でしかなかった。

s.i.d.e・S

やつぱり。思ったとおりだつた。

フォームはバラバラ。慧の放ったシュートはへるつとした、智花とは比べ物にならないような頼りない軌道を描いて

バックボードの2mほど上を通過した。

「あ、あれ？想像以上だ……」

慧さん。それはこいつの台詞です。

はつきり言つて想像以上の酷さだつた。その後も何球か打つてもら

つたがリングはおろかバックボードに1回も当たらないと言ひ、まさかワザとやつているのではと疑いたくなるような（ある意味）見事な結果を残してくれた。

真帆もひなたちゃんも、だんだんと羨望から諦め、最後には憐れみの視線へと変わっていた。

「けつちん元気出せ」

「おー。大丈夫。ひな、まだショート履かない」

「うん。うん。……ありがと」

経験者なのに初心者よりも酷い結果を残した恥ずかしさのあまりか、コートに突っ伏する慧を、2人は慰めていた。

ちょっとやりすぎたか。一人を諦めさせるためにやつしたことなどが、逆に慧を傷つけてしまつたらしい。でも、流石にこの酷さは放つておけないだろう。なんとか立ち直らせようと考えるが、いい案は思いつかない。相変わらず、自分の口下手せに嫌気がさす。

side · K

「けつちん元気だせ」

「おー。大丈夫。ひな、まだショート履かない」

「うん。うん。……ありがと」

みんな笑つたりはしなかつたが、思いつきり慰められてしまった。今は逆に、その優しさが痛いよ。恥ずかしくて、顔も上げられないくらいだ。

……やっぱり昴さんは気付いていたみたいだ。僕はあまりにあいつたトリックキーな技にかまけすぎて、基礎のセットショートが出来なくなってしまったのだ。ストリートで困ったことはないけど、公式の試合となると弊害が多いだろう。なにしろ、技の中には足を使つたりするのもあるし、それにモーションが大きい。

「そ、そう言えば……慧はショートを決める度に振り返って片手を上げてたけどそれはどうしてなんだ！？」

コートに突っ伏していたら、昴さんが質問をしてきた。僕はなんか顔を上げて答える。

「ええっと……ストリートの大会でダンクコンテストっていうのがあって、そのキメポーズ？みたいなものです。それ以来クセになつちゃつて……」

「だ、ダンク！？もしかして出来るのか！？」

「はい。一応

「ほんと！？ねえねえちょっとやつてみせてよーーー！」

「え？ええ？」

わけのわからない間に、真帆くんに無理矢理起こされてしまった。周りのみんなも、期待の視線を送つてくる。

「……はあ。わかりました」

「……はない。ここはいいところを見せて汚名返上とこりつい……」

「ダンクコンテストでは、目的がダンクショートを決めることがだけなのでヴァイオレーション等はないんですよ。だからボールを持って歩いても平気なんですよ」

ボールを持ったまま、ハーフラインに立つた慧が説明を始める。

「評価はそのダンクと、そこに至るまでの過程の難易度、迫力、出来映えで決めます。……それではやってみましょう」

そして、慧は右手でドリブルをしだし。そして4・5回田くらいで3ポイントラインにたどり着くとビハインドバスの要領でショートを打つた。だが、今度はさつき智花と試合した時と違つてリングから軌道は逸れて、ふんわりとした弾道を描いている。それと同時に既に慧は走り出し、その勢いのまま一気に飛び上がる。何故か、反時計回りに横回転しながら。バックボードに当たったボールは跳ね返り、それを右手でキャッチ。あいた左手でリングをガツチリ掴むと、回転していた体に力が加わったことで、リングを掴んだ左手を中心につぐりと回る。そして1回転しそうになつたあたりで体を持ち上げ、リングに背を向ける形でダンクショートを決めた。

その姿は本当に……かつこよかつた。

『…………』

しばし、俺を含めて全員がその姿に見とれていた。いつの間にか慧はすでにリングから手を放しており、ボールを持つてこっちに近づいていた。惚けていた頭を何とかたたき起こし、言葉を出す。

「なんて言つたか……その…………す」「よかつた」

「え？ほ、本当ですか！？」

「ああ……な、なあみんなー！？」

「やつぱけっちゃんすげー！！ありやああたしには無理だなー」

「おー。さつきとは別人」

「うんうん。思わず見惚れちゃつたわ」

「本当に、かつこよかつたよ」

「凄いね！！私にはあんなこと出来ないよー！」

正直、さつきまでこれからストリートの技は禁止させようかと思つていたが……決めた。慧も、慧なりに努力をしてこの力を身につけたのだと、今のダンクを見てわかつたから。  
だから俺は、慧が慧なりにバスケを楽しむことができひがむとする  
為、あえてそのプレイスタイルはそのままにすることにした。

scene・6 邪道その弱点（後書き）

感想お待ちしております。

scene・1 球技大会（前書き）

すみません！！ 風邪引いてました！！

これからもがんばって更新しますので、よろしくお願いします！！

scene・1 球技大会

プロフィール

【名前】掛樋＝C＝慧（かけひ＝クロード＝けい）

【生年月日】3／10

【血液型】A

【身長】158cm

【クラス】6年C組

【所属係】掲示係

【趣味】料理、裁縫、バスケ

【弱点】喘息。タバコの煙でアウト。

【座右の銘】大丈夫だ。問題ない。

「へえ、球技大会か。面白そうだね」

僕が入部した次の日。真帆くんたちから2週間後に球技大会があるという話を聞かせてもらつた。先日昂さんにもそのことを伝え、作戦を考えてほしいと頼んだらしい。

……水着エプロン姿で。

危なかつた！！！ 本当に！！！  
もう少し早く入部したら、危つく心にものすゞートラウマを抱え  
るところだった。

「もちろんけつちんはバスケに出るんだろー？？」

「そうだね。可能なら出たいな。まだ」

「大丈夫だよ。美星先生から、慧くんに出たい競技を聞いといてつ  
て頼まれたから」

「そうか。そういうことなら大丈夫なのだろう」

「うん。じゃあバスケットボールにエントリーしようかな。僕が美  
星先生に直接言えばいいのかな？」

「別に私が言いに行つてもいいよ？」

「いや、こういうのは本人が直接言つたほうがいいと思つてね。あ  
りがとう智花くん」

「ううん。気にしないで」

「それじゃあけつちん！！！ 今度の週末から合宿だから、ちゃんと  
用意しとけよ！！！」

「うん。わかったよ」

合宿かあ。きつとずつとバスケットをやつてられるんだろうな。

……………ん？ 合宿？

「合宿…？」

「きつ…！」

「ど、どうしたのよ急に！？」

「ちゅうちょちゅうちょつと待つて…… 合宿といつてアレかい！？」

「何日か泊まるつてことかい！？」

「あつたつまえじやん！！ あ、トランプは持つていくから安心しつけよ！…」

セレジヤない。セレジヤないんだ…… 最大の懸念は。

「ど、どうしたの慧くん！？ 風色がよくないよ！？」

「まずい。もしかしたら参加はできないかもしれないんだ」

「え？ どういうこと？」

「僕の家族は兄さんが2人と父さんなんだけど、3人とも、その……僕のことになるとすぐ口うるさくなるんだ。外泊なんて言ったらい……許可もらえるかどうか」

それ以外にも、僕が家を空けたらみんなのご飯がとても貧相なもの、もしくは3食すべて外食になってしまい可能性が非常に高い。いや、ほぼ間違いないだろう。

「そ、そんなに慧の家族つて厳しいの？」

「いや、厳しいと言つよりも心配性なだけなんだ。……時には、そつちのほうがややこしいこともあるよ」

「ま、まあとりあえず説得だけしてみたりどう……かな？」

「うん。がんばってみるよ」

「おー。けいがんばれー」

「 つてこり」となんだけビ………… 参加していいかな？」

今は夕食中。僕の家族は、どんなに遅くなろうともみんなそろいつまで食べることができない。したがって遅くなる人にはかなりの重圧がかかり、必然的にみんな早く帰るようになるのだ。

夕食時を説得に選んだのは、みんなの機嫌が一番よくなる時間帯だからだ。

まあ説得は難しいだろうけど、僕は決してあきらめない。みんなと一緒に時間を過ごしたいんだ！！ 何時間かかっても説得してみせるーー！

「うん。 かまわないよ？」

「まあそういうことは思つたんだけど、でもやつぱりみんなとつてえ？」

え？ 今なんて言つた？

「仲間と過ごす時間は大事だ。いっぱい練習していくといい」

「R e a l l y! ?」

「ああ。ちょうど父さんは今週末に仕事の都合で遠くに出張する」とになつたからね」

「俺も仕事の研修が入つてな。泊りがけだ」

「俺は友達の家に泊まるから大丈夫だ」

「え？ え？ そうなの？」

「ああ。だから何の心配せずに、楽しんで来い」

「嬉しいーー I love you! My father, a  
n d brother!」

「さつはつは。父さんたちも遊びじてるよ」

早速、みんなに報告しないことーー！

夕食を食べ終えた後、携帯電話を開いて教えてもらつたJRLにて接続する。真帆くんたちに教えてもらつた、交換日記だ。早速文章を入力する。

- 交換日記 ( 5/25 ) 03 - Log Date 5/18

ケイ

『やつたよみんなーー 父さんも兄さんたちもすぐ許可くれた!  
! これでみんなと参加できるーー』

まほまほ

『やつたなけっちゃん!! ゆじわらやくにんだーー サキ、ト  
ランプちゃんといれたかつーー』

紗季

『え。ちょっと、合宿は金曜からだつてば。準備なんて明日で良い  
じゃない。あ、でもトランプは用意してあるわよ。……もちろんま  
だ荷造りなんてこれっぽっちもしてないけれどー それより真帆！  
あなたの荷物は自分で持てる分だけにしなさいよ。メイドさん同伴  
禁止。』

まほまほ

『たりめーだ！ せつかくのおたのしみなのにひむせーお！」  
われちやたまらんー』

あいり

『ね、ねえ。やつぱり持つていつちやダメ、かなあ？……水槽』

紗季

『……だからそれは諦めなさいって。魚の方も迷惑でしょ。餌なら大丈夫だってば。家族を信頼してあげな。どうしても心配なら電話すれば良いから』

あいり

『う、うん……。『めんね。あの子たちテリケートだから、不安になつちやうの……』

ケイ

『確かに熱帯魚は水温とかに敏感だけど、きっと大丈夫だよ。ひとつよりも、ボク的にはどうやって持つていこうとしたのか非常に気になるところだつたけど……』

ひなた

『おー、大変だ。かばんが閉まらない。少し洋服へらさないとだめかな。

ぱんつ、六枚で足りる？へらしそぎ？』

あいり

『まだまだすぎだよ！……。

上下一枚ずつ持てばきつと足りると思つたけど……でも、汗かくだろうから少しは多めに詰めた方が良いかなあ？ みんなはどれくらい持つて行くの？』

紗季

『…………ねー顺利、血運?』

あいり

『えつ? ビジート?』

まほまほ

『なーもっかん、けつちん。あたしはなんまこもってく? とくに上のほう』

湊 智花

『0枚で良じんぢやない? ビジセ 必要ないもの……』

ケイ

『やつだね。…………まず、持つてないし……ね』

あいり

『あああつ! ち、ちがうの! わたし、そんなつきじゅあつ!』

つ

scene・1 球技大会（後書き）

感想お待ちしております。

## scene・2 決闘と犠牲者（前書き）

今回は結構長くなつてしましました。

それではお楽しみください。

scene・2 決闘と犠牲者

- 交換日記 (SNS) 04 - Log Date 5/19

まほまほ

『ぞけんなよっ！ もーサイアクだ！ なつとくできねーっ！』

紗季

『……はー。いい加減諦めなさ』って。間違っちゃったものはしょ  
うがないでしょ。いくらなんでも球技大会出場種目無し、ってわけ  
にもいかないんだから』

まほまほ

『なしでいいだろ！ じつたこつけやねー！』

湊 智花

『真帆、それはダメだよ……。クラスで仲間はずれって、良くない

……』

ケイ

『そうだね。クラスの仲間なんだから仲良くなないと。でも……』

紗季

『ああー……。そういえばアンタもだったわね。ケイ』

あいり

『え？ ケイくんも竹中くんと……？』

ケイ

『いがみ合つてこるつてわけじゃないんだ。ボクとしては仲良くな  
たいと思つてゐるんだけど……。どうやらボクが女の子だつてことを  
黙つてたせいで気まずくなつちやつたみたいでね。あれ以来眼もあ  
わせてもらえないんだ……』

紗季

『確かにそうね。ケイは真帆とは違つた意味でやつかにそう。でも、  
これは時間が解決してくれるんじゃないから、『恋愛に迷ふたほ  
うがいいわよ』

ケイ

『うん。ありがと』

まほまほ

『あああああああああーーー。せっかくたのしみにしていたのにだい  
なしだつーーー』

ひなた

『まほ、どうして『きげんなめ？ もひ、恋愛楽しみじゃない？』

まほまほ

『やーはーわねーけびれつーーー。でもほんとせもつとたのしかつたは  
ずなのにつーーー』

…………始めた。やつぱりとつかえす。たのしみヒヤクパーながつ  
しゅべをちかひすべでとつかえしてやつーーー』

あこり

『井、真帆ちゃん……。あんまり危ないことにしたら嫌だよつ

ケイ

『そ、 そりゃ? けがでもしたら本末転倒じゃないか』

紗季

『……無駄よ愛利、 ケイ。 いつなつたら私たちじゃ止められないわ、 このバカは』

湊 智花

『昂さん……「めんなさい。 勝手なお願いだけれど、 どうか助けて下さ……』

金曜日。 昨日までは、 今まで一番楽しい週末になると思つてウキウキしていたのだが一転。 昨日の美星先生の連絡から氣まずい週末へと変わってしまった。

原因是ツンツンヘアーの男の子。 竹中夏陽くん。

何故か彼は、 真帆くんがバスケットをやり始めた辺りから、 彼女への当たりが激しくなり、 それに伴い真帆くんの反論も激しくなる。 この悪循環が繰り返され、 教室でも激しいケンカが幾度となく繰り返されていたのだ。

そして、 そんな2人がこれから今日をあわせ3日間も一緒にいるというのだから一触即発どころか、 もうすでに臨戦態勢となっている。

「……死ね」  
「……てめえが死ね」

死ねなんて言葉は、気軽に使わないようにしてしまじょ。

いや、気軽に使わないよ。

あつちでも見たことのないようなこの状況。2人は西部劇のガンマンの決闘如く、手に銃器を持って背中合わせに直立している。

「え、てか、なに、これ？」

声に振り向くと、ちょうど体育館に入ったところで昴さんが固まっているのが見えた。僕、智花くん、愛利くんが、近づく。

「お、お疲れ様です。昴さん」

智花くんがきこりない笑顔、といふか苦笑で出迎える。こればかりはしかたないと思うけどね。

「…………智花、愛利、慧。…………ええと」

言葉が詰まるのも無理がないだろう。この状況。理由もわからずに見るには刺激が強すぎる。

昴さんはそばにいる僕、智花くん、愛利くんを見た後、決闘の当事者の真帆くん、いかにも『やりたくないけど強く頼まれて仕方なく』といった表情で背中合わせの2人から数メートル距離を置いて審判役となっている紗季くん、隅のほうに座りこの場にそぐわぬほんわかな声で『まほ、がんばれー』とちょっと場違いな歓声を上げているひなたくんと視線を移す。そして、ものすごく困惑した眼で再び僕たちに視線を戻す。

「…………ねえ、なんであの子が？…………なんで竹中が、ここに？」

さんざん溜めた末に、そう尋ねてきた。

智花くんと愛利くんが上手く説明できずに困惑し、田線を泳がせていろ。

「では、僕が説明しましょ」

「ぜひ頼む」

「実は昨日美星先生から連絡がありまして

」

だがそこで、第三者。真帆くんの声によつておえがられた。ついにあの修羅場が動き出す模様。

「待ったなしだ。サキが十を数えたところが合図。あとは先に振り返つて、先にぶつ放して、先に一発でもぶち込んだ方が勝ち。文句ねーなつ？」

「ぐどい。いちいちルールなんか確認しなくて良い。さつたと始める。……で、負けた方が出て行く。それで終わりだ」

ついに始まつてしまつみたいだ。できれば、どちらかが出て行くなんてことにはなつてほしくない。なにか方法はないだろつか……。

「……はあ。じゃ、行くわよ。 1。 2。 3。」

嫌々なのを隠そともしない、眉間にしわを寄せたままの紗季くんがカウントを始める。

最早止める手立てではなく、ちらりと横にいる昴さんに視線を移してみるが、あーに手を当ててぶつぶつと言つた後に、はつとなつて頭を左右に振つているので僕と同じように、傍観に徹することになつたのだろう。

すでに紗季くんのカウントは中盤を越え、そろそろ終わりそうなころ。彼女のカウントに合わせて徐々に徐々に近づいてくる真帆くんの顔は……絶対に何かを企んでいるであらう。したり顔だった。

「……………といひで。なーサキ、今何時なんどきでい？」

突然、真帆くんが決闘の途中にもかかわらずに、審判である紗季くんに時間を確かめる。

「？……………は？　何時つて、壁に時計あるじゃない。見ての通り……」

尋ねられた紗季くんは、訝しみながらもカウントを止めて時計を見る。

「えーと、今は四時十七ふ

」

その瞬間。ギラリと八重歯を覗かせた真帆くんが、

「ひひ、やつぱあたし天才つ！――」

本来のカウントを待たずして、紗季くんの口にした十といつ言葉に振り返る。

……とんち、なのだらつか？　これは、とりあえず、ズッコイ手だということだけは伝えておこう。

「え。ちょ、ちょっと――」

「うわははははっ！――死ね、ナツヒツ――！」

紗季くんの抗議も聞かず、真帆くんがフルオートで放ったBB弾の嵐が、夏陽くんに向かつて放たれる。それは白い白線となり、彼の体に襲い掛かると思われたが……。

「…………あれ？」

どうしたことか、白いプラスチック弾は夏陽くんを捕らえることなく「一ト」に散らばることとなつた。夏陽くんの姿は完全に真帆くんの視界からは消えてしまつていた。

「…………思つてたぜ、ビーセテめえはまた下らねーこと企んでるだろうつてな」

「…………つ……」

その声の主、夏陽くんは僕たちが真帆くんのイカサマ戦法に呆然としていた間に、一人危機を察知して、スライディングかなにかで一気に距離を詰めたようだつた。

「んこやろつ……」

危機に顔を強張らせながらも、真帆くんは冷静に得物を下に向ける。

少しタイミングが遅れてしまつたが、ここで2人の武器の特徴を述べておこう。真帆くんは「コテ」コテに装飾の施された、重くて小回りが利かないが連射能力と弾数に長じるアサルトライフル……のエアガン。対する夏陽くんはシンプルな、小回りの利くハンドガン……のエアガン一丁。

そんな、重量武器を持っている真帆くんが先に行動していた夏陽くんに間に合ひはずもなく、彼の持つそれの銃口がしっかりと真帆くんを捕らえ、

「 もうおやーつての。じゃーな、真帆つー！」

「 くく、そりやどーだか」

すべてが終わると思われたが、それよりも一瞬早く、真帆くんのもつアサルトライフルのもう一つの銃口から、何かが吐き出された。

「 グレネードつー？」

吐き出されたピンポン玉くらいのサイズのそれは、夏陽くんの顔面付近で破裂する。

「 ちよ、ちよと真帆くんつー…」

「 つー、そりやこへり向でもつー… ……え？」

「 よいよ放つておけなくなり、少し走り出したところで、それが普通の戦略的殲滅武器ではない何かだと気づいた。2人を起点に四方へ飛び散ったのはBB弾や実弾ではなく…………何故か黄土色の粉塵だった。

ちょっと香ばしく良いにおいを発する大量の何かの粉。

「 ぐふほつー！ な、なんだこりやつー？」

徐々にその範囲を広げつつある煙の中、粉まみれな憐れな格好に変貌した夏陽くんが叫ぶ。

「 もやははー！ もだえやがれつー！ 肺いつぱいにあたし特製の炸裂きなこ弾を吸い込んでもだえ苦しめつー！ ……んで、消え失せんつー」

そうか、この黄色い煙の正体は黄な粉だつたんだね。

さて、みんなは2人の決闘に注目していて忘れてているかもしれないけど、ここで一つかなり重大な事態が発生し始めている。密閉された体育館。もちろん風なんかは吹いていない。したがって、黄な粉は長々と空中を飛び回り続けて範囲を広げる。

「いーかげんにしりつ！…」この大バカつ！…」「あだつ！！」

紗季くんが真帆くんにむかってノート数冊を束ねて打ち下ろしても、なお範囲を広げる。  
したがつて、真帆くん特製黄な粉弾を吸い込んでもだえ苦しんだのは……、

「ぐつ、じほつ！…」じほつ！…」

肺が弱く、重度の喘息持ちな僕だった。

「ぐつ、が…………かひゅつ、じほつ！…」じほつ！…」「け、慧！？　おい大丈夫か！？」

はつきり言つて緊急事態。

黄な粉たちは僕の気道から容赦なく肺にまで入り込み、呼吸器は狭まり息ができなくなる。ひゅー、ひゅーと不快な音を立てた後、自由に呼吸ができなくなるまで時間はそうは経たない。

ああ……あれが炸裂した時点で早く体育館から避難すべきだったな。

そんなことを思い、みんなの心配する声を聞きながら、僕の意識は暗闇へと沈んでいった。

scene・2 決闘と犠牲者（後書き）

感想お待ちしております。

scene・3 醜聞の看病（前書き）

お待たせしましたーー！

それではお楽しみください。

scene・3 暢験の看病

「慧つ……しつかりしろ……」

「大丈夫!? けつちん!!」

「ああもつー! 波多野先生はいないし、どつすれば……」

また、迷惑をかけちゃったかな?

今、昴さんに負ふつてもうつて女子部屋に運び込まれたところだ。

「み……みん、な……」

「慧!? 無理してしゃべるな」

「だい、じょうぶ……だから。……かばんの、中に……ポーチがあ  
る、は?」

「とつて、くれないかい?」

ひゅーひゅーと音を鳴らしながらも、何とか呼吸をしてそいつに答え  
る。

「ひょっとして……これ?」

愛利くんが、渡してくれた。

「あり、がとう。……えつと」

「まつて慧くん。私が出すから。どれを探しているの?」

お礼を言つてそれを受け取ると、目的のものを探そつとする。けど、智花くんが変わりに開けて探してくれた。

「白の……プラスチック製の吸引機…………」

「半透明の、シールと……赤い錠剤……」

「えつと……これだね？」

それらは全部、喘息の発作を抑えたり出にくくするためのものだ。まず最初に、吸引機を渡してもらい、中に入っている薬を吸い込む。

「けほっ……けほけほっ……」

「だ、大丈夫！？」

「うん……少し楽に、なったよ」

次はシールだ。ちょうど気管支の上あたりになるようにそれを張る。張ったところが少しきスースーして気持ち良い。

そして最後は錠剤。夏陽くんが持ってきてくれたコップを受け取り、一錠飲む。もうすいぶん発作も楽になっていたので、ちゃんと飲むことができた。

飲んだ後、上手く体に力が入らないので布団に横たわる。昴さんが優しく毛布をかけてくれた。

「すみ、ません。……ご迷惑を、おかけして」

「何言つてるんだよ。迷惑なんかじゃない」

「は、い。……疲れたので、少し、寝……ます」

「……だろ……」

「だと…？ そもそも が 「

「う……………ん」

「あ、けっちゃん起きたか……？」

喧騒に、田を覚ました僕の視界に入ってきたのは、険悪そうな雰囲気はそのままだけど心配そうにこっちを伺う真帆くんと夏陽くんの顔だった。

「2人とも……」

「おい、まだ起きるな！！」

「そうだよけっちゃん」

上体だけでも起こううと思つたけど、2人に押さえつけられてしまつた。

なんだか、申し訳ないと言つ気持ちしかわいてこない。

「2人とも……どうして？ 練習は？」

「紗季が、あたしたちがけっちゃんに迷惑をかけたんだから……」

「2人でしつかり看病してろって」

「そつか、ありがとう。……その割にはずいぶん盛り上がり上がつていたみたいだけね」

「「う……………」」

笑つて言つた僕の皮肉に、2人は氣まずそうに視線をそらした。

「ふふ。仲が良いのか悪いのか。

「…………ごめんね。迷惑かけたね。僕のせいだ」

「ち、ちげーよ…！ そもそもコイツが黄な粉なんて使つたから…！」

「…！」

「テメーがケンカふつかけてくるからいけねーんだろ…！」

「…！」

「なに！？」

「やるか！？」

「ちょ、ちょっと2人ともおちつ

『じまつ……じまつ……』

「だ、大丈夫！？」

「しつかりしろ……」

「はあ、はあ……もう、大丈夫だよ」

薬を飲んだし、十分に休んだのでもう全然苦しくない。

「2人が気にすることじゃないよ。そもそも僕が避難するのが遅すぎたのが原因なんだから…………ね？ 僕は大丈夫だから、練習に参加して」

「いや、でも……」

そう促してみたけど、2人とも動く気配がない。

「本当に大丈夫だから」

「だつて……」

「…………そうだね。じゃあ、夏陽くんに残つてもらおうかな？ 真帆くんは、練習に参加して

「でも…………！」

「大丈夫。ちょうど、夏陽くんと2人で話したいこともあったから

…………お願いするよ

「…………わかった」

ものすじく不満げに、渋々といった様子で真帆くんは立ち上がり扉を開ける。

と、出でいく寸前に夏陽くんを振り返った。

「ナツヒ……けつちんに変なことするなよな……！」

「なつ……す、するかバカ真帆……」

夏陽くんの返事も聞かず、真帆くんはやれりと出でこつてしまつた。部屋には、僕と夏陽くんが残される。

……ごめんね、真帆くん。仲間外れみたいにしてしまつて。でも、今じゃないと……夏陽くんとじつくり話せる機会が無むから。

scene・3 駄駄の看病（後書き）

感想お待ちしておりますーーーー！

## scene・4 凝りの消滅（前書き）

更新ですーーー！

ちょっと急展開すぎかも知れませんが、これが覚醒未遂の力です。  
ごめんなさい。

そして、前回以上に短いです。

scene・4 凝りの消滅

「…………」

あ、気まずい……。

わつきは真帆くんにああ言ったけど、ござ2人きりになつてしまつた何から話せばいいのかわからなくなつてしまつ。それに、真帆くんがいなくなつたら、夏陽くんがまたそっぽを向いてしまつた。まあ、すぐに俯いてしまつた僕が言えたことじやないかも知れないけどね。

でもせつかく真帆くんが気を使つてくれたんだから、がんばらないと。何時までもこうしてはいられない。

意を決して息を吸う。

「「「めんーーーえ?」」

あ、あれ?

「ど、どひして夏陽くんが謝るんだい?」

「それはこいつちのセリフだ!! 慧が謝るようなことなんかねーだろ!?!?」

「いや僕は、女の子だと言つことを黙つていたことを謝ひつと。だって、そのせいで夏陽くんにイヤな思いをさせてしまったでしょ?」

「ん、んなこと……ねーよ」

「でも、それで気まづくなつちゃつたでしょ? そのせいできしかけてくれないのかなつて……だから「めんね」

「あ～もう～！～だから～！～！」

わしわしと頭を搔きながら、夏陽くんは立ち上がる。

「そんなのカンケーねーんだって!!」  
「単に俺が悪かつたんだよー!!」  
話しかけられなかつたのは

一  
いや  
僕か

「ハハ、集めたら儲か悪い」

「どうかこの俺が！！！」

「いや、僕が……」

「だから俺が！！」

卷之三

卷之三

思わず、2人で同時に笑ってしまった。

「ふふ……何か変だね。僕たち」「そうだな。もう、どっちが悪いとかなしでいいよな」「うん。…………ふふふ」「あつ…………」

卷之三

夏陽くんが赤くなつて黙り込んでしまつた。

あれ？ なんだかまた気まずい雰囲気になってしまった。

お、おかしいな……もう解決したはずなのに。な、なんで夏陽くんは赤くなつて俯いているの？

ひょっとして……。

「んっ……」

「うわわっ！… キュ、急に何するんだよ！…」

「う、ごめん……顔が赤いから熱でもあるのかなつて」

「だからっておでこをくつつかるなよ！… ピックリするだり…」

「う、うめん……」

「それに……そ、そもそも熱なんてねーし… ああ赤くなつてもねー

！…」

「え、で、でも……」

「…………」

「う、うめんなさこ」

夏陽くんに半田で凄まれてしまつた。

## scene・4 凝りの消滅（後書き）

やつぱり短すぎですかね？

短いのを頻繁に書かず、長いのを間を開けて投稿するか悩んでおり  
ます……。

## scene・5 修羅ふたり（前書き）

おひやじぶつですーーー！

このところ立て込んでおりまして……やつと更新できました。  
今回まにつもよつせりよつだけあらめですので、楽しんでいただけ  
れば幸いです。

それでは、お楽しみください。

scene・5 修羅ふたり

その後、練習が終わった昴さんたちが訪ねてきてくれた。みんな僕のことを心配してくれていたみたいで、もう大丈夫だと伝えるとほつと一息ついていた。

- Girls talk -

慧

「みんなごめんね。『心配おかげしました。発作も治まつたし、もう大丈夫だよ』

愛莉

「そう? よかつた。倒れた時は本当にびっくりしたから」

紗季

「……うん。顔色もいいし、無理はしないみたいね」

慧

「ははは。信用ないな……」

慧

ひなた  
「ふー。けい、すぐむつすね」

智花

「でもよかったです。明田から、部活参加でわるへ」

慧

「うそ。だれも。回復は叶こせりだから」

慧

紗季  
「やう。それならいいわ。…………で？ 真帆を追い出した、ナツヒとの逢瀬はどうだった？」

愛莉

「えつー?」

智花

「まさか2人つて……」

慧

「ななな何言つてゐんだよ…… 夏陽くんが僕を…… そ、そんなわけないじゃないか！…」

紗季

「ほほっ。夏陽くん“が”、ね……」

慧

「……っー。」

紗季

「良かつたわねトモ。強力なライバル（容疑だけだったけど）が減つて」

智花

「ふええ！？ な、なんで私なの…………」

「あ！ こら真帆つ、私のトマトつ……！」

「へへん、やらねーよつ……！」

「あ、あれ？ ここ、登れないよ？」

「おー。あいりのとかげ、変な動き。かわいい

……なんでこうなった？

僕たちは今、宿泊小屋にあるテレビに向かいゲームを興じていた。突然昴さんがそれらを抱え込み、夕食前にみんなでやるひつと言つてきたのだ。まあところどいろ、使い古された感のあるそれは、恐らく美星先生の私物なのだろうけれど。

元来ゲーム好きらしい真帆くんを中心にしだいとみんな熱中し始め、最初は乗り気じゃなかつた夏陽くんも、なんだかんだで真帆くんと一緒に楽しんでいる。……あれ？ この2人ってケンカの真つ最中じやなかつたかな？

それに、ゲームも2対2の対戦アクションゲーム（と、真帆くんが言つていた）。もしかしたら、これが昴さんの狙いのかもしない。現に、真帆くんと夏陽くんはタッグを組んで紗季くん・愛莉くんを絶妙なコンビネーションで完膚なきまでに叩きのめしているし、それを見た昴さんもちょっとびりしたり顔だ。

ちなみに僕は、みんなの遊んでいるところを見学中。理由は、ゲームをやつたことがないからだ。

「いよっしゃあ3連勝！！ よーし次こいやあー！」

紗季くんと、愛莉くんが使つていたキャラクターの体力ゲージ（と言つらしい赤いバー）がゼロになり、勝利を収めた真帆くんが大きくガツツポーズ。

「わーい。あいり、交代。よし、ひなもとかげ使おうつていつ」「こーらひな。ちょっと待ちなさい。……ねートモ、ケイ。そろそろ大体のルール分かつたでしょ？ やつてみない？」

「えつ？」

「僕もかい？」

コントローラーに飛びつこうとしたひなたくんを制した紗季くんが、昴さんの横でにこにことみんなを見守つていた智花くんと、すぐ近くにいた僕に而言つてきた。

智花くんも僕と同じくゲームをやつたことがなく、見学に回つていたのだ。

「……でも私、本当にやったことないしつ。わざと、足引っ張つちやうよ」

「僕も、こいつのは経験ないから……。それに見てるだけでもけつこひ楽しいし」

「そんなことないよ智花ちゃん。私もへたっぴだもん」

「ケイも、見てるよりやつたほつが楽しいわよ。バスケと同じ」

「こじょもつかん！ けつちん！ きひひ、手加減はしねーけどなつ！！」

「ともか、けい。とかげ使って。とかげがおすすめっていう。かわいすぎっていう」

「……早くしろよ、湊。それに、慧。バスケ以外の勝負は自信がなくて逃げるのか？」

夏陽くんにそう言われ、つこむつとしてしまう。でも、紗季くんの言つとおりなのかもしれない。こいつの時には、やってみるのも悪くないかも。

……それに、彼に挑発されて引き下がれるような僕じゃないしね。

智花くんも、参加する決心がついたみたいだ。

まあ見よう見まねだけど、精一杯楽しむとしようかな。できれば勝ちたいけど。

「えっ？ あ、こっち！ きゃあ！ えいっ！－！」

「智花くんこっちだ！ そう！ よし挟み撃ち！－！」

10分後、そこには修羅が居た。しかも2人。

目の前で繰り広げられているのは、ついさっきまでコントローラーに触れたことすらないような少女2人が、戦場を掌握しきっている悪夢の如き景色。

そう。この状況を語るに一番ふさわしい言葉は悪夢としかいいようがなかつた。特に、多少なりともゲームに心得のある人間にとっては。

何せその片割れは、一切のテクニックや応用的な操作知識を知らないまま、純粹な反射神経と動体視力だけで経験者の腕前をはるかに凌駕。もう片方は、見よう見まねから始まつたテクニックを持ち前の学習能力の高さで独自に応用し、経験者が何時間もかかつて身に着けるような高等技術を使いつつ、相棒のサポートにまわり裏でゲームを操つていた。

小学生としては規格外のバスケットボール選手、湊智花と掛樋<sup>ヒガタ</sup>慧は……その実ゲームの世界でも規格外だつたらしいのだ。

「あれ、終わり？ やつた、よくわからないけどまた勝っちゃつたみたい……！ あははっ、面白いねこれつ。次やろう次つ……！」

「やつだね。いろんな戦略立てられたりするから」「く楽しそー。  
さあ、もう1回ー！」

……………“どうしていつもなつた。

今回の目的である、ゲームで真帆と竹中を仲良くなようとひづランと一緒に考えたはずの智花はそれを忘れ興奮。恐らく俺の目的を察していたであろう慧も、ゲームの楽しさに田観めたらしく、智花と手を取り合っていた。

「……………」

これで真帆・竹中ペアは8連敗。本来負けた方はメンバー交代をする約束だったが、プライドをズタズタにされて意固地になつた2人はコントローラーを離そうとしなかつた。むしろ、紗季や愛莉、ひなたちゃんまでもが2人の恐ろしさに戦慄しつつ、鮮やかな勝ちっぷりに見惚れていた。

これはまだいい。問題は…………。

「……………おい。なんで作戦通り挟み撃ちができるねーんだ、この下手糞」

「あ？ 今のがついで一追い立て役のミスだらび下手糞」

敗北を重ねるにつれて2人の仲がどんどん険悪に戻つてしまつていることだ。

臨界点まで、残り数秒。

「……………」

長い沈黙、にらみ合い。

俺はたとえ1人でも何とか状況を開いたかつたが……あ、もうダメだ。

「 こんなんのつ」  
「 野郎ツー！」

瞬間、開幕する取つ組み合い！ いち早く危機を察した紗季と愛莉と俺が間に入つて、比較的すぐに2人を引き剥がすことには成功するが、それでもう修復しかけた関係はすっかり水の泡だった。

「 .....あ、あれ？」  
「 .....これは、一体？」

画面に熱中しすぎて周りが見えていなかつた2人が部屋を駆け回る怒声によつて我に返り、ぎやあぎやあと喚く2人と部屋の惨状を見て呆けた声を出した。

夜の终わりは、まだまだずっと先になりそうだった。

scene・5 修羅ふたり（後書き）

感想お待ちしております。

## scene・6 再び……（前書き）

昨日（田舎）は更新できなくてすみません……

書いた話を保存する前にインターネット回線を閉じると「アドレスを犯してしまいました……。

それではみなさん、お楽しみください。

scene・6 再び……

「ねえよ、んなもん……」

「嘘つけっ！－！ ナツヒがあたしに嫌がらせして止めてるんだろっ、ハートの5つ……」

次に、昴さんが取り出したのはトランプだった。これならむやみにヒートアップせずに、みんなで和気藹々とできると思つての選択だろう。

トランプという選択肢は非常によかつたのだが……やる種田を大きく間違えてしまったようだ。何気なく始めた七並べは、疑心暗鬼を生む魔性のゲームと化していた。

「くそつ、最悪だこいつ……。あたしに勝たせたくないからつてアガリよりも邪魔ばつか狙つてさ……」

「……てめえ、いい加減にしろよ。言ひがかりもつ」

ああ、最初はあんなに和気藹々とした雰囲気だつたのに……。現状では仲直りどころか、一触即発の冷戦状態がずっと続いている。しかし誰なのだろうか？ ハートの5が止まっているせいで、誰も出せない状態がずっと続いている。まあ確かにこの冷戦状態のなが、今更出せないというのも無理なけど。それにしても、せめてジョーカーを持つている人も出せば状況も動くはず……って、こつちも同じ理由で出し辛いか。それでも、この空気は非常に居た堪れない。いつの間にか、僕はみんなの一挙手一動を觀察し、犯人探しみたいなことをしていた。

「……え、えっと。パスです、『めんなさい』

蚊の鳴くような声で、愛莉くんが自分の番を飛ばした。

彼女も違うみたいだ。だれだろうな、ハートの5、もしくはジョー

ーを持つている人は……。

「…………ん？」

「おー。けい、どうかした？」

隣に座っていたひなたくんが声をかけてきた。

「あ、いや……なんでもないよ」

そう、別にたいしたことはない。

みんなも、こういう経験はないだろ？ 今、僕たちは車座になつて足元に座布団を引いて座つている。最初、真帆くんがトランプを一枚一枚飛ばしてに華麗（？）に配つたんだ。そしたら……ね？ 大体わかるだろ？

何気なく体制を変えようとして座布団に手をかけたときに……ね？ 触れてしまつたのだよ……畳との間にあるプラスチック製の薄いカードに。

ははつ。はははははははははははは。  
どうしよう。

僕に勇気が足りなくて、座布団をめくることができないので確認はできないが十中八九ハートの5、もしくはジョーカーだろ？ 犯人は僕だつたみたいだ。これがもしハートの5とかだったら洒落にならない……。みんな、ごめんね。疑つたりして。そして今ハートの5、もしくはジョーカーを持っている人……気持ちがよくわかりました。

「あ、あの。昴さん、やつぱりどうかされましたか……？ 少し、顔色が……。もし体調が優れないようでしたら、お願ひですから無理しないで下さいね？」

智花くんの声に顔を上げると、自分の持ち札を凝視しながら顔を真っ青にして固まっている昴さん。汗の量も普通じゃない。……いや、あれは冷や汗か。どうやら昴さん、あなたは僕と同じ道をたどつているようですね……。

「慧くん？ なんだか慧くんも顔色悪いけど大丈夫？」

「はつはははは。だいようびだ。もんでいねい」

「おー。けい、かみかみ」

やはりこじは、素直に謝罪するべきだなあ……。や、それに。日本には罪を憎んで人を憎まずということすばらしことわざもあるじゃないか！ うん、わけを話せば、みんなきっと許してくれるだろ。正直に謝るわ。……次の順番がまわって来たら。

自分の優柔不斷が憎いシ――

いやいや、そこは普通に今謝るべきだ。後に伸ばしていいわけがない。むしろ悪化するに決まっている。昴さんもカードを握り締めて、覚悟を決めた男の顔になっているし……。謝るなり、ここだ。

「あーっ！ やつぱなナツヒ持つてゐる―― 今見えたハートの5つ――！」

その時、真帆くんが立ち上がり、夏陽くんを指差した。

「はあつー？ 持つてねーよー… ってかなんで人の手札覗いてん  
だよー！」

濡れ衣を着せられた夏陽くんも立ち上がり、声を荒げて真帆くん  
を睨んだ。

「嘘だ嘘だつ！ 赤いの見えた！ 違うつてんなら持つてるカード  
全部見せてみろー！」

「馬鹿か！！ まだ途中なのになんで見せなきゃいけないんだよー！  
！」

「ほりそーやつて」まかすつー やつぱり持つてるんだー！  
！」

「…………」止める、そわんなつー！

「うがーー！」

「ぐがーー！」

……そして、再び取つ組み合い。

みんなで必死に引き剥がした後、僕と昂さんは深い深い溜息をつ  
いた。

トランプも徒労に終わり、ますます2人の関係は悪化していくけど、お腹が空いては何もできない。とりあえずみんなで夕食を作ることになった。

「……それで、どうしてカレー？」

「多分、お泊りの定番メニューだから、じゃないかな？」

僕が何気なくつぶやいた疑問に、愛莉くんが答えてくれた。

「そういうものなんだね……ありがとう愛莉くん。教えてくれて」「ううん。いいよ。アメリカでは、こういうことなかつたの？」

「転校も多かつた僕は、学校の友人だけでお泊りなんてほとんどしたことがなかつたから、そういう定番メニューとかはわからないんだ。家族同士とかなら何回かしたことはあるけど、そういう時は大抵バーベキューだったからね」

「バーベキューかあ……それも楽しそうだね」

「ふふ、そうだね」

ひとしきり笑った後、智花くんの指揮下へと入る。何故だかはわからないが、昴さんに一任された智花くんはすく張り切っているし、僕としても初めてみんなと作る料理…………。楽しく、そしておいしく作れたらいいなと思っていた。

「そ、それじゃあ真帆と竹中君はルーを作つてもらおうかな……！ 真帆、はいカレー粉つ！ これをフライパンで煎つて香りを出してね。竹中君は、この小麦粉とバターを

「……粉？」

「……粉」

材料を手渡された2人が、その手元と隣に立つ憎き宿敵を交互に見やる。

「……えつ？」

そして。

『 粉！－！』

その後、僕の記憶はない。夜中に目覚めた僕は、土下座する真帆くんと夏陽くん。そして2人の頭を拳骨で何度も叩く紗季くんに状況を説明してもらつた。

あの瞬間、2人の手の中にあつた小麦粉とカレー粉はぶつかり合い部屋の中を隙間なく覆い、僕は再び激しく咳き込んで倒れたそうだ。

ちなみにその後、僕以外のみんなは粉まみれになつた小屋の掃除に追われ、夕食は肉入り野菜炒めとなつたらしい。

紗季くんが作ったという野菜炒めは、すぐおいしかった

た。

## scene・6 再び……（後書き）

原作読んでいて思ったのですが、ジョーカーは誰が持っていたのでしょうか？  
もしかして、七並べにジョーカー入れるのって地域ローカルってやつですか！？

scene・7 慧の朝餉（前書き）

はいっ。更新です。

短いですがご勘弁くださいませ……。

「フーンフーンフーンフーンフーンフーンフーンフーンフーンフーン

フーンフーン」

「何でアメリカ国歌

」

振り返ると、夏陽くんが腰に手を当てて呆れるように立っていた。

「ああ、夏陽くん。おはよっ」

「お、おひ……」

「随分早いお目覚めだね。よく眠れた?」

「まあな……」

照れたように頬を搔く夏陽くんから目を離し、再び視線を前に向ける。

「つひいうか、お前こそちやんと寝れたのかよ。こんな朝早くから

ら……今5時半だぞ?」

「こや、昨日はお陰様ですっと寝たままだったからね。こつもゆつ

早く目が覚めたんだ」

「ぐつ……そつかよ」

彼の気まずそうな声に思わず小さな笑いがもれる。作業を手を動かしながら、続けた。

「それもあるけど、本当はいつも起床時間はこのくらいだから気がしないで。……あ、もうそろそろ出来上がるから、食べる?」

朝食

「えつ? ……い、ここのか?」

いつもはハキハキとした、遠慮という言葉を知らないかのようになると話すのに、戸惑ったような声がなんだかおかしくてまた笑ってしまった。

「ふふふ……遠慮しないで。むしろ、みんなのために作ったんだから。『コンビニの菓子パンやおにぎりだけじゃお昼までもたないでしょ？……まあ、大したものじゃないけどね』

「そ、そうか。…………んじゃあお言葉に甘えて」

「うん。じゃあ座つて。すぐに用意するから」

背中を向けているから見えないけど、床を椅子が擦る音が聞こえたので座ってくれたことがわかった。その事がちょっとびり嬉しくて思わず頬が緩んでいることに、僕は気づいてなかつた。

10分後、夏陽くんの目の前に今田の朝食が並んだ。白米、ジャガイモの味噌汁、ニンジンの浅漬け。あと、肉と玉ねぎの味噌炒めだ。所詮昨日の夜の余り物から作ったものだから大したものはない。まあ、なぜか味噌とか塩とかその他諸々、基本的な調味料があつたのがラッキーだったかな？

「ごめんね。有り合わせだから大したもの作れなかつた」

「い、いや……十分、旨いぞ」

「そう？ それならよかつた。遠慮しないで食べてね」

「ありがたい」と、夏陽くんは文句も言わずに黙々食べてくれた。

夏陽くんが使った食器を片付けた後、お茶を飲みながらのほほんとしていた。朝は、やつぱり慌ただしいのよりもんびりしたほうが好きだな。我が家は男性陣はみんな寝坊助だから、僕が起こさないといつも慌てて出かける準備をするめになら。みんな、ちゃんと起きられてるかな？

「あれ？ 慧くん？」

心配になつて、電話の一本でも入れようかと思つていたら、控えめな声が聞こえてきた。振り返つてみると、ドアに手をかけた状態で固まつている愛莉くん。

「おはよひ愛莉くん。よく眠れた？」  
「う、うん。おはよう。慧くん早いね」  
「まあいつもこのくらいだからね。みんなはもう起きた？」  
「あ、うん」  
「おはよーけっちはうおー!? なんだなんだー!?」  
「こ、これ……ケイが用意したの?」  
「おー。おはよー」  
「うわあ…………こいこおい」  
「ああ慧、おはよひつて……なんだこれ?」

愛莉くんの後ろから、みんながやってきた。

視線の先はテープルの上。実は、夏陽くんが使った食器を片付け

て少し経つた頃に、そろそろみんなが起きてくるかなと思つて人数分を並べておいたんだ。それを見て、驚いているよつだつた。

「余計なお世話かもしけないけれど、みんなの朝食を作らせてもらいました。菓子パンやおにぎりだけじゃお腹が空くだらうし、栄養も偏りますからね。大したもののがなくて申し訳ないですが……」

「余計なお世話なんかじゃないよ。いやあすこへ皿わづだ……ありがとうな、慧」

「いえ。お気になさりやす」

鼎さんがお礼を言つとともに、頭を撫でてきた。うーん……前から思つていたけど、鼎さんって頭を撫でるのが好きなのかな？お礼を言つ時や、褒めたりする時はほとんど必ずと言つていいほど頭を撫でてくる。別に嫌な気持ちにはなりはしないんだけど……正直ちょっと子ども扱いしすぎじゃないか？まあ、彼にとっては僕たちなんかは子供なんだろうけど。

「さあ、みんな食べて！ 体力つけて練習がんばろう！」

『おーーーーー』

いただきます。ヒ一声かけて、料理に手を出していく。ふふ、やっぱり人数が多いとにぎやかになつていいな。

「うまいーーー！ けつちんの料理最高ーーー！」

「おー。にんじんおいしい」

「やうかい？ お世辞でも嬉しいよ」

「そんなことないよ。本当においしい。羨ましいなあ……私、お料理へたつぴだから」

「悔しいけどホントにおいしいわ。確かケイつて毎日家族の食事作つてるんだっけ？」

「うん。家の家族は全員料理できないから

「そりゃおいしくなるわけだわ……」

「つう」のお味噌汁も、漬物も……炒め物もおいしく……

「まざいわよトモ～。これは点数高いよ～？」

「「ひっ」……」

みんなの言葉が、食べて笑顔になってくれるのが純粋に嬉しい。  
でも、なぜか智花くんが落ち込んでいて、紗季くんがニヤニヤしているのが気になるな……。嫌いなものでも入っていたのかな?  
ふと、テーブルの端に座っている昴さんに皿を向けると、彼は黙々と食べていた。

「どうですか昴さん。お口に合います?」

「ああ。とつても皿によーー。これ、昨日の残り物、だよね?」

「はい。もったいなかつたので、使わせてもらいました……だ、ダメでしたか?」

「いやいや、そんな」とはないぞーー。この味噌汁なんかすげくおいしい。

慧はいいお嫁さんになるな

「お、お嫁さんだなんてそんな…………僕なんて誰も貰ってくれませんよ」

また、頭を撫でられてしまった。思わず一言を言われてしまい、  
顔の温度が急激に上がってしまつのがわかる。

それ、「

若干みんなの（なぜか）羨ましそうな視線が気になった。

scene・7 慧の朝餉（後書き）

ちよつと、自分を卑下しがちな慧でした。

やつぱり朝食はしつかり摂らなきゃですよねーー！

感想お待ちしております。

scene・8 氷の絶対女H政（前書き）

はいっ。更新です。

楽しんでいただければ幸いです。

scene・8 氷の絶対女王

ジャ一 カチヤ、カチヤ…………キュツキュツ。

みんなでワイワイと朝食を食べ終え、何度も断つても引き下がらずになぜか粘り続ける智花くんと一緒に食器を立付けていた。

「ありがとう。手伝ってくれて」

「うう。せめて私もこのくらいにはやつておきたいかい……」

僕が洗った食器を、智花くんが拭いて棚へと戻していく。上のほうにある食器も使ったので、僕よりも上背が低い智花くんがそこへ食器を戻すのは少々危ないのではないかと思つたけど、近くに踏み台もあつたので大丈夫だった。

「やつぱつこいつこつ細かなといふでも手際が違うね……家事とか全部自分でやつてるの?」

食器を洗つてこらの僕の手を見ながら、智花くんがそつ尋ねてきた。

「うん。みんな忙しいからね」

「えつとその……慧くんのお母さんつて…………？」

「え?」

ぎくり、と。心臓が驚撃された気分だった。

「あ、うー、うめんなれーーー」

僕の動きが止まつたのを見て、触れてはいけない話題に触れてしまつたのだと思ったのだろう。智花くんは申し訳なさそうな顔をして謝った。

「ううん。気にしないで」

そういうて笑つてみたものの、鏡を見なくてもわかる。上手く表情が作れていなくて、ぎこちない笑顔に違ひなかつた。あの人の話題は……して欲しくなかつたから。

「今のお前にバスケで勝つても、当たり前すぎて決着にならねーんだよ。そんなの俺が納得できない。だから、バスケでケンカ売るんなら、もっと上手くなつてからにしろ」

智花くんと共に、遅れて体育館にやつてくると、足元からボールを拾い上げ、真帆くんに強く投げ渡した夏陽くんがそう言つていた。反射的にボールを受け取り、そんな思いもよらない言葉を掛けられた真帆くんはしばし呆然とする。 だけど、

「な、なめんなつ！ あたしだつて……ひみ、やめひつ……離せ  
つ……」

すぐさま違和感を払拭するよつに声を荒げて臨戦態勢に入りつとする真帆くん。それを察していた僕たちは彼女を押さえつけて、更衣室へと引っ張つていく。

「落ち着け。今は練習の時間だろ。みんなでバスケ、する時間だ」「そうそつ。みんなで……ね」

今日これからは慧心学園バスケットボール女子部ではなく、6年C組としてだ。

紗季くんと僕の言葉を受けた真帆くんは暴れるのを止め、

「くそ、ナツヒめつ！ あとで覚えてろつ。あたしの実力、絶対に思ひ知らせでやる……」「

ぐるりと向き直つて自分の足で、更衣室に入つていった。それに、僕たちもついていった。

後ろでは昴さんが、ニヤニヤしながら「ひーか満足げに夏陽くんをからかつていたが、なかなか良いコンビだと思つて何もしないでおいた。

それから着替え終わると、8人で練習を開始した。

女子の練習メニューであるため夏陽くんには少々退屈だつとは思つたけど、文句の1つも言わずに淡々と足並みをそろえてやってくれていた。

真帆くんも、以前までのよつとうげとうげしい態度がいくらか軟化した彼の存在を居心地悪そうに意識しながらも、輪からはじき出す

よつね」とはしないでいた。

「……ねーすばるん、ズルしなかつた?」

「……しただろ、絶対」

「ズルなんてするわけないだろ。平等にくじで決めた結果。文句はいいっこなしだ」

モップ掛け等をして体育館をきれいにした後、昼食の準備をすることになった。今回のメニューはお好み焼き。お好み焼きは僕も作つたことないし、食べたこともないので作るのがすごく樂しみだ。ちなみに、今回のメニュー提案も鳳さんだそう。

そして今、くじで班決めをしたところだ。真帆くんと夏陽くんはそろって2人仲良く生地つくり担当となつた。ちなみに僕は、紗季くんと一緒に食材を切る担当になつた。まな板と包丁を用意して、愛莉くんたちが洗つてくれたキャベツやイカ等を小さく切つしていく。

「……はあ、ホント慧の手際いいわね。羨ましいわ

「そんなことないよ。紗季くんの手際だつていじやないか

キャベツの千切りをしていたら、紗季くんから羨望の眼差しを向けられ、しみじみとつぶやかれた。そういう紗季くんだつて、かな

りのスピードと正確さでイカを次々にさばいているの」……。

「私も料理にはそこそこ自身があつたんだけどね…………やつぱ主婦にはかなわないか」

「いや、僕は普通に独身なんだけど…………」

といふじる、視点がズレているような気がしてならなかつたが、特に気にしなことにした。

「うん。これだけあればもう十分ね。『苦勞様、慧』

「うん。紗季くんこや」

「じゃあ私はこれを向こうのテーブルに置いてくるから、悪いけど包丁とか片付けてもらつてもいい?」

「わかつた。よろしくね」

そう言つて、切つた食材を持つた紗季くんが台所から離れた。少し離れた場所にあるテーブルにそれを置いてくるついでに、夏陽くんと真帆くんの方を見に行くつもりなのだろう。

何があつたかはわからないが、前からあつた夏陽くんの真帆くんに対する尖つた感情が朝から影を潜めていた。いや、完全になくなつていたといつても構わないだろう。時々見せる、昴さんの満足そうな笑みを見るに彼が何かやつたのか、それともこの合宿を期に夏陽くんの心情に何かが大きな影響を与えたのか……。

いざれにせよ、もう2人は大丈夫だろう。以前紗季くんが教えてくれた、仲の良い2人にその内戻るはずだ。

また1つ、これで問題解決した気になつた僕は（別に僕がなにかやつたわけじゃないけど）頬を緩めながらまな板や包丁を洗い始めようと、スポンジに手を近づけたところで……

「誰っ！？」この山芋下ろしたのは……」

今まで聞いたことのないような、怒声が部屋中に響いてきた。

「あ、あたし、だけど……？」

続いて恐る恐るといつた声色の、真帆くんの声が聞こえてきた。

「あんたねえ！ こんな目の粗いおろし金ですってどーすんのよ！…！ これ全然滑らかさが足りない。何のために生地に山芋混ぜると思ってるの？ ダメ。もつときめ細やかにしないと全然ダメ。これもつ一度すり鉢で……あーやっぱいいわ。真帆じゅどうせ上手く出来ないでしょ。私がやるから大人しく見てて。 って夏陽つ！…！ あんたは何でかそつとしてるわけっ！？」

まるでマシンガンのような凄まじい勢いでダメ出しをする声は紗季くん。急いで洗い途中だつたまな板を立てかけて急いで向かう。すると、夏陽くんがボウルを抱えたままじろいでいた。

「粉と、だし汁を……」

彼の返事を聞き、信じられないほどばかりに田を見開いた後すぐにキッと細めると再び紗季くんは一悶。

「余計なことはしなくていいっ！！ そのだし汁、今冷ましてるところなんだから…！ そのまま入れたら熱で台無しになるでしょう！？ ……だいたいあんた、今日分量で入れようとしてなかつた？百年早いっ！！ その配分比が記事の一一番の決め手になるのに……

……こい。もういいわ、2人とも。いつくん、トモも愛莉もひ

なもケイも「苦勞様、あとはみんな席について待ってなさい。他の下ごしらえは終わつたし、残りは全部私が

「わよちよちよちよつとまつたー！」

先程ここでやかに僕のとなりで一緒に食材を切つていた彼女はどこに行つた！？

いきなりみんなに戦力外通告をした紗季くんに待つたをかける。ゆらりと上半身をねじらせてこちらを向く紗季くんは形容しがたい形相をしていて、正直声をかけたのを一瞬後悔した。

「何…………？」

その地の底から這いずり出してきたよつな声は、異論は認めないと暗に言つてゐるようで、さらに僕の勇氣を削いでいく。心なしか、みんな（鼎さんを除く）が同情の眼差しを送つてゐるよつな気がした。

「いや、その…………りょ、料理はみんなで楽しくやるものだと思ひし。  
……その、そんなに丑ぐじらを、立てなくともいいんぢゃないかな  
」……とか、みんなで作ればいいのではーとか思つたりしちやつたり……」

「うう。昔日本のヤクザ映画で見た「なめてんのかわれ【字がわからないよつです・覚】」的な鋭い視線に耐えられない。思わずだんだんと声は小さくなるし、視線もそらしてしまつ。それに、何故だか胃が痛くなってきたよつな気もする。

ふ、と紗季くんが不適に笑うと腰に手を当てて氷のような視線で見上げてくる。

「…………ケイ。あんたはお好み焼き…………作ったことある？

「きょ、今日初めて見ます」

「だつたら素人は黙つて見ていいなせいーー！　お好み焼きをナメンじやないわよーー！　お好み焼きはね、千切り3年・混ぜ8年・焼きは一生ーー！　少し料理をかじつたくらいじゃおいしく出来ない職人業なの。わかつた！？」

「Y e s , s i r ! !

「おお、ネイティブな英語」

すゞしじと退散し、みんなと一緒にちやぶ台に乗せられたホットプレートの前へお行儀よく正座。座つてからも体の震えと冷や汗が収まらず、たまらず自分の体を抱く。

「だ、大丈夫？　慧くん」

恐る恐る、愛莉くんが心配そうに話しかけてきた。自分が怒られたわけでもないのに、怯えていたようで声は震えている。それほどすごい迫力だった。

「一瞬……死を覚悟したよ。さ、紗季くんは一体……どうしたんだい？」

「紗季ちゃんのおつかひと、お好み焼き屋さんなの。慧くんは知らないかな？　すずらん通りアーケード街にある『なが塚』っていうお店なんだけど」

「うへん……「めぐ。わからないいや」

基本的に僕の家では外食はしないので、僕はスーパー・やスポーツ用品店くらいしかお店は把握していない。愛莉くんの口ぶりではなかなか有名なお店みたいだ。

「そつか。すゞしおいしいから一度行ってみるといよ？　……そ

れで紗季ちゃんはね、昔からよくお店のお手伝いをしてたみたいなの。前に、みんなで焼きそばパーティをしたことがあるんだけど……その時も紗季ちゃんが全部焼いてくれて、私たちはお野菜切つたらもう休んでいいよって言つてもらつて……す、凄く楽だつたよ

父ちゃんから聞いたことがある。日本には、鍋にかなりのこだわりを持ち、あまりにも愛しすぎるが故に一から十まですべてを仕切らないと気がすまない人種がいると。確かにその人に任せれば凄くおいしく食べることが出来るけど、もの凄い緊張感の下で食べる破目になると。その人種の名は 鍋奉行！！

とりわけ紗季くんは、その派生形で鉄板奉行とでも言えればいいのだろうか？

「I」これが……Japanese dictator日本の独裁者

「え？ それってどういう意味？」

「出来れば気にしないで欲しい。聞き流して」

「う、うん」

それから慣れない正座で、頭を捻りながら紗季くんが生地を運んでくるのを待つ。

お好み焼きは大変おいしうまいぞいました。

初めて食べたから一般的な味がどの程度なのかわからないけど、みんなの顔を見る限りはかかるの腕前みたい。

でも何故か僕を含めてみんな あの夏陽くんや真帆くんまでもがびしつと背筋を伸ばして自主的に正座をして無言で黙々と食べ進んでいた。

.....父さん。あなたの言いたいことが身にしみてよくわかりました。奉行という人種の恐ろしさが。

食べ終わった後、みんなと一緒に後片付けをすることが僕は出来なかつた。理由は、足がしごれてそれどころではなかつたためである。

## scene・8 氷の絶対女王（後書き）

慧の母については、その内オリジナルの章で触れます。

まださわりしか出来ていないので、更新しつつ内容をねりねりしたいと思います。

## scene・9 素直にならぬ（醍醐味）

はこ。更新です。

今回わざと毎回、じつこの量ですか。

それではお楽しみください。

scene・9 素直にならひつよ

- 交換日記 (SNS) 05 - Log Date 5 / 21

まほまほ

『みつけたっ！ ジれならこける！ こんどいそいける！…！ アイリーンたちはどうだつ？』

あいり

『う、うん。一応、言われたものは全部買つたけど』

ひなた

『チョコも、買つたけど』

ケイ

『ついでにジュースも』

まほまほ

『よつしや でかした！ チョコもジュースもでかした！ そいじゃ「ふん！」こわーーー…』

紗季

『コンビニ組が5分で戻れるかバカ。つたく、一人で張り切っちゃつてもー』

湊 智花

『ひとつちの掃除も終わつたよー。うふふ、もつ小石1つ落ちてないから安心してー。』

紗季

『あー。ずいぶん黙々とやつてゐなつて思つたらそばにもつ1人いたか、やる気満々……。

ふふ、しょーがないな、もう』

午後からの練習は、男バスがコートを使うといふことなのでお休みになつた。なので真帆くんが昂さんから許可を貰い、みんなで外へ遊びに出かける。でも、最初からみんなわかつていた。遊びと言つても、何をするかくらい……。

「アイリーン、もーちょい右つ！」

「こ、こっち？」

「行きすぎつ！！」

愛莉くんに肩車された真帆くんが大まじめに指示を出している。

今、僕たちは学校から少し歩いたところにある広い公園の中。そこで、底に穴の開いたポリバケツをロープを使って大きな木の幹に縛り付けて即席のバスケットゴールを作ることにしたのだ。発案は、なんと真帆くん。

今は自由時間だと昴さんから伝えられている。だから本来、遊んでいても何も言われないはずなのだ。それでも、真帆くんの意見に興奮気味に笑う智花くん。呆れ気味に苦笑する紗季くん。控えめに笑う愛莉くん。いつも通りの笑顔のひなたくんは驚きはしたもののすぐに賛同した。もちろん僕もだ。

近づいたら危ないとのことで、少し距離を置いて真帆くんと愛莉くんの作業をみんなとみているが、悪戦苦闘する2人がすごく微笑ましくてつい頬が緩んでしまう。ふと、紗季くんと田が合つてお互いに苦笑。2人の危なつかしい作業を見ながらも、真帆くんからあらかじめ手伝いは不要だと言われているので手は出せないから。

四苦八苦している2人を眺めていたら、僕のすぐ横をずんずんと2つの人影が通り過ぎていった。

「 無理だよ、そんなんじゃ」

「…………夏陽？」

「おー。おにーちゃんど、竹中だ」

そして大樹の前でぶつかりまづつな声を出す。

みんなの注目をいつぺんに集めたのは夏陽くんと、彼に腕をつかまれた昴さんだった。

「…………っ！ 何しに来たんだよっー？ 今、忙しいんだから邪魔すんな！！」

だけども真帆くんだけは一瞥しただけですぐに向き直り、再びポリバケツをくくりつける作業に没頭したかのように見せる。

「おい」

そんななれいな強がりを尻目に、夏陽くんは後ろ指で木のほうを指差して昂さんをあいで促す。

「……ふ、あこよ」

苦笑いを浮かべながら、愛莉くんの傍まで身を寄せた昂さん。そして腰を屈め、夏陽くんを肩に乗せて、真帆くんの隣へと並び立てた。

「な、何のつもりやつ……」

驚きつつ、真帆くんが声を荒げて夏陽くんに抗議する。

「真帆、お前はバケツ押さえてる。……ロープ、俺が結ぶから  
「……竹中、君」

隣の愛莉くんが嬉しそうな声を上げる。僕たちに背を向けているから表情は見えない夏陽くんだけ、もう彼の声に棘はなかつた。紗季くんと再び顔を見合わせ、また苦笑。……いや、微笑みあつた。

「…………よ、よけーなお世話つ……だいたい今さら何だよつ……！ そんなことしたつて、ゆるしてやらないもんつ……あ、謝れつ！ 手伝いたいんなら、まずは謝つてからにしろつ……」

「悪かった」

「謝つちやうのかよー？」

「シカトして……」

「お前の」と 悪かった。ちょっと、勘違いしてた、

「深く、頭を下げた。

「~~~~~っ！……お、おこやめひよつ。なんかカコイだろ。わ、わかりやーいいんだわかりやーっ！…だ、だからナシヒツ、ひとつと頭上げろ…らしくねーからっ…」

真帆くんはたちまち顔を真っ赤に染めて、正視できずにあわてて頭を振る。

でも、それ以上は拒絶しない。

「……ロープ、貸せよ」

言われるままに頭を上げ、しつかりと真帆くんに向かって立った夏陽くんが、ぎこちなく促す。言葉に窮した真帆くんは口を開け、田線をそらしたままロープを乱暴に押し付けた。

「よつと」

掛け声と共に夏陽くんが昴さんの肩から飛び降り、

「……出来たぞ。じゃーな」

大樹にがつちつとくぐりつけられたポリバケツに背を向けたまま、まっすぐ公園を後にしようとする。

それをみた紗季くんが、肘で真帆くんの肩をつついた。

「(……ほら、真帆)」

「(うえ、やだよ！ なんであたしべつかー)」

「(いやこや、じいはせやつぱり真帆くんじやなわや……)」

「おー。たけなか、行つちゃうよ？ ねーたけな

「(ひなちゃんつ、ダメつ。今は真帆ちゃんじやないと)」

「(おー。えうして？)」

「(あはは、ひなただと、上手く行き過ぎやうから、かなあ……?)」

「(あーほり真帆、早く行きなさいー 夏陽帰つちやうーー)」

「(…………つたいな！ 叩くなよー あーもうつー わかったよ、行きやいいんだろつーー)」

命わせたわけでもないのに、みんなで真帆くんを代表としてまじめに叫びた。

「ナ、ナシヒつーー 待てよつーー」

そして走り出し、2つの結び田をなびかせて、とぼとぼと歩く意地つ張りな少年を留めに向かった。

「…………なんだよ？ もだ、何か用かよ？」

「プラン」の前。呼びかけられた夏陽くんはそっけなく振り返ると、後ろ髪を搔きながらぶつきりぱつに返事をする。

「い、一緒にやつて」「—ゼツ、バスケ！」「—ゴール作るの手伝つてくれたお礼に、交ぜてやるからさ！！」

「…………別に、そんなつもりで手伝つたんじゃねーし」

「んなつー、なんだよこいつちが誘つてやつてるのこつ！？」

この期に及んでまだ意地の張り合いをする2人の会話は、たまらなくもどかしくも…………どこか微笑ましかった。

「…………よーし、じゃあ今日は俺も、一緒に試合しようかな。さあ、みんなで一緒にこの前みたいに2人組みになつて、チーム決めしよつ！」

進まない状況のなか、僕たちに目配せをした昴さんが大声で宣言した。ほんの少し、気持ちばかりのサポートのつもりだらう。

「は、はいっ！……じゃ、じゃあ昴さん。ぐーぱーお願ひしますつ  
「ああ。いいぞ」  
「じゃあ紗季くん。僕と」  
「ええ。オッケー」  
「じゃあひなちゃんは、わたしどー！」  
「おー。いいよ」

すぐに昴さんの意図を察して、すんなりと組み決めを開始した。

「…………余つたな、お前」  
「う、うるせーつー！」

「ヤーヤとした笑みと、歯をむく怒り顔が交差する。お互に言つべき台詞がわかつてゐるはずなのに……。なかなか言い出せず、『めいめい』と田をそらし合ひ。

「……仕方ねえな。一人、足りないみたいだし。

『ほり

もう言つて、夏陽くんがふつきりまづに拳を突き出した。

「初めから、もうしろつ……！」

そこに真帆くんも手を伸ばす。何の台詞もなしに、同時に2人は組決めじゃんけんを始めた。

「おっしゃーーー！ まやはあたしの華麗なショートで……お？

手作りゴールと、不恰好なラインの中で開始された4〇n4。いつもの斜め45度ポジションから、真帆くんがポリバケツに照準を合わせてボールを掲げたところへ、それを阻む形で、さつと田の前に夏陽くんが立ちはだかった。

「相変わらず、そこのショートだけか？ ……来い、抜いてみるよ

真帆「

不適な笑みで挑発を向けられ、一瞬だけ面食らつたようなそぶりを見せた真帆くんだけど、すぐに口元を歪め、八重歯を覗かせて吼える。

「ひひひ。よーやく、認める氣になりやがったな、あたしの実力をつ！！」

「……別に。教えておいてやるだけだ。真帆がまだまだ全然、バスケじゃ俺の足元にも及ばないってことをな。ちょっとオトナゲねー気もするけど、お前がこれからもバスケ続けるつてんなら仕方ねえ。これでもかつてほど、やつづけてやる。何度も、何度もな。……お前が俺に歯向かうかぎり、何度も」

「ばーか、いつてろつ！！」

満面の笑みで抜きにかかる真帆くんだったけど…………。

「…………あれ？」

「…………うわ。お前、ドリブルは本氣でダメダメだな。あー、悪い悪い。やっぱまだ、まともに相手するのは早すぎたわ」

あつけなくボールは奪われて夏陽くんの腕の中へ。

「ち……ちっくしょー！ ももも、もつー回つー！ もつー回あたしのドリブルからつー！」

「ーーー、わがまま言つくなつ。今度は私たちの攻撃でしょ」

「ごねる真帆くんを紗季くんは叱るが、言葉とは裏腹に穏やかな笑みを浮かべている。

「ふふつ、大丈夫だよ真帆つ、すぐに仇は取つてあげるからつ……」

「……おいおいあんまナメんなよ湊つ……！ 今度こそ負けねえ！」

完璧に抜いてやる……！」

「たけなかー。バスー！」

「え。……おひ！」

「ちょ、バカつ！ 何やつてんの……！ ひなは敵でしうが……！」

「…………あ！ し、しまつた……！」

「えへへ。竹中君、ひなちゃんと同じチームがよかつたよね。『めんね』

「ばつ……ぜ、ぜんぜんそんなことねーよつ……！」

「さあ、攻守交替。行くよ智花くんつ……！」

「うん……！」

「…………つて、ちょっと……！ それ反則じやねつ……？」

「はつはつは。いやだなあ。グレーボーンだよ

137

みんなの歓声が、木々で囲まれた公園に響き渡った。  
この時になつてようやく、合宿開始から初めて僕たち8人全員が心の底から笑いあつた瞬間だ。

みんなで大騒ぎして、笑い合つて、ルールやチームなんかもそのうちなくなつて、ストリートよりもめちゃくちゃな、でも何よりも楽しい。ただただ本当に楽しいだけのバスケットを、ボールが見えなくなるまで堪能した。

練習とは程遠い、楽しむだけのバスケだったけど、そんな楽しい時間が僕たちの成長を促しているようだ……。僕たちは、どんどん強くなれるよつな気がした。

そして完全にボールが見えなくなつて、へとへとになつて小屋に戻ると、

ちやぶ台の上にケーキと大量のデリバリー・ピザが乗つかった。

scene・9 素直にならつよ（後編）

せつと仲直りできました。

次回は……もう少し慧と夏陽を絡ませようかな……。

感想お待ちしております。

scene・10自主練シユーテー（前書き）

はいっ。更新です。

タイトルは適當です。決して、決して……キャラソンなんか  
じゃないんだからねつ！！（何

scene・10自主練シユーター

- 交換日記 (SNS) 06 - Log Date 5 / 21

紗季

『いた?』

あいり

『うん……。 うちにには』

湊 智花

『建物には入れないし、もう中等部側は探すといひ無いかも……。  
もしかしたら学園の外か、初等部の方かな。でも初等部の方に行く  
には……』

紗季

『初等部の方かなあ……。あの子、そつち系は全然平気だし』

まほまほ

『い、いつかいせんしゅーーーしょーーー』

紗季

『そうするか。そつち系でんでだめな真帆がおもらししたら大変だ  
し』

まほまほ

『しねーよするかばかつーーー』

紗季

『…………わかつたわかつた。とにかく、つん。一度小屋に戻るわ。』  
谷三さんも帰ってるかもしれないし

あいり

『ビリこいつがやつたんだから、ひなけやん』

紗季

『それと、慧から連絡は?』

湊 智花

『「うん。まだ返事返ってきてない』

まほまほ

『へやはじつたり、れんじゅつじゅぬ、つておきてがみだけだ  
もんなー』

あいり

『む、もしかしたら、慧への近づくなるかもよへ。ひなけやん』

紗季

『ねつね…………あこずれにしても、一寸小屋に戻りましょ~』

「けーい。なにやつてんだ?」

「……ああ、美星先生。驚かさないでくださいよ」

体育館が開いていなかつたので、近くで地面が平らな、そしてボールを使つても迷惑にならなそつな場所を探してさまよつていたら、後ろから声をかけられた。驚き振り返ると、そりこなは腕を組んで微笑みかけてくる僕たちの担任。美星先生がいた。

苦笑して返事を返すと、いつものよつに真帆くんとかわらないような笑み。

「……やは。悪い悪い。それで? 何してんだ、こんな遅く?」

「……昨日は色々あつて練習にほとんど参加出来ませんでしたからね。少しでも、自主練しておきたくて。それで、よれそうな場所を探していたといひます」

そう返すと、口元を押さえて何かを企むよつな怪しい笑みを、先生は浮かべた。

でも正直先生の姿でのその笑みは、いたずらをされる子供みたいだつた。

「……ふつふつふー。じゃん!…これなーんだ

「…………鍵、ですか?」

「えー、慧反応うつすー……」

取り出したのは、一般的な家等では使わないよつな長くてゴツイ鍵。とりあえず先生の質問に答えただけなのに、興醒めしたよつにがつくり肩を落とす先生にあわててしまつ。

「え、あつ別にセツコハリモジジヤ……ん？ これってまさか……」

とりあえず先生を慰めようと近づいた時、今まで夜の闇で見え辛かつたその鍵の細部までよく見えるようになる。鍵についてのストラップや、柄の形に見覚えがある。いや、これはいつも扱っているものだつたと思う。

僕の記憶が正しければ……。

「もしかして体育館の鍵ですか！？」

「ピンポンピンポン！！」

ホレ

「うわっ！…」

鍵の正体に気づき呆けていると、先生が鍵を放り投げてきた。手に持ったボールを落とさないよう片手でそれをキャッチする。意外と重いそれは、手に当たると同時にジーンと鈍い痺れを僕の右掌に与えた。

「つかつてもいいんですか？」

「ああ。思つ存分体を動かせ。ただし時間外だから内密にな

「ありがとうございます！…」

お礼を言つと、一の句も告げずに走り出す。

そんな僕の背中を見ながら、苦笑する美星先生を置いて。

「ふう……広いな…………」

電気をつけた夜の体育館に、思わず溜息が出る。こんなに広い場所を独り占め……思わぬ贅沢に思わず頬が緩む。堪能するよ、アリ、1つ、2つとドリブルについてみると、いつもと同じはずなのにそれ以上に大きく聞こえる破裂音。無人の体育館に反響し、しつこく存在を主張し続ける。

いつまでもドリブルをしているわけにもいかないので、早速練習を開始する。

ドリブルでゴールまで近づき、適当なところでストップしてそのまま後ろへ飛んでフェイダウェイショートを放つ。僕の異常に曲がる手首によつて実現した、異常な回転のバックスピンがかかったショートは僕から見てリングの奥、その内側にあたると跳ね返ることなく、ボールの回転にしたがつて地面に落ちる。

そこまでの一連の動作は、同年代の人と比べてとても滑らかで早いものだと　　自惚れかも知れないけど　　僕は思つてい  
る。

「よし、快調だ」

そしてそれを拾つとさつきフェイダウェイを撃つた場所に戻り、今度はゆっくりとセットからのジャンプショートを放つ。

先程のフロイダウトイとは違い、1つ1つの動作を意識したセットショートは堅苦しくてやりにくいものだ。したがって、フォームはバラバラ。やつらのように思つようなスピントからはず、ボールは軌道を大きくずらして右へとずらしてコートに落ちた。智花くんが得意とするセットからのジャンプショート。そして、誰もが必ず練習するショートもある。

しかし今まで、ストリートで自由気ままにやつてきた僕にはもう撃てなくなつたショートである。だから僕は、非常に悩んだ。『ここ最近の練習で、わかつたことがある。それは、僕が今までストリートで築いてきた技の大半が、1対1ならともかく3対3などのチーム対決になると使い勝手の悪い代物だと言うことだ。

智花くんや真帆くん、紗季くんのショートと違つて動作がダイナミックで大振りな分だけ、人数が多い密集した場所では使えないからだ。

そこから導き出した、これからの中止練の課題は2つ。『バスでもショートでもドリブルでもいいから、チーム戦で有効な技の開発』と『セットショートの習得』だ。

セットショートの習得は、これから時間をかけて地道にやつていくしかないだろうが、実は一つ目の課題はもつすでにいくつか案を出していた。そして、さつき撃つたショートでそれは使えるということもわかつた。

これで骨組みは完成。あとは、それを形にしていくだけだった。

とりあえず新しい技の開発はできそつなので、もう一つの課題であるセットショートの練習に切り替える。

「まずは……『ゴール下からかな

先日インターネットで調べて効果的な練習方法を思い出しながら、練習内容を頭の中に描いていく。

「ゴールに近づくと、1・5歩くらい離れたところで立ち止まる。角度は斜め45度。書いてあつたアドバイスどおりに肩の余分な力を抜き、1つ息を吐いて落ち着いてから足に力を入れて跳躍し、頂点に達したところでボールから手を離す。思い描くのは、練習の度に見ている理想的なフォームの智花くん。

放たれたボールは強烈なバックスピンがかかりながらバックボードに当たり、キュッと甲高い音を鳴らした後、

「…………」

ボールが進む力がバックスピンの回転に負けて、バックボードを起点にきれいな＼の字を描き見当違ひな方向へと落ちていった。ふむ。

「問題はこの手首か…………」

無茶苦茶なショートでも軌道を安定させるために留得した、異常なほどボールに спинをかける手首。自分の意思とは無関係に、スピンドルをかけるのはもう癖になってしまったようだ。でも……。

「うん。新しい技、思いついた」

やりたいものは上手くいかず、余計なものばかり増えていった。いや、本当はこっちも目標の一つだけど、なんと言つか……片方だけいやに達成スピードが速すぎないかな？

やれやれと溜息をつくと、再び練習を開始しようと腕を上げる。するとそこへ……。

ガララッ

「あれ？ やつぱ鍵開いてるな。誰かいいるのか？」

「おー。ラッキー？」

扉を開ける音が響き、振り返るとボールを片手に持った夏陽くんと、手ぶらのひなたくんがそこにいた。

「おー、けい」

「やあ、ひなたくん。夏陽くん。君たちも練習かい？」

「ま、まーな」

いち早く僕に気づいたひなたくんが、いつもの笑顔で手を上げて挨拶してきた。僕も、ボールを片手に左手を上げて軽く挨拶を返す。夏陽くんは、気まずそうに目線をそらしながらも後ろ髪を搔いて返事を返してくれた。

「つていうか慧。じーじー、お前が開けたのか？」

「じーじー、とは体育館のことだらけ。まあ、真相は違うけど……。

「まあ、わうなるね」

嘘は言つてない。実際開けたの僕だし。

「けい。じーじーで練習、してもいい？」

「うん。僕も一人で寂しかったところだからね。じゃあ一緒に練習しようか」

「わーい。ひな、がんばる」

無邪気に諸手を上げて喜ぶひなたくん。その姿に思わず頬が緩み、思わず頭を撫でてしまった。

その後ろで、夏陽くんが複雑そうな表情をしているのに、僕は気づいていなかつた。

scene · 10 自主練シユーター（後書き）

夏陽の浮かべた複雑な表情は2人だけの時間じゃ無くなつた無念さ  
か、それとも別の何かか……。

感想お待ちしております。

## scene・11 究張る気持ち（前書き）

はいっ。更新です。

すぐ終わるかなーとか思っていたのですが、書いていたら予定よりも長くなってしまいました。

いつもよりもちょっと長めですが、楽しんでいただければと思います。

# scene・11 頑張る気持ち

「夏陽くんも、自主練しに来たの？」

ひなたくんの後ろで佇んでいた夏陽くんに声をかける。彼は声をかけられるとは思っていなかつたのか、びくつと大きさに反応した。なんだか最近、夏陽くんの「ううう」反応が多い気がするが気にしないでおこうつ。

え、あ、いや、俺は

「ん?  
」「—チ?」

卷之三

答えてくれたのは、すぐ近くにいるひなたくん。

「おー。ひな、シューート入れられるようになりたい。だから頼んだ」「へえ、それはいいことだね！ 夏陽くんも結構シューート上手だから、きっと入るようになるよ」

おー。だからたけなか。よろしくお願ひします。

ひなたくんが佩こりとお辞儀する。

「でも、手加減はしないからな！」

「で、慧は何をやつてたんだ？」お前も自主練？」

頭を下されたのがわかつた夏陽くんは、ワンテンポ遅れてどんと胸を張る。そのどこかえらそつた態度に、思わず笑みがこぼれた。

「まあそんなんと同じで新しい技の開発かな」

「…………お前まだ増やせるのかよ」

「あははは……」

僕が笑ったのに気づいた夏陽くんは、むっと顔をしかめながらも話しかけてきた。別に今の課題を話すことも無いかなと思つて（決してセットショートが出来ないのが恥ずかしいわけではない）あいに答える。

だけど、技の開発について言つたら驚いたような呆れたような顔をされてしまったので、苦笑した。

「10コ1とチームプレイだと勝手が違つてね。だから今は、チームプレイで使えそうな技をパスやドリブルを中心に考案してるんだ」「へえ…………」「ほー…………」

続いてもう話すと、感心したような声を上げる2人。

でもその顔が、何か失礼なことを考へていることを物語ついている気がしてならない。

「…………『意外とコイツも、考えてやつてるんだなー。ただただ考えなしに技を開発してるだけじゃないんだなー』とでも言つたげな顔だね？」

「そ、そんなことはないぞー！？」

「おー。氣のせい氣のせい」

本当かなー？ ひなたくんはともかく、夏陽くんはものすごく怪しいけど……。  
まあ疑つてもしょうがないし、

「ふーん。まあやつこいつ」としておくる

「ほつ……」

「そんなことよつ、ちよつとお願ひつて、何か提案があるんだ」

やれるひとをやるひとにしてやれば。

「提案？ なんだ？」

急に話を変えたけど、気にした様子も無く返してくれる。

「うん。夏陽くんはひなたくんにショートを教えるんでしょう？ 僕もそれに協力するから、僕の練習にも2人に協力して欲しいんだ」

「協力？」

「そ、協力。せっかく人数もいるんだし、これを利用しない手はないと思って。あ、もちろんひなたくんの練習もしつかり協力させてもらひつよ？」

「おー。でもけい、ふつーのショートへたくそ」

…………もうちょっとオブラーートに包んだ言い方しようつよ。  
胸がえぐられたよつて痛むんです。

「確かに、お前練習で見てたけどセッショートめちゃくちゃやじやねーか。……フェイダウエイとかはまあまあだつたけど」

更に追い討ち。後半はほめてくれたみたいだけど、僕の耳には入つてこなかつた。

がつくりと肩を落とし落胆するが、何故だが『ふふふふ……』と自虐的な笑みがこぼれてきた。ひなたくんと夏陽くんは戦慄が走つたような顔をしているみたいだ。

「世の中にはね、2種類の人間がいる」

「は？」

「1つは考えなくても体が勝手に動く人。もう1つは、理論がわかつても体が動かない人」

「…………な、何が言いたいんだ？」

「要するにだね」

混乱したような夏陽くんと、聞いているのか聞いていないのかわからないひなたくん。

夏陽くんが急かしてくるが僕はあえてゆっくりとした口調で続ける。

「僕は、後者だということだよ。だから」

バツと顔を上げて、ひなたくんと向き合つ。

「だから、ひなたくんには口でわかりやすく教えてあげよう  
「おー。よろしくお願ひします」

僕が出来る限り最高の笑顔をひなたくんに向けた。ひなたくんも理解してくれたのかどうかはわからないが異論はないようで、僕にも師事を仰ごうとお辞儀をしてきた。

「…………ちょっと待て。それって俺が考えなしのバカって聞いたいのかー？」

「え？…………ああああーー」「いや、『めんより夏陽くん！』

そういう意味で言ったわけじゃないんだー！」

夏陽くんの言葉に、失言があったことに気づいた。さつきの言い回しでは夏陽くんを遠まわしに、「上手く説明できない、体が先に

動くバカだ』と言つて『いるようなものだ』ということにだ。

僕自身では、そんな風には一切思つていなかつたのだが……。

「ただ、僕の体がセットショートに対する拒否反応を起ししている  
ようなものだから、どうこう風にショートを打てば入りやすくなる  
かは理解してるけど、セットショートになるとそれができなくなる  
つてことを説明したかったわけであつて決して君のことを考えなし  
の人間だと思つていてるわけじゃ……」

「わ、わかつたわかつた！　俺も過剰に反応しそうただけだから  
気にしなくていいって！…」

畳み掛けるように『いはめになつてしまつたが、僕のあわてた様  
子にやつきの言い方が故意ではないことをわかつてくれたようだつ  
た。』

「や、それじゃあ始めるとするか……」

「おー」

「うそ。よろしくね」

やつして、まずはひなたくんのショート練習から始まる』ことにな  
つた。

「いや、だから手だけで打つてもひなたの場合強き“ひらいん”だつて。もつといづら、膝を使ってさ……」

「ふー。たけなかの話は難しい。なんでショートで膝なの？ 手でするんじゃないの？」

「……もちろん膝で投げるんじゃないけどさ。なんつーか、イメージで。もつといづら、グッと踏ん張つて……あーどう言えばいいんだろ？」

「膝を使つていうのはね、高くジャンプするつてことだよ。膝を曲げて腰を落として、上に飛びながらショートを打つ。……そう、ちょうどカエルかカンガルーみたいな感じかな」

「おー。カエルみたいに跳ぶ。…………ぐつ。おー、届いた。たけなかのぐつと、けいのカエルでやつたら“ippai”とんだ」

「そう、そんな感じだ！！ 今のを忘れずにもう一回」

外から見ればなかなかに滑稽な状況だらう。

たどたどしく要領の得ない言葉で何とか自分のイメージを伝えようとする少年と、彼の言葉どおりにボールを放ち、それがリングに届かずネットにかすつただけでも喜ぶ少女。そして、時々口を挟みながら極力手を出さずに見守っている僕。

最初は色々と口出しするつもりでいたが、2人の一生懸命な姿に思わず躊躇つてしまい、それ以来夏陽くんの言葉を補足する程度しか口を挟めなくなってしまった。

ボールをリングに届かせることが出来ないひなたくん。お世辞にも上手とはいえない指導をしている夏陽くん。そんな2人を見ても焦れたりイライラしたりしないのは、その姿から伝わる集中力の度合いと真剣さからだつた。

そう思つてゐるのはここにいる僕だけではなく、さつきから姿を隠そつともしないで覗き行為に没頭する昴さんたちも同じだと思う。さつきちらつと携帯電話を見たときにはメールが智花くんから入つ

ていた。内容はひなたくんがいなくなってしまったから一緒に探して欲しいといつもの。どうやら、探していたらこの場面に遭遇したみたいだ。

全集中力をリングとボールに注いでいる夏陽くんとひなたくんは気づかない。そんな2人を邪魔しないように静かに見守るみんな。その優しさに、胸にじんわりと暖かいものが広がった。

「……おー？ なんか、ふるふるしてきた」

もう何本目になるかわからぬショートを放った後、ひなたくんが不思議そうに自分の二の腕をさする。まだ筋力が弱いので、ここに来て結構な数のショートを打っているのでかなりの疲労が蓄積されているのだろう。それでも、その前にみんなでボール遊びをした後なのだから。

明日は筋肉痛が相当辛いものになるかもしれない。後でマッサージしてあげよ。

「少し、休もう」

僕が言おうとして口を開きかけたが、夏陽くんが笑いながらその場に座り込み、ひなたくんを促した。

「おー。休憩」

ほすんと、ひなたくんもあひす座り。

「……なんか汗拭くもの、持ってるか？ そのままだと、風邪ひくぞ？」

至近距離で対峙するひなたくんから何故か顔を赤らめて目を逸ら

しつつ、気遣いを重ねた。……真帆くんと扱いが凄い違うね。

「おー。ハンカチ、持つてきたはず。……あれれ？」

「どうした？」

「ハンカチ、無くなつた。落としたかも」

「あーあ。もつたひないな」

「おー。もつたひない事した」

田町てのものが見つからず、まざぐつていた体育着のポケットから手を出して、ひなたくんは肩をすぼめた。

「お氣に入りだつたのになー。むねん」

ぺたんと内股のまま、体育館の天井を仰ぐ。

「……あ、明日つ。探してやるよ。…………一緒に」

「おー。ほんと? わーい」

「僕も一緒に探してあげるよ」

「おー。ありがとう」

「…………」

「ん? どうかしたかい?」

小屋からここまで來るのに結構距離があつたはず、2人で探すのにはなかなか広いだらうからよかれと思つて声をかけたのだが、夏陽くんからなんとも言えない微妙な表情を向けられた。

まあ、それを気にすることなく、僕はコートの端に置いといいた荷物のところまでより、田町てのものを拾つて2人に近づく。

「はい。タオルと飲み物。ひなたくんは僕の使いかけ飲みかけで悪いけど我慢してね」

「ねー。ありがとう」

「…………… も、 カンガロ」

につこり笑顔のひなたくんと、顔を赤らめて目を逸らした夏陽くんがそれを受け取る。それを確認すると、ひなたくんをはさんだ夏陽くんとは反対側に座つた。

「おー。ソラソラ書いた。まー、かわい」回

ひなたくんに渡したスポーツドリンクを2人で飲みながら、1人でも出来るマッサージ方法を教えた後、健気な宣言と共にひなたくんが立ち上がった。

「…………なーひなた。どうしてそんな、頑張るんだ?」

次いで腰を上げながら、夏陽くんは心底不思議そうに彼女のやる  
気に満ちた顔を覗き込んだ。

すると、疑問を投げかけられたひなたくんは「今までそんな」と  
考えたこと無かつた」とでも言いたげな思案顔で首を捻り、むー…  
としづらくなつたあと、

「いつしょがいいから」

ぱつと顔を上げ、自分の気持ちを表現するのにぴったりな言葉が見つかってよかつたとばかりに、微笑んで答える。

「こつしょ？」

「おー。ひなだけへたくそだと、みんないつしょに楽しくなれない。  
だから、頑張らないと」

「ひなたくん……」

そんなことない。へたくそでも、みんな一緒にそれで楽し  
いから。…………なんて無粋な言葉は口に出せない。それほどに、  
ひなたくんの優しい微笑みからは、強い意志のようなものがあふれ  
ていた。

「…………そつか。みんないつしょに、か」

「おー。だから、よろしく」

そう言って、再び「ホールと対峙する2人。

夏陽くんのアドバイスの下に小さい体を何度も弾ませて放つその  
シューートは、リングにやつと届くかどうかといつ実におぼつかない  
ものであった。

でもそれは、僕がどんなに技を磨いても出せないような美しいも  
のだった。

黙つて覗いていた昴さんたちも満足したのか、来た時と同様黙つ  
てその場を後にしていった。

「…………そりゃ、シユートが上手くなりたいなら、それこそ

「一チである昴さんにも頼めばよかつたんじゃないかい？」

「ふ、ふんっ！… そりゃあんな口うるさいコン野郎なんかよりも俺がかつたからに決まってるだろ！」

「おにーちゃんには、ないしょ」

「ん？ ないしょ？」

「……そりゃ、おにーちゃんに褒めてもううの。だから、

今日のところはたけなかでがまん

「…………」

「そつか。ひなたくんは本当に昴さんが大好きなんだね

「おー。おにーちゃんだいすき」

「俺…………ちょっと外行って涼んでくるわ」

「？ うん。行つてうしやい」

その背中が、もの凄い哀愁を漂わせていた。

次の日から夏陽くんが昴さんと強く当たるようになつたのだけれど、何故だらう？

scene・11 頑張る気持ち（後書き）

その後、夏陽は外でわぬわぬと泣いたところ……。

はいっ。この日の話はもうちよつとだけ続きます。

あと2話くらいかな……？

慧が、超鈍感＆残酷キャラになってしまったのは、予定外です。

scene・12侵入者は許しません（前書き）

はいっ。更新です。

今回は駆け足みたいになつてしましました。前回のあとがきで、後2話くらい夜の話が続くと書きましたが、とつあえず今回で日付が変わります。

それでは、お楽しみください。

scene・12 侵入者は許しません

「………… むし、じゅあもつおしまーにしそうか」

ひなたくんの手が上がらなくなってきたので、そう声をかける。ひなたくんはちょっと不満げに、夏陽くんは迷いながらもどこか納得した顔で僕のほうを見る。

「ぶー。もうおわり?」

「そうだね。やりたい気持ちもわかるけど、オーバーワークは禁物だよ」

「だな。怪我したら元も子もねーし……じゃあ、今度は慧の練習の手伝いか?」

「いや、それはいいよ」

若干疲れた様子を見せながらも、イヤそうな顔を一切見せないでそつ言つてくれるるのはありがたいけど、

「2人とももう疲れたでしょ? それに時間も遅くなつてきたし……片付けとかは僕がやつておくから、2人は先に小屋に帰つて」「いや、でも……」

僕よりも自分たちのほうが長く使つていたことに罪悪感を感じたのか、ばつの悪そうな顔で引き下がるつとしない夏陽くん。

「大丈夫。開けたのは僕なんだから、閉めるのも僕がやるよ。……それより、ひなたくんを送つてあげて」  
「………… ああ、わかつた。ほら、ひなた。行こりやせ」  
「おー。けい、どうもありがとう」

「ううん。どういたしまして

長い沈黙の後、諦めたのか溜息をついてひなたくんを促す夏陽くん。ひなたくんも、僕に一つお辞儀をした後、小屋へと帰つていつた。

「…………」

体育館が、再び沈黙に支配される。

ひなたくんは、今日一日でずいぶん成長した……とは一概には言えないが、一步ずつ確実に進歩している。それはひなたくんの、純粋に上手くなりたいと思う気持ちと、夏陽くんの彼女に対する真剣な指導があるからだと思った。

……選手が成長するのに、わかりやすい解説書や腕のいいコーチは必要ないのかもしない。純粋に上手くなりたい。樂しみたいという気持ちと、それを支える無条件な人を想う気持ちが、成長を促すのだと、僕は思う。

「ひなたくん。きみはもう……立派な選手だよ」

だからこそ、2人の背中が見えなくなつた闇に向かつて、ポシリと呴いたんだ。

さて、僕ももう少しやつていこうかな。僕にも、彼女たちのよくな純粋な気持ちがあることを信じて……。

-成長日記・K (B.R.T) -

『やつぱりまだやつてやがったか

『―― 夏陽くん。どうして……』

『手伝つて言ったのに、約束守らないで帰るのは後味悪いからな  
……。し、仕方なくだ！ 仕方なく！――』

『……ふふ。ありがと。それじゃあお葉に甘えて、手伝つ  
てもらおうかな』

『お、おつー！ で？ 何をすればいいんだ？』

『そうだね……まずは、ちょっとバスの相手になってくれないかな

?』

『バスの？ そんなんでいいのか？』

『うん。ちょっと変わったバスを思いついてね。もつ大体形は出来  
たから、キャッチしにくいかとか、そういうところを見て欲しいん  
だ』

『ああ、わかつた』

』.....』

『ど、どうだい？ やっぱりやり辛い……かな？』

『い、いや…………驚いて言葉が出なかつただけだ！ キヤツチも  
しやすいし、それに何より…………これはカット出来ないだろ』

『そうかい？ よかつた……それじゃあ成功みたいだね』

『ま、まあ……アイツら、特に真帆が取れるかどうかだけどな！…』

『大丈夫。きっとみんななら取ってくれるよ。…………ありがとう。手  
伝ってくれて』

『べ、別に約束を守つただけだし。そんなお礼言われるよ!』こと  
じやねーよ』

『それでも、ありがと!。…………か、もひ帰ひ。僕は鍵を返していく  
るから、夏陽くんは先に帰つて』

『また黙つて練習してよ!とか思つてねーだろ!な?』

『ふふ、大丈夫だよ。さすがにもう遅いし疲れたし。返したらすぐ  
に帰るから』

『…………はあ、わかつた。それじゃあお先』

『うん。それじゃ』

「よつ。お疲れさん」

「あ、お疲れ様です」

電気を消して、扉に鍵をかけたところで図ったかのよつて美星先生が声をかけてきた。

「こんな遅くまでよーやるなー……ほれ、鍵預かるぞ」

「はい。ありがとうございました」

鍵を手渡す。ずつしりとした重さが手の中から消え、少し開放感。だけど、美星先生は受け取った後少し考え込むような顔をして、やがて口を開いた。

「…………なあ慧。今のバスケ、みんなとプレイするバスケは面白いか？」

「？……ええ」

どこのか引っかかる、裏があるような言葉に少し首を傾げてしまうが、純粋に本心を語ることにする。

「今まで僕は、個人技のバスケしかやってきませんでした。でも慧心学園に来て、みんなと力を合わせる楽しさに気づきました。以前の僕では、チームプレイのための技なんて考えもしなかったのに、今はそれしか考えてない…………凄く、楽しいですよ」

迷いなく、そう言えた。

美星先生は期待していた言葉が返ってきたのか、満足そうな笑み

を浮かべると僕の横に回って背中をまじまじと見てくる。

「やつら！ よかつたよかつた……」

「歸さんや、みんなのおかげですよ。……いい甥っ子さんをお持ちで」

「いやいや、どーしようもない口コロコロン野郎だよ」

「いやいや、そんなことはないと思こますよ？ 彌さんはみんなのことを、妹みたいに思つてゐるみたいですよ。」

「今日はもつゅうべり休んで、明日に備えな」

「はい。ありがとうございます。……それでは失礼します」

「ああ。また明日」

僕が背を向けて歩き出しても、先生は軽く手を振り続けていた。

でも、僕が真っ先に向かったのはみんなが眠る小屋ではなく、台所だった。朝食は大事だからね。仕込みだけ終わらせておいて、すぐ朝食を作れるようにするためだ。

もうみんな寝た頃かな？ 体育館の後片付けと、明日の朝食の仕込みが思つたよりも長引いてしまつたので、凄く遅くなつてしまつた。

みんなを起こしてしまつたら申し訳ないし、静かに足を忍ばせて小屋の裏を通り過ぎようとした時……それは聞こえた。

「 わてと、そろそろか」

この声は、昴さんかな？ 一体どうしたのだらう。深夜にもかかわらず、何か一大決心したかのような思ひつめた声。そのあと、断続的に聞こえるペチペチと何かを叩く音。

「…………んあ？…………なんだよ…………あ」

次いで聞こえるは、眠そうな夏陽くんの声。

「起きたか。よし、じゃあひなたちゃんのパンツ返しに行くぞ」「…………ああ、パンツな。よし、行くか…………ってなぜそれをつふが！」「

ん？ なんだつて？

今、看過出来ない言葉がいろいろ聞こえてきたよつた気がした。  
いやいや、さすがに僕も疲れたのかな。練習のしすぎかな?  
ははは。

「やれやれ、2人に不名誉を取ってしまったよつた幻聴が聞こえてしまつなんて……」

「んーにゃ。幻聴じやねーよ。安心しろ」

「そうですか。じゃあとりあえず疲れではないらしい  
て、何故先生がここに?」

職員室に体育館の鍵を歸しに行つたはずの美星先生が、僕の後ろ  
で腕を組んでなにやら神妙な顔をしている。

「ちゃんとみんなねてるかなーと思つて来てみたら……思わぬ場面  
に遭遇したみたいだ」

「は、はあ……」

確かに、もしあれが本当に彼らの会話だつたとしたら、見過ごす  
わけには行かない。

今は声を抑えて話をしているのか壁越しでは何を話しているのか  
はわからない。

「あの……先生」

「うん? どうした?」

「つかぬことをお聞きしますが、もし2人が不埒な行為に及んだ場

合は

「慧、夏陽は頼むぞ」

「…………了解です」

僕の話が終わる前に、ふすまが開かれる音がかすかに聞こえた。

位置から考えるとそこは…………女子の寝室へとつながる場所だ。

その瞬間、美星先生の顔に影が宿つた。有無を言わせぬ声で夏陽くんの処理を言い渡され、僕は彼に説教をする係りになってしまつたようだつた。

彼らが女子の寝室に入った後、何かが崩れ落ちるような音がしたり、それによつて紗季くんや真帆くんが騒ぐ声がしたり、僕を苦しめた黄な粉弾が炸裂したらしい音（心の底から、寝室にいなくてよかつたと思った）がしたりした。そして、その騒ぎの乗じて逃げ出したであろう2人の侵入者が、小屋の玄関から逃亡するのを確認。

「それじゃあ慧。……後は頼んだぞ」

「…………はい。美星先生」

昴さんの無事を祈りながら、鍵が開いていた和室の窓から中へと侵入した。

「やーお帰り夏陽くん。どうだつた？ 女子の寝室に忍び込んだ感想は？」

「なつ！－ けけけつけつけ慧！？ 何でそれを！？」

安心しきつて和室へと入り込んできた夏陽くんに、暗闇の中から声をかけた。まさかバレていたとは思つていなかつたであろう彼は、思わぬところから声を掛けられてかなり動搖していた。

「ちよつと明日の朝食の仕込みを終えて小屋に帰ろうと外を歩いていた時にね、聞こえてしまったんだよ。ひなたくんの下着は、無事に返せましたか？」

「ちよつと笑顔を向けると、彼は壊れた人形のように何度も首を立てに振る。

「そうですか……それじゃあちよつと移動しましょうか。台所辺りまで」

「はい…………」

再び窓から外に出たあと、台所へと向かった。ここはみんなが寝ている寝室とは少し離れているし、少し騒いでもみんなに迷惑はかかるないだろ？

「さ、夏陽くん。そこに座りましょう」

「はい…………」

あえて椅子を指さず、畳の床に座るように促した。  
引きつった顔をしながら、夏陽くんは正座をする。僕も、その正面に正座をした。

「さて、夏陽くん。たっぷりお話ししましょうね？」

「はい…………」

「それではまず、なんであんなことをしたのか位は聞かせていただきましょうか？」

僕がそつと言いつと、恐る恐る夏陽くんは口を開いた。

ひなたくんの下着は、お風呂に入った時偶然見つけてしまったそうだ。最初はそれが何だかわからず、広げてみたところ初めてひな

たくさんのものだとわかり、あせつた時に昴さんに声を掛けられてとつさに自分の懷に隠してしまったらしい。更に、実はその下着は昴さんがあらかじめ更衣室においていたものだとも言つた。彼もまた、夏陽くんとほぼ同じ理由でそれを拾つてしまつたとか何とか。

「…………ふう。だいたい理由はわかりました」

「まつ…………」

「でも」

ほつと一息ついたのもつかの間、ビクツと体を震わせて僕を見上げる夏陽くん。……事は、そんなに簡単なものじゃがないのですよ。

「それが、寝ている女子の部屋に侵入していいという理由ではありますんよね？ それこそ、窓から出て再び脱衣所に行つて下着を置いてくるとか、他にも色々考えれば出来たはずです」

「はい…………」

「それに幼馴染だつてライバルだつと、こりののは全員寝ている女の子なのですよ？ 寝ている自分の姿は見れません。中にはその姿を見られてショックを受けてしまう子もいるでしょう。そことのこうをちゃんと理解していましたか？」

「すみません。考へが足りませんでした…………」

「夜はまだまだ長いです。たっぷりお話ができますね」

「け、慧…………さん？」

不安げにこぢりを見る夏陽くん。でも、僕の話は続くよ…………。

「きみには、女性に対するマナー やその他諸々をたっぷりお教えしましょ。…………大丈夫。人間5日くらい寝なぐても死にませんから」

「…………」

それから夏陽くんに対する、マナー講義が始まった。

終始萎縮しつぱなしだった夏陽くんは素直に全部聞いていたので、  
思ったよりも早くそれは終わった。

時計を見ると、午前3時を回っていたけど……。

scene・12 侵入者は許しません（後書き）

ちょっと慧が「つるわすきましたかね？」

でも、女性の寝室に勝手に入るのはいけないと黙つのです……。

scene・13 翻案……？（前書き）

はいっ。お久しぶりですーー！

しばらく放置して、本筋に申し訳ござりませんでした。  
直訳はしません。

ですが、リアルが忙しくなつてきましたのでこれから定期更新は出来ないやうです。  
申し訳ござりません……。

なるべく、早く投稿したいと思こますので、今後も応援のほどよろしくお願いします。

side・S

【火曜日】

「うーん……やっぱり慧のポジションは決め辛いな……」「す、すみません……」

「ああ『』めん。別に慧を攻めてるわけじゃないんだ。ただこつも短がはつきりしてるとなると逆に難しいっていうか……」

今日は、智花ではなく慧が家に来ていた。俺に直接相談したいことがあつたらしくて、智花に場所を聞いて来たらしい。朝、練習していた時に智花は何も言つていなかつたので、恐らく学校で聞いたのだと思う。

慧の相談内容はやはりとかバスケのことだ、『今の自分がみんなと一緒にバスケをプレイできるのか』と言つものだつた。途中から入つたと言うもあるし、みんなと過ごした時間が少ないので不安に思つているのだろう。

確かに慧がみんなと過ごした時間はとても少ない。でも、俺がコチとしてみんなを見つめている限り、信頼を得ていらないだとかそんなことは決してなかつた。まるで、みんなのお姉さんにでもなつたかのようによく気が利く慧は、智花も真帆も、紗季も愛莉もひなちゃんも信頼して仲間と認めてるのははつきりとわかっている。

その辺りを丁寧に伝えたところ、恥ずかしそうに顔を赤らめてう

つむきながらも、「そう思ってもらえてるなら……これ以上嬉しいことはないですね」と嬉しそうに笑っていた。

それともう一つの相談事が、慧のポジションについて。

これに関しては俺も凄く悩んでいたので、正直今日慧が家に来てくれてよかったです。慧の実力を把握するために、1対1の試合をしたのだ。……と言つのは単なる名目で、本当は慧と一回試合をしてみたかったもある。

結果は俺の勝利だつたけど、智花を相手にするよりもかなり得点を奪われた。1対1のオフェンスでは智花よりも上らしい。その分ディフェンスが甘かつたり、遊びすぎる点が否めないが……まあそこにはどうにかなるだろう。

結果から見て、慧のポジションはフォワードがいいのかも知れないが、問題点が2つほどあった。

まず1つ目は慧の体力が少ないこと。今までの練習で見ていてわかつたことだが、慧の喘息は思っていたほど軽いものではなかった。本来はかなりの体力を持つているかも知れないのに、軽度の発作が頻繁に出るので愛莉やひなたちゃんよりも早く息が切れてしまう。

2つ目が慧のシュート精度にムラがあることだ。慧本人が「モチベーションが上がらないとシュートが入らない」と言つているように、入る時と入らない時の差が本当に激しい。これは、おそらく基礎の練習シュートが出来ていないためだろう。

以上のことから、慧のポジション決めは慎重に行うこととした。最悪、球技大会中に決めようとも思つていた。

「……あの、僕ポイントガードは出来ませんか？」

そう思つていたのだが、慧から予想外な提案が来た。

「ポイントガード？」

「はい。実は少し前から、みんなの役に立てないかとバスの練習もしてたんです。それなら僕でも少しあはは使い物になるのではないかと思つて……」

「そりが……じゃあちょっと見せてもらひおつかな。練習の成果」「はい……」

そう言つて、再びボールを持ち出す。ドリブルをしながら慧は、「実はバスの技も考えたんです」と嬉しそうな顔で語つていた。ふつ……なら、その技を見せてもらおうか。

「……………」

「ど、どうですか？」

はつきつ語つて予想外だつた。凄い……これは凄いぞ……！

「ああ凄い。前々からボールを自在に操れると思つていたけど」「今まで出来るなんて……まるで漫画の世界みたいじゃないか……！」

「それ、喜んでいいのでしょうか？」

「う、うめん言い方が悪かつたかな？……でも、本当に凄い。うん。慧」

俺は慧と向き合つて、片手で持つたボールを田の前の少女に手渡す。

「俺も見てみたくなつた。球技大会では、みんなのアシスト王になるべくがんばつてくれ！！」

「…………はいっ！！」

凛とした表情で、彼女はボールを受け取つた。

#### side · others

その帰り道、慧は少し落ち込みながら歩いていた。

「あ……アシスト“王”か……やっぱり僕ってそんなに男の子っぽいかなあ」

女王と言つて欲しかつたらしい。

ちなみに次の日から夏陽の、昴に対する態度が更に悪くなつてしまつたのは、無関係では無いかも知れない。

### 【金曜日】

今日で、一週間の特訓が終わった。実際やってみると短いもので、少し物足りない。

先日昇さんに見せた新しい技は無事採用され、みんなに披露してみることになった。その時のみんなの反応は上々で、キャッチもすんなりやってくれていた。真帆くんはひたすら真似したがっていたが、これも僕の異常に曲がる手首があつて出来る技なので諦めても

らつた。

特訓の内容はチームを2つに分けて行うと言つもので、【Aチーム】は昴さんがコーチで智花くん、紗季くん、愛莉くん、僕の4人が生徒。【Bチーム】は真帆くんとひなたくんが生徒で、コーチが夏陽くんだった。

日曜日、夏陽くんはみんなの前で球技大会のバスケットボールには出場しないと言つた。みんなで理由を問い合わせたところ、僕たちに任せてもいいと思つての判断なのだそうだ。ばつが悪そうに、頭をかきながらそう言つていたけど、その言葉が単純に嬉しかつた。それから、夏陽くんがコーチとして真帆くんとひなたくんの練習を見ていってくれた。

2人の練習はとにかくショートを繰り返していたらしい。真帆くんも、ひなたくんもずいぶん入るようになつたと喜んでいた。（真帆くんは夏陽くんの自分とひなたくんの扱いの違いに憤慨していたが）

僕たちの方もずいぶん成長したと思う。みんなそれぞれ昴さんに相談したりして、不安拭い去つたり新しい練習を追加してもらつたりしていた。もちろん僕もその中の一人で、バスの粗いところなんかを指導してもらつたり、ゲームメイクを教えてもらつた。

明日の試合が楽しみだ。みんなとやる、初めての試合。……絶対に、勝とう。

まほまほ

『すばるん、きてくれるんだってー!?.』

湊 智花

『うんっ! 美星先生が何とかしてくれたってー!..』

あいり

『……よかつた。嬉しい』

ひなた

『おー。おにーちゃんこ、見てもいいれる。こっぽいがござりないと』

ケイ

『そうだね。教えてくれた鼎さんや夏陽くんに格好悪い姿は見せられないからね』

紗季

『……でも、大丈夫なのかな。や、もちろん来て頂けるのは嬉しいんだけれど。見つかったら大変じゃない?』

まほまほ

『みーたんがなんとかするつていつてるんだしだいじょうぶだろー!..』

紗季

『……だと、いいんだけれど』

ケイ

『確かに、一抹の不安が拭い切れない……』

「ぎやははー！ 箱！ 長谷川巣箱ー！」

当日、得意そうに腕を組む美星先生を前に僕たち（絶賛大笑い中の真帆くん除く）は呆然としていた。

僕たちC組バスケットボールチームは順調に試合を勝ち進め、次が決勝戦だ。相手は（真帆くん曰く）ライバル関係の因縁のあるD組。この勝敗で、総合優勝がどちらになるかが決まるらしい。ちなみに僕は、まだ一度も試合には出ていない。僕自身の体力が少ない

のと、学校のみんなにはまだ誰にも僕がバスケットをやつていると  
ころを見せたことがないので、決勝戦まで温存しようといつ鼎さん  
の指示だ。その代わりに、決勝戦は僕がスタメンのガードで、自由  
にやらせてくれるらしい。

そんなわけで、意気揚々とやつてきたわけではあったのだが、目  
の前にある……この、跳び箱。なんとこの中に鼎さんが入っている  
らしい。なんというか、その…………ねえ？「うん。いい案だと思います。

「お前……。わかってるのか？ これからすぐ試合だぞ？」

そんな感じで若干現実逃避していたら、跳び箱を蹴る真帆くんを  
夏陽くんが諫めていた。

「つるせー負け犬」

「……ぐ」

「真帆くん、一生懸命戦った人にそれは失礼だよ。さあほら、もう  
蹴るのはやめようね。足を怪我したら大変だよ」

「確かに。しゃーないな」

夏陽くんはバスケットボールではなくサッカーのほうで試合に出  
ていた。「コーチをしてくれた恩もあると言つことだし、みんなで応  
援しに行つたのだが……結果は決勝戦で惜しくも敗退。

「はつはつは！！ 美星先生、サッカーは我らがD-Dの勝利でし  
たよ！ 今年も総合優勝はD組がいただきます！ おう！ みんな  
もがんばれよ！！ 正々堂々、いい試合をしよう！」

そう、この先生が担当するD組に負けてしまったのだ。

この先生は通称ヤマ先生。真四角な短髪、サテン調の紫色のジャ

一ジ、色黒マツチョな逆三角ボディが特徴の体育教師だ。熱血な凄く熱い先生で、僕は嫌いではない。ただ、喘息で体育を休もうとする「気合が足りないぞー！」と一括してくるのは「勘弁いただきたい。……まあ、ちゃんと休ませてくれるから別にいいのだけれど。

「ヤマ先生、暑苦しーよ」

「はははは、恐縮ですー！ ではまた後ほどーーー。」

美星先生のめんじくさそうな言葉に、ヤマ先生は全く躊躇つてない返事を残して去つていった。

「 わで、と。それじゃあ最後の作戦会議だ」

と、昴さんがかしこまつて言い出したのだが、

「つお。」の箱……しゃべるぞーーー。」

「 ふく……ーーー。」

すぐさま美星先生が茶化しに入つた。それにつられて僕も含めて何人かが噴き出してしまつた。

「いい加減にしろてめえ……」

「いやはは、『めん』めん。スルーするのが逆に失礼になりそーなくらいマヌケだつたから。……ほひ、昴が話やすいようにみんなもつと傍によつてやんな」

する氣のないよつな謝罪の後、美星先生がそんな風に場を繕つた。

「 つたく。あー……こんな状況で申し訳ないけど、最後に一言だけ。……一週間『』苦労様でした。かなりのハードスケジュー

ルだったけど、みんなよく頑張ったよ。あとは、平常心で力を發揮できれば、きっと勝てるから。……見せてやりな。6-Dに、そして竹中に。君たち女バスの力を

「おつりー！ ナツヒー！ あたしたちの芸術的な勝ちっぷ

「うー、二二三ド魔術用意！」

「困るや」

真帆くんと夏陽くんが、お互い不適に笑い合い。拳を突き合わせる。

「じゃあ、このみんなーー。」

それから美星先生の気合の一発。……続いて飛び箱の上に飛び乗つた。

「れつづごー。ほれ竹中、押しなさい」  
「……なー美星。これ、超マヌケだぞ、見た目

手押し車のよつに、飛び箱と美星先生が乗つた台車を運ぶ夏陽く  
んの図。

彼の言うとおり、正直なかなか間の抜けたものだつた。

scene・13答案……？（後書き）

と並んで、慧のポジションはガードです。

紗季ファンの方々、申し訳ございません。  
ですが、紗季のポジションがガードとこれよりも変更はしません！  
！ 断じて！

さて、今まで焦らしに焦らした慧の技はどんなものなんでしょう。  
次回にご期待ください。

## scene · 14 試験開始（前書き）

はい。更新です。

今回はじつも半分くらいになってしましました……。  
申し訳ございません。

## scene・14 試合開始

(注：球技大会の試合に関して)  
原作ではメンバー・チエンジは無しでしたが、この作品の中では有りとさせていただきます。

それ以外のルールは同じなので、それだけ覚えていただければと存じます。

### 【C組 0 - 0 D組】

美星先生と昴さん、そして夏陽くんと紗季くんはコートの脇に陣取り、僕たちはセンターサークル付近に集合する。

紗季くんがコートから離れ、僕が試合に出てきたことにD組のみんなは困惑しているようだつた。紗季くんなら以前戦つたことがあるからどの程度なのかわかるけど、僕は全くの未知数だからだろう。少しみんなのざわつきが落ち着いてきたところで、智花くんとD組の1人がセンター・サークルの中心に立ち、ジャンプボールの体勢。

試合が、始まる。

……この緊張感、ストリートでは味わったことないかも知れない。未知の感覚に、僕の心はわくわくと躍っていた。

審判役の先生が宙に放ったボールが、最高到達点を下り、智花くんの手によつて弾かれた。球は真帆くんの手に收まり、ボール運びを司る（と見せかける）智花くんにノータイムで戻された。みんなから聞いた、以前行つたという対抗戦と同じ皮切り。

「愛莉つー！」

「は、はつこーーー！」

智花くんが高くて緩いパスを繰り出す。それをゴール下で受け取つた愛莉くんはおつかなびっくりながらもショート体勢に入るが、

「ひや……ひやいんつーーー！」

途端、D組の絡みつくよつなティフュンスに、バランスを崩してしつもちをついてしまつた。

「ピッ！ 白6番、プッシング」

判定は敵のファウル。……だけど、これでもう愛莉くんは中へ入れなくなつてしまつた。

ショート中のファウルだつたのでフリースローを2本貰えたのだが、愛莉くんはそれを外してしまつ。

D組がリバウンドを制し、攻守交代。ひなたくんとの伸長差を突かれて彼らのショートはリングに収まる。先制点はD組。

ボール権がこちらに戻り、エンドラインからパスを受けた智花く

んが敵陣へと進む。

そこへ、D組からダブルチーム【マンツーマンで使われる、ディフェンス。1人のプレイヤー（＝大抵の場合エース）に対して2人でディフェンスをすること】でマークがつく。智花くんの侵攻を押さえるべく、D組の2人が引き締まつた顔で立ちふさがった。

なるほど……いい手だ。いくらチームワークがいいと言つても、智花くん以外はまだ初めて数ヶ月。無策のワンマンチームは、エースを叩けばすぐに崩れる。……無策なら、ね。

「智花っ！」

（昴さんから指示を受けた）美星先生が、智花くんにサインを送る。それは、彼女の個人技の解放。

「　　くつ！　　んつ！」

だが、敵のマークは想像以上に堅く、珍しく焦燥をあらわに、口惜しそうな声を智花くんが上げた。

ボールを奪われるところまでは至らないけど、智花くんはドライブもシユートもできない状態に長くさらされる。少なくとも、彼女1人では包囲網を突破できそうにないのは明らかだった。

やがて、30秒ルール【攻撃側は、コート内でボールを保持した後、30秒以内にボールを攻める方のリングへと触れさせなければならない】のホイッスルが鳴る。ルールにより、ボール権はD組へと移るが彼らもシユートを外し、再び僕たちの攻撃に戻つた。

【C組　0 - 2 D組】

「……うん、じゃあ始めますか。愛莉くん」

「あ、はいっ」

ボールを手にした愛莉くんから、ボールを受け取った。……お言葉に甘えて、自由にやらせてもらつために。

最初、僕がボール運びをしなかつたのは、相手の動きを見るためだ。やはりとかなんというか、昴さんたちの読み通りD組は智花くんを警戒しているようだつた。でも、大体の戦力はわかつた。

「さあ……始めるよ……」

僕はドライブで一気にハーフラインまでボールを運び込む。智花くんほどではないが、僕もそれなりにドライブには自身がある。ろくにマークマンもいなかつたので、ここまででは楽に運べた。

今、それぞれみんなにマークマンは一人ずつ。智花くんのダブルチームは解かれたようだ。

ドリブルをしながら回りを見渡す。D組のみんなのディフェンスはなかなかのもので、パスカットを虎視眈々と狙つてゐるようだ。

……ふむ、ここは

「もうつた！？」

「……甘いよ

余所見をしていた隙を狙つたのか、僕の右手めがけて手を伸ばしてくる。だがそれは手を後ろに引いてかわし、そのまま背中に持つていつてそのままゴール下へビハインドパス。ちよつとよく滑り込んでいたひなたくんにパスはわたる。

「おー。たけなか直伝

ノーマークのまま打たれたショート。

「Great! ひなたちやん」

そのショートは、往生際悪く2回半もリングの上で転がった後、ネットの中へと吸い込まれていった。

scene · 14 試合開始（後編）

まだまだ新技は出してません。

多分次、出せる…………かな？

scene・15 新技お披露目（前書き）

はいっ。更新です。

やっと新技が出せました。焦らしに焦らした割には大したものではないかもしませんが、ちょっとぴり期待しててください。

それではどうぞ。

## 【C組 2 - 2 D組】

ようやく僕たちC組の、記念すべき初得点はこの合宿で見事に成長を遂げたひなたくんがその力を發揮することで得ることが出来た。予想外の展開にD組のみんなは戸惑っているようで、そんな彼らからボールを奪うのは簡単だった。ハーフコートを過ぎた辺りでボールを奪う。

「真帆くんっ」

「くつ、マーク！」

右サイドから切り込んできた真帆くんに、ドリブルをついていた右手だけでバウンドパス。

真帆くんのシュート精度は前回の対抗戦で披露されているので、やっぱり警戒しているみたいだ。相手のディフェンスが全体的に右サイドに寄る。

「ぬつ、くつそー……アイリーンっ！」

フェイスガード【相手にべったりと張り付き、執拗にプレッシャーをかけるディフェンス】とまではいかないが、抜かれるなどを考えないシートだけを打たせまいとするディフェンスは、今の真帆くんの力では振り切ることが叶わない。山なりのパスをインサイドに投げ、愛利くんにボールを渡す。

「うつひやう……け、慧くんっ」

相手のプレッシャーが強く、ショート可能な距離まで詰める」とが出来なかつた愛莉くんは、またも山なりなバスを僕に渡す。

「くつ……またか」

トップ、右サイド、中、再びトップとあおられた僕についてくるディフェンス(ビブスの合間からちらりと菊池という名前が見えた)が苦々しぐつぶやいた。……まあ、パスワークで敵のディフェンスを煽るのは基本だからね。

次の手を搜してみるけど、なるほど夏陽くんが言つていたようにディフェンスはかなり強化されている様子。みんな自分のマークマンを振り切らうと必死だ。

「へえ、驚いたよ。ハーフラインからのターンオーバーなのにすぐ自分マークマンたぐい早く、振り切らうと走つてもずつといつてぐるタフネス。……やるね」

「……厭味にしか聞こえねえぞ? 余裕綽々な顔でそんなこと言われても」

「いや、本心だよ? 楽しくて仕方がない。やっぱバスケはこうじやなきゃね」

のんきに話をしながらも、実際はボールをめぐつての攻防が繰り返されている。

そして、一瞬の隙を見つけた。

「あつ!—」

僕のフェイントに引っかかり、菊池くんの重心が僕から見て左にズれたところで、一気に抜き去つた。そしてそこからゴールへ向かつて直進する。

「くそっ」

愛莉くんについていたティファンスがすぐさまカバーに入り、僕を止めに進行方向正面へと出てきた。その瞬間に進行方向を斜め左へとずらし、抜きにかかる。つられるように、彼も同じ方向へついてくる。

「待て、ついていくな！！」

味方であるはずの夏陽くんがコートの外から彼に声をかけたが、気付いたときにはもう遅い。彼はすでに、ショートを打つべく飛び上がった僕を妨げるようジャンプしていた。位置は完璧。確かにこれはショートは打てない。だけど狙いは、

「愛利くんっ！」

そのまま持ち手を左に変えて、背中から逆側のインサイドにいる愛莉くんへビハインドパス。完全に虚を突かれた彼はバスを防ぐことも出来ずに簡単にバスを通させてしまう。

「え、ええいつ……！」

見事にキャッチしてくれた愛莉くんは、ノーマークの状態でシューを打ち、見事にショートを決めた。

「ナイッショ、愛利くん」

「うん。……えへへ」

ティファンスに戻りながら、嬉しそうに笑う愛莉くんとハイタツ

チ。

ちゃんと言いつけ通りにボールから田を離さないよつこじしてくれていたみたいだ。こういうトリックキーなパスは、出す側よりもむしろ受け取る側の方が難しいことがある。それに完全に裏をかく」とも多いため、少しでも気を抜いたらキャッチミスをしてしまう。こういうパスは、チームメイト同士の信頼関係がものを言うんだ。だからキャッチしてくれた時は、僕も信頼されているんだと凄く嬉しい気持ちになつた。

その後も、D組のオフェンスはぎこちないものだった。その隙を見逃す手はなく、容赦なくボールを奪う。

「マークっ！」

再び僕がボールを保持したところで、ディフェンスがつく。……うん。なんだか警戒対象とみなされているみたいで實に心地がいい。それではお礼として、新しい技をお見せしようかな。

「真帆くんっ！」

そう言つて、右サイドにいる真帆くんに右手でバウンドパスを出す……けど、

「なんてね

「えつ……ーー！」

そのパスは真帆くんには向かず、直角に曲がつてインサイドにいる愛莉くんへと渡つた。

これが僕の異常に曲がる手首を利用して生み出した新しい技だ。手首のスナップを最大限に利用し、ボールにかなりの回転を加えて

バウンド後の進行方向を変えるのだ。回転の方向や速度、バススピードを調節することによって自由自在な軌道を描くバスが出せるようになった。

これもあらかじめみんなにお披露目はしてあるので、驚くことなくキャッチしてくれる。

「智花ちゃん！」

そこにディフェンスを振り切った智花くんがインサイドへ切り込み、手渡しのように至近距離で愛莉くんからボールを受け取ると楽々ショートを決めた。

【C組 6・2 D組】

scene・15 新技お披露目（後書き）

技の名前、実は決まってないんですね。

と言つ事で、この自在に軌道が変わるバスの名前を募集しますっーー！  
ご協力お願いいたします！

はいっ。更新です。

球技大会編もこの話を含めて後2話です。  
長かったなあ……。

立て続けに得点を手に入れることに成功した僕たちだが、相手も氣を取り直し始めたらしく先程までのぎこちないオフエンスではなくってきた。このメンタルの強さは見習うべきだろうね。

「はつはつはー！ どうしたみんなー！ 最後まで諦めちゃダメだぞー！ ファイトー！ D組ー！ ファイトおー！」

そして、ヤマ先生の声援。この声援で、D組のみんなの顔に元気が完全に戻ってきた。

体育の授業で、ほぼ毎回受けている僕だからこそわかる。ヤマ先生の声援には、何故だかもう少し頑張ろうという氣を起させることがあることに。それは熱血体育教師故の熱意か、先生の人望か。先生の熱い声に、こちらも熱い気持ちで応えたくなるんだ。

戦略なんて何もまさに根性論なのだが、その時に常識を逸する論理が、彼らD組を再び元気付けたのだ。

「これは……氣を、引き締めないと……ね

「慧くん、大丈夫？」

「うん……大丈夫、だよ」

そして、今日もまたやつてきた。喘息の発作だ。わずかではあるけれども、呼吸をするたびにあのイヤな音が混じっている。だけどまだこの空氣を味わつていい。紗季くんには悪いけど、もう少しだけ出させてもらおう。

はつきり言つて、D組のみんなの底力は称賛に値する。あれから、  
気を取り直した彼らは立て続けに2本シユートを決め、点差を縮め  
た。だがこちらも、やられっぱなしではいられない。こういう場面  
で「そ一番力を発揮する真帆くんと、Hースの智花くんがシユート  
を決めて点差を戻す。けれども、負けじとD組はさりげに点をもぎ取  
つた

### 【C組 10・8 D組】

そして遂に、喘息の発作が強く出てきてしまつたため、僕はベン  
チへと強制送還。紗季くんと交代した。

「凄いじゃない、ケイ。驚いたわ。後は私たちに任せなさい」

交代するとともに、紗季くんはそう声をかけてくれた。

「お疲れ、慧」

ベンチに座ると美星先生が声をかけてくれた。  
タオルで汗を拭き、ドリンクを飲んでから答える。

「はあ、はあ……お疲れ、様です」  
「すげえな。あんなことも出来るんだな。…………樂しかったか？」  
「そう、ですね……樂しかったです」  
「うむ、その心意気やよし！ 後はみんなに任せて応援でもしてろ  
な？」  
「はい」

昴さんが入つている飛び箱の上から、優しく見下ろしてきた。確かに楽しかったけど……。

「ああ～…………悔しいなあ」

「なんだよ。アレだけボコボコにしておいてやり足らねえのか?」

タオルで顔を覆いながら天を仰いでそうつぶやくと、横からちょっと不機嫌そうな夏陽くんの声。タオルを取り外してそっちを見ると、呆れたような顔をして僕を見ていた。

「ボコボコつて……そんなことないでしょ。 2点差だし」「そういう問題じゃねえ。アレだけ楽しそうにやつてたのに何が不満なんだよ」

「不満は別にないけど。…………ただ、1点も『ゴールを決められなかつたことと、僕の『ディフェンスをしてた菊池くん、だっけ? 彼に4点奪われたのが悔しい』」

ふいつと視線を夏陽くんから逸らす。きっと、今は少し俯てくされているような顔でコートを見ているんだと思つ。これで話は終わりだと思つたけど、つられるようにコートの方を向いた夏陽くんがポツリとつぶやいた。

「…………そんなこと、無いと思つ」

「え?」

「慧は凄くよかつたと、思つぞ? 何でいうか輝いていたつていうか……うん。カッコよかつた」

「え、あ、う…………Thanks」

びっくりして彼の方を見ると、自分が何を言ったのかようやく理解したような顔で、徐々に顔が赤くなつていった。そんな表情をす

るものだから、僕もつられて顔が赤くなつていいくのを感じた。

そして、すぐ隣で普段は似ていないのにこういう時だけ似た表情でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている2つの視線も感じた。

メンバー チェンジで紗季くんが出てきたことによつて、少々油断したらしいD組。だが、それはかなり甘い。みんなのすばらしいパスワークに翻弄された後、十分に注意していたはずの紗季くんの斜め45度からのショートを決められてしまい、点差が広がる。

僕が交代した後、ガードをやつしているのは何と紗季くんだつた。昂さんにお願いして、ドリブルを強化したらしく、スマーズなドリブルで進行し、D組や夏陽くんを大いに驚かせていた。だけど、僕たちはそれがハツタリだと知つていて。これは可能性の提示だ。昂さんは、紗季くんにガードの素質を見出していた。普段の学生生活でも見せる統率力。時には残酷とも見える、冷静な判断力。そして、時折みせる頭のよさ。これは、ガードとしても重要な力だ。この試合で僕を先に出したのも、彼女にガードとしての動きを見せるためだったのかもしれない。

そして、その目論見は成功だと思う。紗季くんの思わぬ行動とみんなのパスワークにD組は翻弄され、点数を奪うことが出来たのだから。

【C組 12 - 8 D組】

「 決めた、ハラをくくろう。今更迷つたって仕方ない。マークは脊椎だ。ひなたは内に切り込んでこない限りは無視。それで

点入れられたら諦めよう

だけどの組もいつまでも驚いてはいない。先程持ち上がった気持ちは簡単には下がらずしっかりと対策を持つて試合を続行する。跳び箱の合間から昴さんが頷いているのが見え、それが正解だと理解する。

「さーて、時間からして……一発必中つて感じだな」

まだ4点差があるけれども、油断できないこの状況。昴さんがぼそりと呟いた。それについて、僕も夏陽くんも何も言わない。特に根拠はないが……いや、そんなことはないか。みんなのチームワークなら、大丈夫だと信頼していたから。

「ミホ姉、最終作戦だ」

「……あいよ」

美星先生が指示を出すと、智花くんが右サイドからドリブルを仕掛け、残る4人全員が左サイドに布陣を敷いた。

この陣形は、アイソレーション【敵のディフェンスを片側に集中させて、個人技の強い選手が一対一を仕掛けやすくする陣形】。智花くんの高い突破力を生かし、引き上げるための陣形と言つてもいいだろう。

しかしここでもD組は、智花くんのダブルチームを崩そうとはしなかった。すなわち、ディフェンスは智花くんに2人、そして左サイドにどっちつかずで3人という状況になつた。

そしてこれは、今度こそ智花くんだけは何としても押さえ込むという覚悟が見て取れる、実に正しい選択だった。

だから、問題はこの後。

時間帯からして、これは残り少ない、もしかしたら最後の攻撃チ

ヤンス。智花くんがダブルチームの上からあえて来るかもしれない。パスであるなら有効位置で受けられる紗季くんが第一候補。しかし、真帆くんがいつ右サイドに飛び出してくるかもわからないし、愛莉くんやひなたくんも、フリーであれば十分にシュー<sup>ト</sup>を納められるだけの素質がある。

一步先の読み合いが、試合を大きく左右する場面。

じり、じりと、智花くんは様子を伺つ。

……やがて、

「　　バスだぞっ！」

高い軌道で放られたスナッップパス【ドリブルのモーションからボールを頭上に掲げて、手首の振り抜きで出すパス】はゴール下付近の左口一ポスト、愛莉くんが掲げた手の中へ。

「潰す！」

しかし、マークマンは近い。身長差故に、パス自体は難なく通つたけれど、進路はボールが到達する前に不穏な台詞とともに塞がれてしまった。そして、怖気づいてしまった愛莉くんは、

「　　お、お願いつ！」

真後ろに、パスを出した。角度のまったくない、リングの真横へ。そこでボールを受けたのは

「やれるつー！　真帆くんつーーー！」

ひなたくんと共に、夏陽くんの手によつて第2の武器を宿された少女。

叫びを真っ向に受けて、0角度から、ボードが使えず距離感も図りづらいもつとも難しい位置から、真帆くんはショートフォームに移る。

正直なところ、真帆くんのこの位置からのショートは決定率で言えばまだあまり高くは無い。

確率論なら、時間がまだ少しある今なら他の方法で攻撃したほうが確実だろう。

けれども、真帆くんには裏づけがある。ここ一一番の勝負強さと、持ち前の成長力。

そして、夏陽くんと共に歩んできた、毎日朝夕200本ずつのショート練習という、裏づけが。

だから、真帆くんの手から放たれたボールは、音もなくリングに吸い込まれていった。

慧の技名、まだまだ募集中です。

はいっ。遂に球技大会編が終了ですっ！！

それではどうぞっ！！

慧の技名まだまだ募集中っ。

今後も、新しいのが出る度に募集するかもです。

「あつがとハレコましたハー。」

試合終了後の整列を終え、勝利を手にした女バス5人がこちらへ駆け寄ってくる。

「みたかナツヒツー やつぱあたし天才じやねー？」

「ふん、言つてゐる。まだドリブルもターンも全然出来ねえくせに。

まあ、あのショートはそこそこ……だつたけどな」

「ねーたけなか。ひなのショートは？ ひなも、ショート決めたよ

？」

「…………お、おう、パークト、だつた」

「うがー！ やつぱり差別だーー！」

「ふふ。ま、よくやつたわよ、真帆。…………本當は最後、私だつて決めよつと思えば決められたんだけどね。今日のところは譲つてあげたわ、お手柄を」

「…………えへへ、紗季ちゃんも内緒で練習してたんだよね。ドリブルだけじゃなくて、横からのショートも」

「ちょ、ちょっと愛莉つー！ 言つちゃダメつて約束したじゃない！」

「！」

「と畜つよつ、言つちやつたら内緒で練習した意味なによ…………」

「…………紗季、頑張りすぎだよ。…………ふふつ。すごいね、みんな」  
「なーにトモ、変な顔して。…………そういえば、愛莉も毎日ちやんと走つてるんでしょ？」

「…………えへへ。それくらいしか、わたしはまだできないから」

「いやいや、それも大事だよ。僕みたいに途中で退場するようなひ弱な体力じゃ使い物にならないからね」

「何言つてんのよ、ケイ。あなたがあれだけ活躍してくれたから私

も安心して出る」ことが出来たんだから」「そうかい？ そんな実感はないけど、そつ言つてもうるさいよ」

美星先生と夏陽くんを中心にして、歓喜の輪が広がつていいく。次第にその輪は広がつていき、気が付けば周りはC組のみんなでいっぱいだった。

「ね～、み～たん！ 優勝したし、約束通りジュースお～ひつてよー！」

「どこからともなくそんな声が上がり、それが呼び水となつて『ジユース！』コールが広がつっていく。

すっかり忘れていたけど、たしかそんな約束があつた気がする。学校にある自動販売機で好きな飲み物をおごってくれると言つ。…  
・僕は 鷹がいいな。

でも、一つ重大な問題があるはずだ。

「えー、今？」

美星先生が少しだけ戸惑つたように返事をする。

それはそうだ。今美星先生が乗つている跳び箱の中には昴さんがいる。それを放つておくわけには行かないだろう。……諸手を上げている真帆くんやひなたくんは忘れているみたいだけだ。

「ま、いーか。よつしゃ、じゃーみんな付いてこいやー。」

先生は跳び箱から降り、『わーい！』といつ歓声と大在の足音を引き連れて体育館の出口へ…… つてえ！？

「……え、えつー？ 美星先生、あのーー！」

「すばつ…………」の跳び箱はどうするんですか！？」

取り残された智花くんと僕が跳び箱を見ながら戸惑った声を上げる。

『なんとかしてくれ』とでも言いたげな熱視線が、そこから感じられた。

「行こう。トモ、ケイ。しあわせないよ。今、ここに残つたら逆に怪しいし。大丈夫、みーたんの事だからもう逃げ道は確保してあるのよ。…………ですよね」

「そ、そうだね。遊んでいよいよつでしっかりしてると、大丈夫だろうね」

笑顔で紗季くんが目配せする。そう言わると、そうだろうね。美星せんせい、結構抜け目ないし。少し近づいて隙間から昴さんをうかがうと、ウインク……っぽいもので合図を送ってきた。

「え…………大丈夫…………なんですね！ わかりました！ では昴さん、私たちもジュースご馳走になりに行つてきますねっ。あとで、ゆっくりとお話をさせてください。ふふつ」「そいじゃまたあとでなつ、すばるんつー！」

美星先生に遅れないように、僕たちは走つて追いかけた。

- Girls talk -

紗季

『ねえ、みんなは何にする?』

まほまほ

『んー。やっぱあたしはファ タだな! グレープで』

ひなた

『おー。ひなはね、にゅーさんいんりょー』

あいり

『乳酸飲料だとマーハーとかかな? ひなちゃん

ひなた

『おー。それ。だいすき』

あいり

『おいしいよね。私はどひじょつかな……オレンジジュース、かな』

紗季

『2人は? もう決まった?』

湊 智花

『私はスポーツドリンクかな。慧くんは?』

ケイ

『ちょっと待つて…… 鷹か伊 門かで迷つてゐる……』

紗季

『……………どつちも同じでしょ』

「あーもー汗だくだ！ ジュース飲みに行つてる場合じゃなかつたぜ！！」

真帆くんを先頭に、引き戸を開いて体育館倉庫の中へと入る。ジュースを貰つてすぐ、僕たちはここにやつてきたのだ。もちろん着替えるために。

「あはは。でもなんだかすっかり、こここの常連さんになっちゃつたね、私たち。ちょっととかび臭いけど、何より6人でくつろげるし」「そうだね。でも結構倉庫とかの臭い、僕は結構好きだな。それに静かなのもいい」

智花くんの言葉に同意し、跳び箱やマット、モップなど色々おいてある倉庫を見回す。体育館の中にあり、誰もいないこの倉庫は僕たち女バスの更衣室兼談話室みたいな感じになつていた。

「……はう、なんだかごめんね、みんな。わたし、やっぱ全然役立たずで。……もっと上手くなりたいなあ、バスケ」

溜息混じりに、弱々しく愛莉くんがそう呟いた。

今日の試合を振り返り、眉尻を下げて申し訳なさそうな顔をしている。

「……違うよ。愛莉がバス出してくれたから、真帆のシューートにた

どり着けたんだよ。……勝てたのは愛莉のおかげだし、みんなのおかげ」

「やつだよ。試合の序盤で、僕のノーサインのビハインドバスを愛莉くんがキャッチして、ちゃんとショートを決めてくれたから僕はその後も自由にプレイできたんだ。あやじどりでもらえなかつたら、躊躇して伸び伸びとプレイできなかつたよ。それも、愛莉くんのお陰さ」

智花くんと共に、僕も思つてこたことを素直に、そしてなるべく優しい声で言ひ、

それを聞き、愛利くんの顔にも笑顔が戻つてきた。

「……えへへ、ありがと。智花ちゃん、慧くん」

「あー。でも、球技大会も終わつちやつたかー。もひ、田標なくなつちやつたなー」

「……おいおい真帆。あんたまさか、また飽きたの?」

「飽きた? 何が?」

「バスケ。もしかして、辞める気じゃないでしょ?」

「は? なんでこんな楽しこと、辞めなきやいけねーんだ。……じゃなくて、なんかまた、『マイシに向けて頑張るぜー』みたいなのが、欲しいかなーって」

……確かに。やつこい田標は、人を成長せしむのに大いに役立つし、重要だ。

「……なんだ、驚かないでよ。ふふ、そういうなら私も賛成、かな」

「だろ! ? でぢやおつか、あたしたちもつー。」

「えつ。…………へ、うそつー。そうだね。…………そのうか、出たいね」

「……？」

どうしたのだろう？ 智花くんの表情が、一瞬だけ曇った。なにか都合の悪いことでもあるのだろうか？ でも特に思いつくこともなかつたので、放つておくことにした。試合か……なら。

「あるよ。大会」  
「ええ！？ ほんとかけっちゃん！？」  
「とある大手スポーツ店主催のストリートバスケの大会がね。確かに……近々やる予定だつた気がするんだ。こんど調べておくよ」「本当！？ ありがとうございます慧くん」「いえいえ。どういたしまして」

うん。きっと気のせいだ。ストリートバスケだけど、試合が出来るとわかり智花くんも興奮気味に聞いていた。何の杞憂もないだろう。

「あはは、楽しみだなー。もつかんとけっちゃんいるし、きっときなり優勝だなっ！」  
「ばーか。そこまで甘くはないだろ。……でも、良い線はいけるかもね、私たちなら」「いえいえ。どういたしまして」

「……はー、それにしてももうすぐ6月だけあって今日は暑いわ。スペツツもべつとり」

そういうて、紗季くんがスペツツを脱ぎだす。それを合図に、み

んなも着替えだした。

「確かに。日本の夏は蒸し暑くてたまらないからね」

「…………」

「同意。ハワイとかのほうが気持ちいい暑さだよな」

「うん、そうだね。気候だけで言えばあっちの方が過ごしやすいね」

「…………」

あれ？ なんだか真帆くん以外のみんなが遠い田で僕たちを見て  
いるけど……どうしたんだりう？

「そ、そういうえばひなちゃん。そのパンツ初めて見た。かわいい、  
とかげさんだね」

「おー、なんか合宿で一枚無くしたから、買つてもらつた

「…………！」

「…………無くしたの？ まさか、盗まれたとか無いわよね」

実はそつなんだ。とはとても言えない。

今ここで真実を知っているのは僕だけなのだろうけど……2人を  
貶めるようなことは言いたくないし。

「え、すばるんこ？」

「…………」

「す、昴さんがそんなことするわけ無いじゃない！……」

「…………夏陽でしょ、可能性があるとした」

「…………そ、それもないと思うな。ほら、夜は僕やひなたくん  
と練習しててそんな暇なかつたし？」

危ない！－！ あらぬ容疑（事実だけど）が夏陽くんにかけられる  
といふだった。

幼馴染だからだと呟つて、何でもかんでも疑つたらいけないと思つよ？！「うん！！

「あれ、わたしの普通の「ラガ」……。どうだろ？」

「……もつかん、出してやれ」

「私じゃないもん！」

「じゃあけっちゃん」

「僕でもないからね！？ つていうか、無くなるイコール盗まれたと勝手に思うのはいけないとと思うな！？」

「あ、あせー。あのとび箱の置くに何か白いものが見えたような…」

…

紗季くんが差す方向には一つの跳び箱。その後ろに白いものが見えた。

「ええ？ どうしてあんなとこに入っちゃったんだ？」

指し示された方へ、愛莉くんが近づいていく。

「…………えっと、紗季ちゃん。」の後り？

「うん、それ」

倉庫の中央に位置し、なかなかの存在感を出す跳び箱の後ろからそれを取り出す。

「あ、あつた。これこれ」

「きつと風がなんかで飛んじゃつたんじゃない？ 次からはりちゃんとかばんの中にしまつとくのよ～」

「は～い。」めんなれ～

飛び箱から離れ、戻ってきた愛莉くんに紗季くんが注意する。着替えた後はそのままみんなで少し雑談した後、帰りのH.Rに遅れそうになつたので急いで教室へと戻つた。

だけどみんなとの雑談が終わつた後も、僕はある跳び箱に違和感を感じ続けていた。

……あれつて、あの飛び箱って確か昂さんが入つてたやつだよ、ね？

いやいや、さすがにもう入つてないはずだよ。うん。きっと、昂さんが帰る前にここに置いていったに違いない。

そう自分に言い聞かせながらも、みんなと倉庫を後にするまでその飛び箱から視線を外すことは出来なかつた。

Hピローグが前話、前々話よりも長くなつてしましました……。

これで球技大会は終了です。

次回からは、慧がちらつと書いていたストリートの大会です。  
あ、でもその前に小話とかも入れようかな…………？

考えておきますー。

はいっ。更新です。

今回お友達（と私が一方的に思っている）であるBellさんの  
お話を借りました！！

ほんのちゅうひとつだけ第3章にもかかわってるので閑話ですがお  
付き合いください。

それではどうぞ…！

「なあ慧。これ見てみろよ」

朝、みんなで朝食を摂っていたところで父さんが一冊の冊子を渡してきた。それは、僕が住んでいる市が発行しているイベント案内みたいなものだ。月に2回発行されるそれには、市の図書館の新着案内や学校行事の紹介。今月市内の病院で生まれた赤ちゃんの紹介なども掲載されている。その中には商店街のイベントなども載つてある。父さんが見せてきたのは、その商店街イベントのページの端。そこには、

「へえ……“フリースロー大会”か」

ターミナル駅前のアミューズメント施設『オールグリーン』。そこで、地方テレビが主催で色々な施設を利用したイベントが多数行われているらしい。その中で、父さんが見つけたのがフリースロー大会だ。なんでも、一昔前のスポーツ番組を真似て普通のゴールとは違う特別なゴールを使ってやるらしいのだ。大人・中学、高校生・小学生の3つの部があり、それぞれ優勝者に豪華賞品をプレゼントだそうだ。

「事前申し込みは不要、当日に登録で開催日は……ああ、今日なんだね」

「ああ。どうだい？ バスケ部のみんなを誘つて行つてみたら」

「うん……うん。そうだね。部活も休みだしみんなを誘つてみるよ」

- 交換日記 ( SNS ) 01 - Log Date ? / ? / ?

ケイ

『みんな、いるかい?』

湊 智花

『おはよう。どうしたの?』

紗季

『珍しいわね。ケイからなんて』

ひなた

『おー。ねはー』

あいり

『おはよみんな』

まほまほ

『まだねむこはさきてやつたぞ。ビしたつ。』

ケイ

『今日、面白いものを見つけてね。バスケの自由参加型のイベントが“オールグリーン”で開催されるらしいけど……もちろん…』

湊 智花

『行くつ…!』

10

「うん」

ひなた

# おもしろい たのしみ

九四  
九五

『あーあー!? もういいじゃない! 』

紗季

あら  
まだ暗いんじゃなかつたの？  
寝てもいいのよ

九四

なんだとてめ

ケイ

『まあまあ落ち着いて。……じゃあみんな参加でいいね？ 詳しいことは直接話すからそうだね。……13時にターミナル駅前集合で

まほまほ

『りょーかい!! いまからあわめしたべてそれこーいく』

紗季

『わかつたわ。たのしみにしてる』

『おー。またあとでー』

『えへへ……楽しみだなあ』

ケイ

『あ、そうだ智花くん』

湊 智花

『どうしたの?』

ケイ

『連絡がついたらでいいから昂さんも誘つておいて。高校生も参加できるイベントだから』

湊 智花

『う、うんっ！… わかった！… …えへへ』

ケイ

『それじゃあみんな、また後でね』

そして、約束の13時。僕が集合場所に到着するともうすでに全員集まっていた。

「おはよう。みんな  
「うん。おはよう」

「遅いぞけつちん

「珍しいわね。時間、ギリ、ギリ」

「おー。けいちこくー」

「ひなちゃん、遅れないから遅刻じゃないよ……」

「おはよう、慧」

昴ちゃんも、すでに到着していたみたいだ。

「おはよつじやこます。すみません遅くなつて」

「いいよ。それよりありがとうな、俺も誘ってくれて」

「誘つたのは智花くんですけどね」

「でも、このイベント見つけたのは慧なんだろう？」

「そりだけつちん！ イベントってどんなことやるんだ！？」

キラキラとしたいい笑顔で、真帆くんが尋ねてきた。本当に、楽しみでしようがないと言つ顔だ。

「詳しく述べたんだけどね、なんでも特別なゴールをもつてのフリースロー大会が開かれるみたいだよ。大人・中学・高校生・小学生の部があつて、優勝者には豪華賞品プレゼントだって」

「へえ……ちなみにどんなの？ 賞品つて」

「詳しく述べたんだよ。行つてからのお楽しみだつて」

「そうか……それじゃあ行こうか」

『はいっ！』

わくわくと胸を躍らせながら、僕たちは『オールグリーン』を田指して歩き始めた。

話には聞いていたけど、『オールグリーン』は結構広いところだつた。初めて訪れたのできょろきょろしつぱなしで、昴さんや智花くんたちからちょっとだけ笑われてしまつた。目的地は屋上にあるバスケット「ート」なので他の場所には寄らなかつたけど、今度兄さんたちでも誘つて来てみようかな……。

1階からエレベーターに乗り、あつという間に屋上へ。

扉が開いて強い日の光に照らされると同時に、そこには金網に囲まれたバスケット「ート」。そして、たくさんの観客。

「うわっ。結構いるもんなんだなあ……」

昴さんがそんな感想を漏らすが、ある1点を見つけてこの人だけは参加する人だけじゃないとわかる。

「いや、ほんとは多分野次馬だと思いますよ」

「え？ 何で？」

「ほら、そこ……」

僕が指差したのは、総合窓口。そこには少數ながらも列が出来ていた。全員が全員動きやすい格好をしていて、窓口の上に参加申し込み受付と書いてあるので、丸わかりだ。

「じゃあ、早速申し込みするか

特に何をすると云うわけでもないので、そつそと列に並ぶ。

受付は、驚くほどあっさりと終わった。住所と氏名、年齢を言いだけで終わりだったのだ。吃驚したのは昇さんが受付の人と知り合ったこと。よく「」を利用していろいろしく、いつの間にか顔見知りとなつたらしい。

参加者の総数は14名。予想以上に集まらなかつたらしく、予定を急遽変更して一般の部と少年の部の2つに変更となつた。学生が特にいなかつたみたい。しかも内7名が僕たち小学生で、ほぼ小学生だけのイベントのような空気になつてしまつた。

ちなみにあと1人というのが……。

「な、ナツヒツ！？」

「お、お前らなんで！？」

「何でつて……参加するからに決まつてるじゃない」

夏陽くんだった。

男バスもちょいと部活が休みだつたらしく、暇つぶしに来たらし  
い。  
だからといつてそれで終わるはずもなく。

「なんだお前。賞品田当てに来たのか？ いやしいヤツめ。ま、どうせ優勝なんかできないだろうけどな」

「賞品田当てはお前だろ？ つーかお前の方が優勝なんかできるか

「なにいつ！？」

「なんだよ！？」

「はいはい。仲がいいのはわかつたから静かに。他の人に迷惑よ

ヒートアップしそうになつた所へ、紗季くんが仲裁に入る。

『仲良くなんかないつ！』

…………「うん。息ピッタリだね。

「さあみなさん、おまつたせいたしました！！ これより今日のメイソニベント。フリースロー大会を開催いたします！！」

僕たちのエントリーが終わり、もう参加者が集まりそうになかったので早めに開会式（のようなもの）が始まった。司会らしいジャージ姿の背の低い女性が人懐っこい、そんな笑みを浮かべて、マイクを持ってコートの中央に立っている。

「司会は私、覚醒未遂でお送りします！！ 参加者のみんなは、親しみをこめて覚醒ちゃんって呼んでねっ！！」

生中継らしい、テレビ局の本格的なカメラに向かってやたらと手を振ったりピースをしている。……本当にタレントさんなのだろうか？

まあでもそのフランクな行動のお陰で、僕たちの緊張が少しほぐれていいるのも確かだ。

「で、は。さつそく選手の入場アーリンド紹介をしまじょうーー！ まずは一般の部からです」

ADと思われる人から、選手名簿を渡され、一瞥する。

「では、Hントリーナンバー1番……から6番まではぶつち  
やけサクラなので以下省略」

『『うおいつーー』』

予定と違つか、省略されたサクラの人たちに加えてほとんどの  
スタッフさんがツツコミを入れていた。  
って僕たち以外全員サクラ！？

「一般の部ラストはこの方！ 現役高校生の長谷川昂さんです！」

「ラストなはずなのに、なんか釈然としないな……」

自分の前の人たちの紹介が全員飛ばされてしまったので、どこか  
複雑そうな納得がいかなそうな顔をしてコートに入していく。

「ここにちは初めてまして。覚醒未遂ですー」

「……ど、どうも」

「昂さんは高校生と言つ」とで、部活はやつてますか？」

「……一応、バスケ同好会を。非公式ですけど」

「もうそんなに堅くならぬですまいるすまーいるつーー」

「うわっ！ ちよつ、やめてくださいつーー」

少し緊張気味の昂さんの回答はぎこちない、といふか少しそつけ  
ない。それを見かけた覚醒さん（ちゃんと付けしたくない）が昂さん  
の両頬を掴んで左右へと開いて無理やり笑顔を作させていた。意外  
と力が強いのかそれとも昂さんがフュニーストなのかその手を引き  
離せないでいた。

それはそれとして……。

「もっかん、元気だせよ」

「え？ ど、どうして？」

「あの人も仕事でやつてるんだからね……嫉妬して意地悪なことしちゃダメよ？」

「そ、そんなことしないよう…」

ちょっとびり智花くんがふてくされたような顔をしていたのが気に  
なった。

まだ続きます！！

あ、言い忘れていましたが慧の技の名前が決定いたしました！！  
ご協力してくださった皆様、ありがとうございます。

その内オリキャラ紹介と共に発表しますので、それまでお待ちください。

はいっ。更新です。

今回は、ちょっとグダッてしまった上にあまり進んでいません。申し訳ないです……。

「はいっ。というわけで以上で一般の部参加者の皆さんでした」  
ようやく開放された昴さんは赤くなつた頬をさすり続けていた。  
やはり結構な力で掴まれていたみたいで少し痛そうだ。

「それでは次は少年の部です! エントリーナンバー8番……三

沢真帆ちゃん」

「はいはーい!…」

元気よく片手を上げてコートの中央へと駆け寄つていぐ。

「おおっ!! 元気いつぱいだね!! …… いえーいつ! たあのし  
んでるかーい!…?」

「いえーい!! 楽しんでるぜー!!」

「……あの2人、似たもの同士ね」

「そうだね」

きっと、凄く気が合つんだらうね。異様にテンションの高い覚醒  
さんに感化されて真帆くんのテンションもおかしくことになつてい  
るみたいで、ノリが一緒だつた。

「真帆ちゃんはー、バスケはクラブとかに入つてるの?」

「おう!… あそこにある……あのアホ面した男子以外あたしと一緒にバスケ部なんだ」

「…………」

「お、抑えて夏陽くん」

「そうよ、テレビがあるんだからケンカはよくないわ……」

顔中に暗い陰を落とした夏陽くんが今にも飛び掛りそうになるのを、僕と紗季くんで止めるのが精一杯で、そのあとあの2人の間にどんな会話が繰り広げられていたのかはわからなかつた。

「はいっ。いやーいい子でしたね真帆ちゃん。すつしつついく私と氣が合ひやうです！…！」

真帆くんを今僕たちがいる場所と『ホール』をはさんだ反対側にある選手控えのベンチに送り、最後にそつ締めた。

「続いては、エントリーナンバー9番。永塚紗季ちゃんです！…！」  
「こたにまくは」

さすがはクラス委員長。礼儀正しくお辞儀をしながらの登場。

「情報によると、あの超人気お好み焼き店『なが塚』の看板娘だそうです！…！」

「えつ、ちょっとなんぞ知つてるんですか？」

「芸能人の情報量をナメちゃだめなのですヨツ」

そんな情報必要ないでしょ……。

「では、せつかくなのでテレビに向かつて宣伝でもビデオ…」  
「ま、まあせつかくなので……」「こほん。テレビを『』覧のみなさん。お腹が空いた時、おいしいものが食べたい時は、ぜひ本格お好み焼き屋『なが塚』へ『』来店ください」

最後にぺこりとお辞儀をすると、観客の何人かが頷いているのが見えた。かなりの人気店だと聞いていたけど、本当に有名みたいだね。こんど家族みんなで行ってみよう。

「ま、私はもんじゃ焼き推しなんですけどねっ！」

- ١٥ -

卷之三

につこり笑顔で微笑みあう二人だけど、氣のせいではなれば何か禍々しいオーラのようなものが2人の間で渦巻き、とにかくじろじろ火花を散らしているように見えたような気がした。

「はいっ。紗季ちゃんはとっても礼儀正しい子でしたねー」

心がこもつてない。

「続いてはエントリーナンバー10番。袴田ひなたちやんですっ！」

1

「おー、五ーい」

とてとてとひなたくんが走つていくと、手を叩いて迎え入れる。  
（イノセントチャーム）  
まだ無垢なる魔性は発動してないはずだけど、もうすっかりメロメロみたいだ。

「おー。よろしくお願ひします。覚醒おねーちゃん」「かーわーいい〜〜！！ ディレクターお持ち帰り〜

?

『ダメに決まってる……』

「でもこんなにかあいいんだよつ……お持ち帰りしたくなるのが人情つてもんでしょう……？」

「そんな人情捨ててしまえ……！」

もはや参加者の紹介などそっちのけで、ディレクターと呼ばれた人と覚醒さんの論争が始まった。よくよくカメラのほうを見てみるとADさんがスケッチブックをカメラの目の前に掲げ、そこには『しばらくお待ちください』と書かれていた。スタッフのみなさんも慣れているのかこれ幸いと体をほぐしたり水分補給したりしている。話の中心人物のはずのひなたくんは、ディレクターさんと覚醒さんの顔を行ったり来たり眺めている。

「うう……心苦しいけど仕方が無い。アタイは仕事を選ぶよ……しばしのお別れ。お姉ちゃんを許してね。ひなちゃん」「おー。よくわからないけどばいばい」

そしてディレクターさんの説得が終わつたのか、泣く泣くひなたくんをベンチの方へと押し出す。眼の端に光るものがあつたのは見なかつたことにしよう。ただ、ディレクターさんの顔がやり遂げた1人の漢の顔になつていた。

「はいっ。ヒツヒツヒツつてもかあいいひなたちやんでした！」

流石はプロと言つべきか、立ち直りは早かつたみたい。マイクを持ち直して本来の仕事へと戻る。

「続いてはエントリーナンバー11番。香椎愛莉ちゃんです……！」

「…………」

こつもの愛莉くんだったなら緊張でガツチガチになり挨拶すらまと  
もに出来なかつたと思つ。でも、わざ今までの覚醒さんの行動が功  
を成していなかさほゞ緊張してはいなによつだ。

「…………くう、なんてけしからん胸を。私なんか、私なんか……  
え、えつと……あの……」

「…………」  
「…………」  
「…………」

自分の胸見、愛莉くんの胸を見た途端にしゃがみこんで落ち込む  
覚醒さん。愛莉くんも、もの凄く戸惑つてゐるようだ。…………そ  
して、そんな覚醒さんに同情と憐憫、そして同じ人種であることにこ  
よる喜び等色々詰まつた視線を送る3組の眼。誰のだとか、  
無粋なことは聞かないで欲しい。

「おつとじめんねつ！　お姉さんひょつち我を忘れてたよ。愛莉ち  
ゃんむ、バスケやつてるんだよね。それではこの大会の意気込みを  
じつやつ……！」

「えつと、優勝は出来ないと思つけど……精一杯がんばりますつ  
「はーつ。ありがとつひやこましたーーー！　それでは控えベンチへ  
じつや」

早口で、若干声が震えていたのは気にしないでおい!。それが優  
しさといつものだ。

「はい。ちゃんと謙虚な愛莉ちゃんでした……」

早口ではなにか、机の震え（ややの色）せ諦めたような感じで、更に紹介は進む。

「続いてはHントコーナンバー12番。素智花ちゃんです。」「よ、よろしくお願ひします」

ちゅうぶり緊張感味の智花くんの登場。

「……頑張りつね智花ちゃん！——」Jの「時世むしの手をこ胸のほうが需要が多いからね！」

「え？ 「え？」 「え？」

落ち着けて。智花くん混乱している。

実はまだ立ち直りていなかつたのか、もう直りてしまふとしているうちに智花くんの手を握りて訴える覚醒さん。もちろん智花くんは混乱し、向こう側のベンチでは聴さんを中心のみんながなにやら騒動を起しているけど……放つておいか。

「それでは、この大企業の田舎をぶらぶら……」

「え？ 「ふ、普段お世話になつてこられる方が見てくるので、がつかりやせないよ！」一生懸命がんばります！」

「はい。ありがとうございます！——それではベンチの方へどうぞ！」

去つてこく智花くんの背中ぐ、少くともサムズアップしてこたのを見たのは恐らく僕だけだろ？

「はいっ。なんとなく私と気が合ひやつた湊智花ちゃんでした」

それはきっと氣のせいだと思つ。

飽きてきたのか、だんだん同会が雑になってきてないかな？

「続いてはエントリーナンバー13番。掛樋＝C＝慧……くん？」

「くんでいいです」

「慧くんで～す！～」

まあ……予想はしていたけどね。くんに慣れすぎたせいで、正直ちゃんと呼ばれるのはものすごく恥ずかしい。だから、最初にくんで呼んでくれて本当によかったです。

「慧くんは、ハーフさんかなつ？」

「ええ。父がアメリカ人です」

「綺麗な金髪ですね。……女の子、だよね？」

「ええ。一応」

「うんうん。私にはもう希望はないけど、君たちにはまだ未来がある……がんばりたまえ！～」

お昼の番組なのにこんなこと言つていいのだろうか？  
ただ、まあ……その声援だけはありがたく受け取るけど。

「はい。覚醒さんも、がんばってください」

「ありがとう慧くん。それでは、ベンチの方へじゅうどー」

そのまま促されてベンチへ歩いていく。

周りからの視線。特に、サクラの中には女性の同情めいた視線  
が凄く、もの凄く気になつたけど気にしないことにした。

「はいっ。ボーカルシチュな慧くんでしたー！… それではこれより、

フリースロー大会を

「

『ちょっと待つたあー！…』

そこで、静止の声が複数上がる。その中にはスタッフの皆さんだけではなくて、僕や昴さんたちの声も混じっている。なぜなら……。

「俺まだ紹介されてないんだけどー！？」

夏陽くんの存在が忘れ去られていたからだ。

「いやーなんと書つか……もつね腹いつぱいつて書つか、ね？」

「なんだよそれ！… そんなこといわれるんだつたら嘘でもうつかり忘れてたって言われたほうがましだよ！… っていうかさつきからおねーさん司会雑だなー！」

「つむへーーーー！… しつちだつて気分が乗らない時くらいあるんじゃーーーー！」

「仕事しろよ社会人つー！」

その意見には大いに賛同する。

さつきからのちょいちょい投げやりな司会はどうかと思つたのだが……、

「はいっ。とこで突つ込みのキレがいい夏陽くんでしたー！

！」

こんな風に序盤に見せていた笑顔で再びテンションを上げられる

と、これまでのグダグダ感がこのシーンのための伏線だったのでは  
と思つてしまふのが不思議だ。

閑話

## フリースロー大会その2（後書き）

ちなみに私は、もんじゃ焼きよりお好み焼きが好きです。

はいっ。更新です。

「めんなさい今回かなり短くなつてしましました……。  
今日もう一度更新できたらやりたいと思います。

「はいっ、それではっ。今回のフリースロー大会の説明にはいりま  
～すっ。……それではみなさん。あちらを『らんくだつさい!!』」

夏陽くんの紹介も終わり、やつと全員が控えのベンチに座るとすっかりテンションが回復した覚醒さんが説明に入る。

ここまで道のり、長かつたな。

覚醒さんが指差す方に目をやると、そこにはバスケットゴールと思わしきものが上からすっぽりと布をかぶせられていた。ただ、気になるのは前側のリングに当たる部分が怪しいところだ。ふつうのリングなら少し前に出るだけで終わりなのだが、今回の出っ張りは軽く3倍はありそうな雰囲気。

「はいっ。それではあ～～…………ジャンツー！ オオ～ツップンツ

「うわー、なんじやあつやー。」

バツと布が剥がされる。地面から伸びる赤いポール、黒と白の2色で形成されたボードはいたつて普通のもの。だが、布が被さつていた時点からおかしいと思われていたリングの登場。それで、会場はどよめきに包まれる。

何より、リングの数がおかしい。普通一個のはずが綺麗に縦3横3の9個並び、手前……のリングになるごとにボール一個分くらい下がり、見事3段のゴールが出来上がっていた。それが、コートの両側にたつているのだからなおさら吃驚だ。

心なしか、覚醒さんの顔が恍惚に染まっていたような気がした。

「はいっ。」これが今回使用するゴール。そして今まで黙秘されていたイベント名のはっぴょーう！――

普通にフリースロー大会がイベント名だと思つていた。

他の人たちも、え？ 名前あつたの？ とでも言つたそうな顔だ。覚醒さんの合図と共に、スタッフが2名コートの中央に現れ、お互いに何か……巻物みたいなものを持っている。そして額き合づと両端を持つてそれぞれコートエンドラインへと走る。そして巻物が開かれていき、なかなか達筆な文字が現れた。

「名づけてっ！――『狙つて狙つてナイッシュ――！――スロー D E ビンゴお――』」

やつ高々と宣言する。

「ルールはいたつて簡単。それ持ち球5個用意されます。ルールは普通のフリースローと全く同じですが、得点の計算はぜんつぜん違うので注意してくださいね――！ その気になる得点の計算は、次のようになつてます。1番手前の3つはそれぞれ1点。2段目はそれぞれ2点。そして3段目は3点となつております。え？ それのどこがビンゴかって？ むふー慌てない慌てない。それがこのゲームのキーポイントなのですっ！――」

誰も慌ててはいないが、どこかの変な通信販売のような喋りを節々に入れて説明は続く。

「縦・横・斜めのどれかで列を作ると、ななーんとポイントが倍！ 例えば、1段目の3つすべてにボールを入れると通常1+1+

1で3点。ですが、BIN「ボーナスでそれが倍！！ 6点になると  
言つことです！！ 理解できましたかな？ はい、質問はないです  
かーー？」

キヨロキヨロと辺りを見回すも、手を上げるような人はいない。  
……うん。よく出来たルールだと思つ。シンプルだけどそれなり  
に逆転措置もとられているし、これなら結構楽しめそうだ。

「はいっ。それでは、早速始めましょーっ！－－ レーツツビインゴ  
オー！－－」

そして不可解な掛け声でゲームスタート。ちなみに、その掛け声  
に乗った人間はいなかつた。

「覚醒ちゃんの、ちょっと手抜きバスケット講座！－－」

「はいっ。ここでは作中に登場する覚醒ちゃんがちょっと手抜きの  
バスケット解説をしま～っす！！ 全くバスケ知らない人用とい  
つても過言ではないレベルなので、『ハッ。テメエの説明なんて聞  
かなくともわかるんだよ。ペツ』って人は飛ばしても  
なんだと態度が悪いぞきさまあ！－－」

（中略）

「それ以外にも、私のちょっとした考察や明日から使える小技・小ネタなんかも乗せることもあるので、暇な人は見てってね～！！」

「はいっ。それでは今回の講座はフリースローについて、簡単な説明をしたいと思います。フリースローとは……まあこの辺はいいか。ようするにファウルを受けた攻撃側が誰にも邪魔されずにショート打てる事です。「ゴールの前にある円、【フリースローサークル】を2つに分けるよつにある【フリースローライン】の後ろからショートを打ちます。ここで勘違いされがちですが、後ろ半分のフリースローサークルとフリースローラインに囲まれている範囲内なら“どこからでも”打つていいのです。別に必ずラインのすぐ後ろ中央に立つてショートを打たなければならないと言つルールはどこにもありません。ただ、そこからのショートが一番狙いやさしいからという理由だけなんですね～」

「でも、今回のゲームのゴールは普通じゃありません！！！ さあ、慧くんはこのルールを上手く利用して優勝狙えるのでしょうか！？」

「かみんぐすーん！！！」

このパートナーは、反応がよければ今後ちょくちょく入れようかと。  
試験期間中で「やれこまよ……」。

はいっ。更新です。

燃え尽きました……真っ白に（いろんな意味で）。

長い割りに内容が薄いかも知れませんが、楽しんでいただければと思ひます。

「よひしゃー、じゃーあたしからだな。今までのあたしと、今日のあたしは違う！ もひひ、いきなり高得点だしてやるつー！」

もう意氣込みながら真帆くんがずんずんとコートの中を歩いていく。少年の部では一番早い番号だから、真帆くんからなのだ。すると順番は真帆くん、紗季くん、ひなたくん、愛莉くん、智花くん、僕、夏陽くんとなる。

途中で覚醒さんからボールを受け取り、ドリブルをつこてフリースローサークルに足を踏み入れる。

おお……なんだか本当に雰囲気が違つ……集中しているようだ、真帆くんの目つきや表情までこつもとは比べ物にならないほどこのものになつているこれは本當に……

「あ、その前にちよつと質問があるんですけど」「だーー！ なんだよサキー！ 意気込んでるとこに声出すなよ！ 力抜けるじゃんかー！」

かと思ひきや、紗季くんが覚醒さんに話しかけたので集中力が切れてしまつた。

「しょ、しょうがないでしょーーー。質問があつたんだから……あんたにも関係あることかも知れないでしょーー？」

「どつたの紗季ちゃん」

「あのゴールネット……ねかしくないですか？」

もういわれて改めてじつくつとゴールを見る。

よくよく見てみると普通のネットよりも短いし、何より狭い。：

…いや、と嘆息つつもむしろ、

「縫い合わせてある?」

「その通り!! あのネットは通過せずに、そのままやっけに残る仕組みになつてるのであります!!」

「なんでそんなわざわざ手の込んだことを……」

「ポイント集計の時に楽だからサ!!」

呆れて力の抜けた声を覚醒さんにかけると、爽やかな笑顔+綺麗なサムズアップでなんともこの人らしいことを言つてのけた。

「じゃあ、問題もすつきりしたといひで真帆くんやつてみよー!!」

「……つたく、どうでもいいことで集中力きらしちまつたじやんか」

ぶつくさ紗季くんに文句を言いながら、フリースローサークルの中へ入った。

ラインのすぐ後ろに立つと、2~3回両手でボールを付き頭の上で構える。狙いを絞つてショートを打つとボールは綺麗な弧を描きゴールへ吸い込まれる。

「入りましたっ!! 真ん中もど真ん中!! まずは2点獲得です!!」

「やつぱビンゴと言つたらまづ真ん中だるー!!」

「すごい真帆ちゃんつ!!」

「おー。真帆、ナイスショート」

狙い通りにショートが入つたのが、とても嬉しそうにガツツボーズをキメる真帆くん。

「こきなりアレを決めるか……やつぱり真帆くんの勝負強さには脱

帽だね

「えつ、どうして？ 真ん中なんて一番楽なんじゃない？ いつもと同じ場所だし」

僕の呟きが聞こえたのか、紗季くんが話しかけてきた。

「いや、確かに高さは同じなんだけどね。距離が違うんだ。……ほら、3段目があるせいで少し前に出てるんだよ」

そう言ってリングを指差す。他のみんなも僕の考察に耳を傾けていた。

「真ん中で考へると、3段目は距離は同じだけど高い。2段目は高さは同じだけど近い。1段目は高さは低いし近いから慣れている人……智花くんや昂さん、そして僕なんかにはもっとも難しいと言えり。意外と難しそうだ、このゲームは」

「ふーん……じゃあどこを狙っていけばいいと考えてるわけ？」

「そうだね。僕の考へでは

「

「ハヤケッちん！！ みんなにぱっかりヒント出してんじゃねー！」

！」

おっと。真帆くんから怒られてしまった。

ゲームが始まる前、このゲームはみんなとの対決だと呟つ話になつた。自分の力だけで、どこまでやれることが出来るか。それを知るために紗季くんと真帆くんが提案し、それにみんなも乗つたのだ。ちなみに夏陽くんは強制参加。

だから、ここにいるみんなにだけヒントをあげるのはルール違反だつたかな？

「……そういうわけみたいだから、これ以上は自分でどうが？」

「へっ…… もう少しで聞きたかったのに

最初から、僕たちの考えを聞くつもりだったみたいだね。心なし  
か、智花くんも少し肩を落としているように見えたが、…… きっと気  
のせいだわ。

「よーし。Jのまま全部決めるぜっ！」

そう言つて意氣込んだもの、やはり経験不足が足を引つ  
張つているようで真帆くんの勝負強さは十分には發揮されなかつた。  
2投目ははずれ、続く3投目は狙つた3段目真ん中のリングに弾  
かれ偶然2段目右へ。4投目も偶然1段目の右へと収まつた。  
そして、これが最後のチャンス。ビンゴが出せる状態なので、緊  
張が走る。放たれたボールは……。

「あー残念っ！！外れてしまひましたっ！！」

「だー！！ くつそー！！」

「真帆ちゃんの得点は、合計 $2 + 2 + 1$ で5点ですっ！！ 最初に  
してはなかなかの高得点だつたのではないでしょか。はいっ。真  
帆ちゃん。」苦労をまでしたー！！」

悔しそうな表情ながらも、真帆くんの健闘に観客や覚醒さんから  
拍手が起じる。

「残念だつたわね。ま、仇くらいはとつてあげるわ

「紗季が邪魔するから悪いんだろっ！！」

「何言つてんのよ。あれだけで途切れるなんて集中力が足りない証  
拠よ。……じゃあ行つてくるわね」

「くつそー！！」

真帆くんの恨みにも似た声を背に受け、威風堂々と紗季くんが口一トへ歩みだす。

「はいっ…… 次は紗季ちゃんですね。それでは…… どうぞっ  
「…………ふう」

覚醒さんからボールを受け取り、真帆くんと同じように両手で何度もボールを付き、頭の上で構える。真帆くんと違つ点はその構えが両手打ちだと言つことだ。

「…………ぶつ…………ぶつぶつぶつ…………」  
「…………な、何してるんだい？」  
「…………呪い。」この前漫画で見た

「ど」かの宇宙最強異星人のように、両手を畳ませた状態から外へと開き、その両掌を紗季くんに向けてぶつぶつと呪いでいる。耳を澄ませて聞いていると、「はずせ～…………はずせ～…………」とひたすら呪いでいる。お疲れ様です。

「…………ああ……」

その想い<sup>のぞみ</sup>が届いたのか、十分にリラックスしてから打つたはずの紗季くんのショートは、両手からすっぽ抜けて1段目にも届かないエアーボール【リングに届かないショートのこと】。非常に格好悪い。

「さやはははははは…… あたしの呪いが効いた！！ へつへーん  
だ。なんだよサ・キ。お前のほう<sup>が</sup>集中力ないんじゃないのか？」  
「くつ…………」のバカ真帆

続く2投目以降も、最初のエアーボールが精神的に効いたのかぱつとしない結果に終わり得点は2点のみ。

「屈辱だわ……」の私が……」

「まあその……がんばったと思つよ」

ベンチに戻つてくるなり落ち込む紗季くんを慰めるのに精一杯だつたけど。

続いてひなたくん、愛莉くんと続いたのだが2人ともあの距離のショート練習はしていなかつたのでいい結果とは言えなかつた。それでも、2人とも一本ずつショートを決めていたので満悦だつた。

「はいっ。つづいては智花ちゃんの番です。ビギン…」

「よ、よろしくお願ひしますっ」

「がんばれもつかん!! あたしらの仇をビンゴで討つてくれ!!」

「頼むわよトモ!!」

「おー。がんばれともかー」

「と、智花ちゃんしつかり!!」

みんなの声援も自然と大きくなる。

僕も声をかけようとしたが、ふと隣にいる夏陽くんが気になつて声をかけてみた。

「どうかしたかい? なんだか盛り上がりに欠けているみたいだけだ」

「いや……なんかこういうの慣れねーなつて思つて」

「はは。確かに夏陽くんはこういうバスケットでのお祭り行事みた

いなの得意じやなさそりだね」

「逆にお前は生き生きしてんのな」

「まあね。ストリート出身だしね」

そこで会話を打ち切り、視線は智花くんへ。

すでにボールを両手に持ち、頭へと掲げてショート体勢。膝を曲げ、一気に飛んでからスナップの利かせた右手からボールが放たれる。相変わらずの綺麗なショートフォームで、観客を魅了していた。

「おおっ！－－ 智花ちゃんの放ったショート。3段目じまん中へ入りました！」

ペースを崩さないよつこ、実況しながらもすぐに覚醒さんが智花くんにボールを渡す。

再び静かにボールをついて集中し、ショートを放つ。綺麗な軌道を描いて、それは2段目じまん中へすつぽりと入る。3投目は2段目のゴールリングに当たったかと思うと弾かれて更に一段下のこれまたじまん中のリングへと納められた。

「おおっ。これでピンゴ確定です！－－」この状態だけでも $1+2+3$ で $6$ 。その倍で $12$ 点！－－

「なるほど。考えたね」

「ん？」

「どうこいつ」と？』

今後は紗季くんだけではなく夏陽くんも反応していた。

「1番最初にじまん中の奥を狙つていけば、徐々に力を弱めるだけですむ。力が少しくらい強くなつてもその奥のリングに弾かれて上手い具合に入るつていう寸法だね」

「はあ～……流石トモね。やつぱり考えてやつてるのね

とは言つても、その“徐々に力を弱めるだけ”が難しいんだけどね。

3本連続で入れても尚、余裕を見せずにいい緊張感を保つたまま4投目に入る。まっすぐ3段目右へ放たれたショートだが、そのショートはリングに嫌われてしまい得点には至らず。これでダブルビンゴの道は絶たれてしまった。5投目も諦めずにショートを打つがリングに弾かれて入った場所は1段目左。それでも合計得点は13点だ！！

「何と智花ちゃん！！　今までトップだった真帆ちゃんと大きく差をつけて13点獲得！！　今ちょうど終わった一般の部優勝者長谷川さんの24点に続く大記録です！！」

「すばるん24点！？」

「さすが長谷川さんねっ！」

「おー。おにーちゃんすごい！」

「わ、私の12倍……」

凄いな昴さん。一般的の部は反対側のコートでやっていたのだが、もう終わつたみたいだね。24点つてこと、せっかくぱり一本も外さなかつたつてことだらうね。流石は僕たちの「コーチだ。

「…………」

ふふ。どうやらそれを聞いて夏陽くんにも火がついたようだ。キツと昴さんを睨んでかなり意識しているようす。

「夏陽くん。どうだい？　僕は後でもいいから先にやつてもいいよ

？」

「えつ？……いいのか？」

「うん。どうぞ。今のモチベーショングやつたほうが夏陽くん、いい記録残せそうだしね」

やつじゅうと、重くベンチから腰を上げてコートの中にひりひりしていく。覚醒さんも順番変更には特に問題はなかつたみたいで、夏陽くんと2・3言話しただけですぐに終わつた。

その気になる結果は……

「うん、まあ……そういうこともあるんじゃない？」

「つむせえト手な慰めすんな……」

力が入りすぎたのと、リングに嫌われたのとで一本もショートを決めることが出来なかつた。

「…………さて、最後は僕の番だね」

「ケイ。あんだけ色々考察してるんだから作戦はあるんでしょ、うー」

「うん。まあね」

「どんなの！？ 教えて教えてーー！」

「まあ……見てのお楽しみ、かな」

そう書いて覚醒せんべと近づいていく。

「やつま、慧くん。調子はどうかな？」

「すこぶる順調ですね」

「もう君が最後だけどう? みんなの視線が慧くんに集まるけど

「そうか……一般的の部が終わつたから、今まで分散されていていた視線  
が一気に集まるんだ。もしかしたら、やつきの夏陽くんの失敗もこの  
せいかも知れないね。」

でもまあ、僕には関係ないけど

「むしろ集まつたほうがやる気出ますね。僕のバスケはパフォーマンスなんで」

「おおひー!? それ出で来らしみだね。それで出でじうかんかーーー!」

ボールを渡され、ドリブルをつきながらフリースローサークルに一步足を踏み入れた瞬間。ドリブルしていたボールが僕の右手に触ると同時に手の平を返してそのまま腕の力だけで下手投げ。ボールは激しく回転しながら飛んで行き、軌道はブレることなく3段目真ん中に吸い込まれた。しゅるつと摩擦音が鳴り、ボールの回転が止まる。

「凄い凄い凄い！！ まさかの慧くん、アンダースローですっ！！

ソブリニツキノサシ

だつ  
け？

「うん。もうだね」

割れるような観客の歓声の後、興奮した覚醒さんのコメントが入る。あだ名をつけるのが好きだという真帆くんに依頼して付けつて貰つたこのショートの名前は“アンダーハンドショート”……ではなく、もっと長いものだった。あまりに長すぎたのでカットし、現在に至つたのは懐かしい思い出だ。

観客の大きい歓声によつてテンションが大きく上がつた僕は2投目はビハインドショート。3投目はドリブルしてから溜めを作らず、ノータイムでアーチの低い、これまた腕の力だけで打つ“トリックショット”で決めて真ん中の縦に列を作つた。

「おおつとー！ これで慧くんも、すでに12点獲得！！ 2点以上をとれば少年の部優勝です！！ さて、これからどうなるのでしょうかー！」

歓声こそが、長くパフォーマンスとしてのバスケットをしてきた僕に大きな力を与えてくれる。今日は想像以上に調子もいい。次もこの調子でいければいいけど……。

確かに、13点の智花くんを抜いて優勝するにはあと2点。持ち球は2個なので難しい数字じゃない。だけど、狙うのはそこじゃなくてやっぱり……

「いけけっちゃん！！ すばるん抜いちやえ！！」

「そうよー 今のケイならやれるわー！」

「おー。めざせ完全優勝！」

みんなも応援してくれているし、やっぱり田指すなら完全優勝。

そこで、暖めていた案を実行することにする。ボールを持つてフリースローサークルに入ると、フリースローラインの前に立つ。ただし、立つ場所は真ん中じゃなくてラインの右端、サークルの境界のすぐ内側だ。そこからフェイダウェイショートを打つて、それは

3段目右に納められた。

「ええっ！？ それってありなのか！？」

夏陽くんが驚いたように声を上げる。

「それがアリなんですよねーーー！」

だが、応えたのは僕ではなく予想外な人だった。

「ルールではフリースローラインとサークルで出来た境界線を踏んだ状態、もしくはその外にいる時にショートを打つてはいけないだけだから、違反ではありますせーん！！」

「覚醒さんの言うとおりだよ。ルールはね、守るんじゃなくて破らないようにすればいいだけなんだよ」

「けつちん台詞が悪役くさいぞー」

その意見に関しては無視させていただこう。

さて、話はそれてしまつたけど、これで今の得点は15点。昂さんには3段目にもう一つのこつた3ポイントを獲得し、2回目のピンゴコーナスを貰うことが最低条件であり、最大条件だ。覚醒さんにボールを貰い、今度はさつきをは逆側に立つ。

周りは緊張の一瞬に、さつきまでの熱にうなされた歓声が嘘のように静まり返り僕だけを見ている。周りと同じように、熱が引いて冷静になつた頭で放たれたシューートは……。

「ガールズトーク」

まほまほ

『いやーほんとおもしろかったな、けつちん』

紗季

『いひ、そんなこと言わないの。そりや確かに……驚きはしましたけど』

湊 智花

『でも本当にびっくりしたよね。今まであんなに楽しそうに笑つてたのに、急に赤くなつて逃げ出すんだもん』

ケイ

『うう…… そんなに意地悪しないでくれないかい。思い出しただけでも恥ずかしい……』

ひなた

『おー？ けい、まだほつぺまつかつか

あいり

『えへへ。慧くんも、恥ずかしがりやなんだね』

ケイ

『いつもテンションが上ると妙に気が大きくなっちゃって。テレビの前でみんな……うわああああ……』

紗季

『こんあ取り乱すところも初めて見たわ……』

まほまほ

『まあでも、惜しかったな。すばるんの悔しがる顔見てみたかったけどなー！』

湊 智花

『で、でもー！ やっぱり尾さんは凄いよねー！ 覚醒ちゃんも、予想以上の点数に大満足だつて言ってたしー！』

紗季

『ほほーう。なんだか嬉しそうねえ……』

湊 智花

『そ、そんなことないよー？』

まほまほ

『そんなことはおことこい、早くフードパークに行こうよ。』

ケイ

『や、そりだねー！ 過ぎたことを悔やんでも仕方ない。いうなつたら満足いくまで食べてやるー。』

紗季

『ふふ、あんまつはしゃべりがなーようにな』

ひなた

『おー。ひなはね、アイスにっぽん食べる』

あいり

『私は何にしようかな……』

湊 智花

『でも優勝賞品も太つ腹だね』

ケイ

『そうだね。今日こっぴこ使えるフードパークの食べ放題券。そりく使わせてもらおう』

実は最初考えた時は、この後に覚醒さんと昴との対決を予定していたのですが、思ったよりも長くなってしまい無理やりこれで押さえた感じです。

つけたしするかどうかは今の所未定です。

はいっ。更新です。

今更ながら、この作品のPVが5万を超えたーー。  
さらにもう少しで6万に届きそつた勢いでござりまする。

うれしいですねえ…………。

拙く醜い文章ですが、これからも応援のほどよろしくお願ひいたし  
ます。

始まりは、唐突だつた。

いつも通り朝起きて、いつも通り朝食を作り、いつも通り父さんたちを起こし、いつも通り登校してきたんだ。いつも通りではなかつたのは……そう。登校途中で智花くんと合流した辺りからだつた。

僕の家は、学校からわりと近い。バスや電車なんかは使わない距離だ。だけど、大きな通りから少し離れたところにある。学校に行く時はまるで川の支流が本流に合流するかのように、わき道から急に人通りの多い、言つてしまえば慧心学園に通う生徒の大半が通る道へと合流する。今日は珍しいことに、その通りに出たところでばつたりと智花くんと出くわした。

「おはよう。智花くん」

「おはよう。慧くん」

互いに挨拶を交わしたところではやはり昨日の球技大会の話。互いの称賛と、そして反省。一人ではできなかつたことを、歩きながら。あればいい、これはダメと真剣に話し合ひ。

「あ、そういうえば昨日言つてたストリートの大会なんだけど」「えつ？ もうわかつたの？」

そのうち話題は変わり、昨日帰つてから調べたストリートバスケ大会の話へ。

「うん。調べてみただけどね……？」

だけどそこで、少し違和感があった。いや、違和感と言つにははつきりしすぎる。かなり熱い、視線を感じたんだ。不審に思つて勢いよく後ろを振り返つてみると、

『 ッ！』

「…………なにか、用かい？」

3つの、驚いたような顔が並んでいた。

「ぎやはやはは！！ けつちんモッテモテだなあ……」  
「こら真帆！ 笑いすぎだろ！！」  
「でも、わかる気がするなあ。昨日の慧くん、かつこよかつたもん  
「おー。このかほうものっ」  
「で、でも大丈夫？」  
「正直、凄く複雑な気分だよ……」

教室で朝の一件を話すと、案の定真帆くんには大笑いされ、紗季くんには同情され、愛莉くんには同意され、ひなたくんにはからかわれ（？）た。

たった少しの時間を持られただけなのに、燃料切れを起こしたよ

うに教室の自分の席にたどりついたとたんに突っ伏した僕。どうしたのだと集まる真帆くんたちに、智花くんが理由を説明した。

『私たちの、お姉さまになつてください！』

制服のリボンの色から、3人の少女は5年生だ。彼女たちの第一声は、そんな突拍子も無いものだった。

「……………は？」

だから、反応が遅れたとしても攻められることは無いだろう。突然の申し出に混乱していると、何故か顔を赤らめた3人が口を開いた。

「私たち、昨日の球技大会を拝見させていただきました！！」

「昨日の慧お姉さまのすばらしいボール捌きっ！！　的確な判断力

！！」

「今でも田を閉じれば甦ります……あの見事なバスの連発……

「え、ええっと？」

頬に手を当て、もしくは胸の前で両手を握り、恥じらいながらも語る。「将来の夢は、お嫁さんですっ」とでも言いそうなピュアで恥ずかしげな表情でなんて事を言つんだこの子たちはっ！！

「それで私たちは思つたのです」

「私たちの思い描いている理想のお姉さま……」

「凜々しへ強い……そして優しい女性」

『それは、慧さんしかいなにいつていうことを……』

その瞬間、僕は力の限りを知りへ逃げ出したのだ。

そして、現在に至る。

「お姉さまって何……？ 確かに」・A・でも何度か女子に告白されたこともあつたけどこんなことは初めてだよ…………

「それはそれで凄い体験してきてるのね。あなた

ももちろんすべて一重にお断りしたけどね。でも、あんなにまつすぐキラキラした眼を向けられるとむず痒くなつてくると言つか。そもそも、僕はそんなキャラじやない。

「でも確かに。慧くんは“お姉さま”って感じじゃないことよな」「…………ほんつとうにそういう思つてるか……？」

「ほ、本当だよ……」「……」

「ううね。何人もの女子を侍らせる感じじゃないわね。どっちかって言つと、お世話してる?」「…………」

「お姉さまじゃなくて、お姉さん、だね」

「それについては反論できないかも……」「…………」

お世話をしていくと血が止まらず、同意せざるをえない。家では家政婦の如く家事に勤しんでいるからねえ。血漫じやないけど、お世話をしても話するスキルなら結構高めだと思つ。

そんな風なことを思つてゐる

『お姉さまつ……』

「つわつ……？」

教室のドアが音を立てて開き、例の3人の女の子が現れた。机の合間を縫い、すんすんとこちらに歩み寄つてくるのを呆然と眺めるしかなかつた。……何たる行動力。

「ひどいですお姉さまつ」

「急に走り出すなんて」

「でも、走る姿も凜々しかつたです……」

3人3様で話しかけてきた。助けを求めて周りを見回してみるけど……。

「…………」

面倒だから関わり合いたくないとでもいいたそつこいとく視線を逸らされた。

ぐう、みんなは僕の味方じゃなかつたのかーー

「ええっとね……」

『はいっ……』

くつ……じんなに純真な瞳を向けられると言いたいことも言えなくなつてしまつ。でも、これだけは言つておかないと。

「その、お姉さまつてこのやめてもらいたいんだ

『えつ……』

「そもそも僕はそんな柄じゃない。第一、僕たちは今日が初対面だ。お互いに何も知り合わないのにそう言つのは……よくないと思うな」

「…………っ！」

「理多つ…………？」

「すみませんお姉さま！ 失礼します……！」

理多と呼ばれた右側の女の子が走り去ると、それを追つて2人も教室から出ていった。

「ケイ…………ちょっと言い過ぎたんじゃない？」

「そうだね。反省してる」

去り際の、悲しそうな表情が忘れられなかつた。

その後の授業も、イマイチ集中出来なかつた。頭をよぎるのはあの子たち…………理多と呼ばれた子の去り際の顔とそして彼女を追つていった子たちの顔…………どうも気になると言つうか、どこかで見たことがあると思うんだよなあ…………。頭の中につきりしないものを抱えてしまい、気持ちよく授業を受けることが出来ない。

少し気になつてしまつたので、休み時間になるとみんなとの話も断り、5年生の教室へ。理由は今朝の3人について調べるためだ。

1人は水無瀬理沙。<sup>みなせ りさ</sup>成績は中の上で、クラス委員でみんなのまとも役だとか。とは言つてもハメを外しすぎることが多く、先生に怒られる事も多々あるらしい。栗色の髪をショートカットにし、頭

の左上の部分だけ一房髪止めでまとめているのが特徴。

2人目は安久原理亜。成績は下の下。周りからおバ力認定されているほどの天然な子だが、活発な性格でクラスの中心人物。茶色い髪を頭の右側でツーテールにした動きやすい髪型が特徴。

3人目が、智囊理多。成績は上位だけど無口で会話をする場面があまりない。クラスでは目立たないわけではないが、自分から行動することが少ないとか。黒髪をセミロングに伸ばした、ちょっと不可思議雰囲気が特徴。

タイプが全く違う3人だけど、とても仲がいいらしい。幼馴染みなんだそうだ。放課後や休日は、よく3人のうち誰かの家で遊んで、お泊まりなんかもたまにするらしい……。

「ぞうとこんなものかな」

「ケイ……あなた探偵にでもなるつもり？」

「すごいね。たつた3回の休み時間でこれだけ調べてくるなんて」

「なんだか、昨日の球技大会でちょっとした有名人になつたみたいでね……話しかけただけで喜んで教えてくれたよ」

「…………あなたも苦労するわね」

「そう思うんだつたら協力してほしい。

「ただ気になるのが、なぜ“お姉さま”になつて欲しいかなんだよねえ……」

「けつちんに惚れた」

「…………だつたら」・A・の時みたく告白なりしてくれればいいのに……。それなら何とかあしらい方も身に付いてるし……」

「そういう意味じゃないでしょ……。大方、あなたに憧れたんですよ。ほら、ケイ自身言つてたじゃない。“パフォーマンスのためのバスケだ”って。ファンがついたとでも思つていればいいのよ」

「そりだつたらいいんだけど……」

やつぱり何か、ひつかかるんだよなあ。

正直僕がこんなに後に引いているなんて驚いている。転校が多かつたせいか、人間関係に結構ドライなところがあつたはずの僕が初対面の女の子のことが頭から離れないなんて。

……ふふ、智花くんや真帆くん。紗季くんに愛莉くんとひなたくんのおかげなのかもしれない。こんなに他の人と接し続けることなんかなかつたからね。落ち着きはしないけど、なんだか悪い気はしなかつた。

「ま、悩んでいても仕方ないか」

そうやって立ち上がりかけたところで、

『お姉さまっ……』

盛大にすつ転んだ。

「…………ま、また来たん……だね」「もちろんですっ！ お姉さまーー！」  
「私たちは挫けません！！」  
「先ほどは取り乱してすみませんでした……」「でもっ、お姉さまのおっしゃる言葉はもつともと思いました！」  
「なので、もしよろしければ放課後……」

セーの、と声を合わせ。

『私たちと、デートしていくさこーーーー。』

泣いてもいいでしょうか……。

オマケ

オリキャラ紹介（前書き）

はいっ。ここではこの章から登場するオリジナルキャラクターを紹介します。

## オマケ オリキャラ紹介

### プロフィール

【名前】 覚醒未遂 本名：角田美澄  
かくせいみすい かくたみすみ

【生年月日】 12 / 29

【血液型】 O

【身長】 166cm

【仕事】 タレント

【学業】 もつとがんばりましょう

【特技】 会話を盛り上げること。バスケット

【好物】 きつねうどん（インスタントはNG）

【初登場】 閑話 フリー スロー 大会その2

【趣味】 スポーツゲーム、バスケ

【弱点】 学業、雨の日に右足首が痛くなる

【座右の銘】 そうだ、京都行こう（深い意味は無い）

### 【人物】

オールグリーンでのイベントで出会った芸能人。テンションが高く親しみやすいキャラがウケていろんな番組に出ているらしい。ちなみに言うとあれは作っているわけではなく素だという噂も立つている。元々は全日本バスケの選手であったが、右足に大怪我を負ってしまったため引退。前々から出でていたスポーツバラエティ番組を中心芸能界へと転進し、それなりに楽しくやっている。本気の試合は出来ないのだが、遊び程度ならバスケをやっても大丈夫なのでたまに彼女がシユートを打っているところがテレビで見ることがある。今までバスケ一直線でやってきたため頭が悪い。クイズ番組でもおバカキャラとして招かれることもあるそうだ。オールグリーンで見かけた高校生……長谷川昂もバスケバカだと知り、自分の体験上から勉強もしつかりやつたほうがいいと忠告したのはまた別の話。イ

ンスターント食品は味が濃すぎるので極度に嫌い、自炊はお手の物。だが基本薄味。「はいつ」が口癖で、ひつそりと流行語大賞を狙っている。実は作者がノリで作っただけのキャラだったが、友人に意外とウケたのでそのまま使い続けている。

## プロフィール

【名前】水無瀬理沙みなせりさ

【生年月日】9／3

【血液型】A

【身長】147cm

【クラス】5・D

【所属係】クラス委員長

【学業】良

【特技】大きな声を出すこと（威圧感的な）。

【好物】ナポリタン

【初登場】ストリート篇 プロローグ

【趣味】B級映画鑑賞、バスケ

【弱点】高所恐怖症

【座右の銘】激しく跳躍するよりも、地べたを踏みしめるほうがいい

【人物】

お姉さま同盟会員N.O.・I（ストリート篇現在非公認）。クラス委員長で責任感が強いと思われがちだが、実は一緒になつてみんなと遊ぶタイプ。普段の休み時間等では率先して遊びだが授業や行事になるとしつかりとしたクラスのリーダーになるので教師からの信頼も厚く、また友人からの評判もいい。ただし、遠足等になるとテンションショーンが上がつてハメを外してしまい、みんなと一緒に先生に怒られることもしばしば。幼馴染の2人を『理亞』『理多』と呼び、大の仲良し。バスケは学校外のクラブチームに所属し、それなりに実力もあるらしい。そのリーダー性から次期キャプテン候補として名が挙がっている。個人技よりも理亞や理多との連携プレーが得意で、試合では一緒に出ている。ポジションはF。

## プロフィール

【名前】 安久原理亞 あくはらりあ

【生年月日】 9 / 4

【血液型】 B

【身長】 160cm

【クラス】 5-D

【所属係】 掲示係

【学業】 努力は認めます

【特技】いたずら

【好物】ハンバーグ

【初登場】ストリート篇 プロローグ

【趣味】いたずら、近所のアスレチック施設で遊ぶこと、バスケ

【弱点】学業、じつとしていること

【座右の銘】思い立つたら即行動！

【人物】

お姉さま同盟会員N.O. .2（ストリート篇現在非公認）。覚醒ちゃんほどではないが、一緒にいて周りが疲れるほどのハイテンション小学生。だが少々おバカで、授業で手を上げたはいいが答えがわからぬといつた展開が入学当初から何度もあったため、教師の間ではなるべく彼女を指名しないことにするのが暗黙の了解となつてゐる。ただやる気だけはあるので教師も憎めない。男女隔たりなく接し、休み時間になれば理沙と一緒に率先して遊びに繰り出す。時間を忘れて遊び呆けてしまうことも多く、そんな時は理沙のありがたい拳骨で渋々教室へと戻つていく。幼馴染の2人を『さつちゃん』『たむたむ』と呼び、大の仲良し。同じく学校外のクラブチームに所属しており、身長も相まって期待の星。個人技もできるのだが、やはり幼馴染の2人との連携が1番。ポジションはC。

**【名前】** 智囊理多ちのうりた

**【生年月日】** 9 / 5

**【血液型】** A B

**【身長】** 142 cm

**【クラス】** 5 - D

**【所属係】** 揭示係

**【学業】** 超優良

**【特技】** 速読、UFOキャッチャー

**【好物】** どら焼き

**【初登場】** ストリート篇 プロローグ

**【趣味】** 読書、バスケ

**【弱点】** 好意を寄せたり、尊敬する人に拒絶されること

**【座右の銘】** 読めばあなたの知層になる

**【人物】**

お姉さま同盟会員NO.3（ストリート篇現在非公認）。教室では本ばかり読んでいる文学少女。かといって人見知りであつたり暗い性格なわけでもなく、遊ぶときはみんなと一緒に遊ぶ。基本無口なのだが、好きなものの話題になると途端に饒舌になり、周りを引かせることが過去にあつた。学業は常に上位なのだが、教師に対して「授業がつまらない。わかりづらい」「そこの説明間違つてますよ？」給料貰つてるんですからしつかりしてください」等毒を吐くことは珍しくなく、プライドをズタズタにされた教師からの人望は低い。無口で無愛想、更に毒舌。一見人間関係に關してドライに見えるが人一倍臆病な性格の裏返しで、好意を寄せる相手に拒絶されるのが怖い。幼馴染の2人を『理沙ちゃん』『理亜ちゃん』と呼び、大の仲良し。同じく学校外のクラブチームに所属している。スナイパーの異名を持ち、（小学生では存在しないが）3Pラインからのシュートも7割の成功率を誇る。でもやはり、1番力を發揮するのは幼馴染2人とのチームプレイ。ポジションはSG。

scene・1 初テー<sup>ト</sup>直<sup>サ</sup>の場合（前書き）

はいっ。更新です。

前回のプロローグから出した新キャラ3人ですが、正直反応が不安でした。

まあ批判の意見が出ていないのが一安心ですね……。

それでは、お楽しみくださいっ！

## scene・1 初テート自宅の場合

『おじゃまします！』

「遠慮なくどうぞ」

結局断りきれなかつた僕は、とりあえず3人を家に招待することにした。3人とも電車通学らしいので僕の家が都合がよかつたからだ。もちろんそれぞれ親御さんに寄り道をするとの連絡をさせて、了承を得てからのことだ。……それに、彼女たちたつての希望でもあつた。

昨日が球技大会だつたこともあり、練習もなかつたし断る理由がなかつた。……つていうか断れなかつた。

「（）がお姉さまのお家ですか……なんだか、珍しいといつか……特殊な間取りですね」

「父さんが建築家だからね。自分で設計したんだ。日当たりから日常生活まで全部配慮したらこんな形になつたらしいよ」

とりあえず玄関で靴を脱いでもらい、家に上がる。玄関から続く扉は生活スペースではないので無視し、壁に沿つて上に続いている階段を上がっていく。僕の家は本当に特殊で、大きな玄関が家の真ん中にドンと配置され、北側にお風呂、南側に台所があり、突き当たりから壁に沿つた階段がある。天井まで床はなく、それぞれの階段を壁際にぐるっと通路が通つていてそこを移動する。階段を上がつて2階にいくとその通路の南、北側にまた扉がある。南が僕の部屋で北が家族全員共有の作業部屋。そんな形で各階に部屋が2つずつあり全部で4階である。ちょっとしたホテルみたいな感じだ。

3人には僕の部屋に入つてもらい、そこで今日は話をするつもりだ。

「……お姉さまの部屋ですか？」

「…………シンプルながらも生活感がないわけでもなくて、イメージぴったりです……」

「ははは。無理しなくていいよ。生活感がないでしょ？」

「いえ……決してそんなことはありません……」

正直自分の部屋に誰かを招くことなんてないと思っていたので、余計なものは一切置いていない。せいぜい勉強用のシステムデスクと本棚がおいてあり、その反対側にベッドとクローゼットが備え付けられているだけだ。本棚やデスクに本や筆記用具、裁縫セットなどが置いてなければモデルルームとして使えるほど綺麗さっぱり何も無い。

そんな部屋でも、3人ともキラキラした目で見回すので恥ずかしい思いをした。

「それじゃあ僕は飲み物でも持つてくるから、自由にくつろいでいてね。……って言つても椅子は1つだし座布団すらないんだけど……床でもいいかな？」

『はいっ！ 構いません！』

「それじゃあちょっと待つてね」

そう言って部屋を出る。

扉を閉めて背を預けると、ひとりでに溜息が出てしまった。

そういえば……もしかしたら誰かを部屋に招くなんて、家族を除けば彼女たちが初めてではないかな？

クスッ。と薄い笑みがこぼれる。こんなに簡単に他人を自分の中に入れるなんて……本当に智花くんたちに影響されすぎてしまった

かな。

「おつといけない。飲み物取つてこないと」

思い耽り、本来の目的を忘れるところだつた。

小走りで1階に下り、台所に入つて冷蔵庫を開ける。その時、僕の家族は基本的にジュースは飲まないので、彼女たちが喜ぶようなもの入つてないことに気付いた。

「どうするかな……コーヒーはやめといたほうがいいよね」

無難に麦茶を選んだ。

「「」めんね。お待たせ」

お盆にコップを4つ、麦茶の入つたポットを乗せて部屋に戻ると  
……3人とも正座をして待つていた。

フローリングだから足が痛かろうに……。あと、若干の緊張は見えるものの“待て”的指示を出された子犬のような表情でこちらを見上げないでほしい。

「……………とりあえず、姿勢崩そつね」

『はいっ。お姉さま』

につっこりと笑い、正座の体勢から膝から下を外に出した所謂女子座りの体勢になる。

「僕はちょっと着替えてきたいんだけど……いいかな?」

「はいっ。どうぞお気になさらず」

「うん。」「めんね。ちょっと待つててね」

転校してからもう2週間くらい経っているけど、まだこの制服には慣れることは出来ない。もしかしたらこれから慣れることはないかもしないくらいだ。3人には申し訳ないけど、僕だけ着替えさせてもらおう。

麦茶を3人の前に置き、クローゼットから服を取り出して部屋を出る。再び1階の今度はお風呂と隣接した脱衣所に向かい、そこで着替えた。脱いだ制服はとりあえずハンガーでそこに吊るしておき、急いで部屋に戻る。部屋に戻ると、いくらか緊張感が解けたのか3人で楽しそうにおしゃべりしていた。

「やあ、お待たせ」  
「あつ、お姉さまーー！」  
「私服姿も素敵ですねーー！」  
「あはは。ありがとう」

今の服装は、白の長袖シャツに黒のジーパンと極々普通の格好なのだが、お姉さま補正の入った彼女たちにはそう見えてしまうようだった。

いかん！！ 自然とそんなことを思ってしまった。……  
順応性って怖い。  
よいしょ、と彼女たちの前に胡坐で座り自分のコップに麦茶を入れる。

「改めて初めまして、だね。僕は掛樋＝C=慧。よろしくね」  
「……はっ。あ、わ、私は水無瀬理沙です。よろしくお願いします。」

「安久原理亜です。よろしくお願ひしますっ……」

「…………智囊理多です。よろしく、お願ひします」

お互にお互を知つてはいるが、一応名前を名乗るところから入る。そこから簡単に自己紹介をしていく。驚いたことに、3人もバスケをやつていて現在は学校外のクラブチームに所属しているらしいのだ。それぞれポジションは違い、幼い頃から一緒にプレイをしてきたからチームプレイだつたら自信があると息を呑いていた。その頃には3人ともすっかり緊張が解けたみたいで元気よくいっぱい話をしてくれた。

「じつこのも悪くない。そう思つた。けど……やっぱりお姉さまはなあ……。

「お姉さまは今年転入していらしたんですね？」

「うん。」・A・から越してきたんだ。久しぶりの日本だつたからちょっと不安だつてけどね。智花くんたちのお陰でなんとか楽しくやつてるよ

「智花先輩つていうとお……バスケ部の方ですよねっ」

「そり。今僕が所属しているね」

「……あの人も、凄く上手ですよね」

「あ、でもでも！お姉さまのほうが上手ですよー！」

「あ、あはは……」

なんてこと無い普通の会話が続いたが、やがて話題は本題へと移る。

「えつと……君たちはさ。どうして僕にその……“お姉さま”になつてほしいと思つてるんだい？」

若干僕が背筋を伸ばしたのを見て、彼女たちも姿勢を正した。

「それは……朝もお伝えしましたが、昨日の試合を見てお姉さまに憧れだからです」

「でも、本当にそれだけ?」

「えつ?」

「あ、いやごめん。僕の思い違いならアレなんだけど……君たち、どうかで見たことがあるような気がするんだ」

自分の記憶を掘り起こさうと、右手でこめかみをトントンと叩く。だけど、一向にほしいう情報を出でこない。

「なんていふか……違和感? 既視感って言えばいいのかな……君たちを見た時からそんな凝りのようなものが頭の中にならんでいて……。それで、以前に会ったことがないか聞きたいと思つて……」

何気なく彼女たちの方に目を向けてみると……。そこには先ほどまでよりもキラキラがさらに5割増ししたような目が8つ。おもわず体を後ろに引いてしまった。

『お姉さまっ!』

『は、はいっ!?』

『覚えていて下さってんですねっ!?』

『おおお覚えつて何を!?』

『……あの約束のことですっ!-!-』

『や、約束っ!?』

『落ち着きなさい理亜、理多!-! お姉さまが困つてゐるわ!-!-』

まず真ん中にいた理亜くんが身を乗り出し、次に理多くんが理亜くんを押しのけて更に迫り、最後に理沙くんが2人を元の位置に戻

しながらもキラキラした目をじりじりと向け続けていた。

「「めんなさいお姉さまつ……」

「申し訳ございません……」

「ええっと、状況が読み込めないんだけど……」

「まあ仕方がないですよー 何せ2年も前の話ですか」

「2年……前?」

その頃は確かに……あのことがあつて、少し荒れていた時期だ。  
確かその時、一度日本に帰国した時に……

!!

「あああああー 思い出した!ー!」

「思い出してくれましたかつー?」

覚えてる……いや、思い出した。  
僕の頭の中にあつた凝りが弾け、一気にあの時の記憶が押し寄せ

てきた。

## scene・2 ケンカ＝試合（前書き）

はいっ。更新です。

今回は過去編。2年前のお話となつております。  
小学4年時の慧はどんなだったのでしょうかね……。  
それではお楽しみください。

11/24

【v01・3 オマケ キャラ紹介】にて

8割を切る成功率を誇る。7割の成功率を誇る。  
へ変更。

3Pは練習段階で6割入れば試合で使えるレベルなので、8割はち  
よつと高いかなーと。

## scene・2 ケンカ＝試合

side・others

「ひ、卑怯じゃない！ 情けないと思わないの！？ 男子のくせに！…」

「そりだそりだつ！… こんな勝てるわけないじゃんつ…！」

「……無効試合を主張する」

太陽が頂点に達し、ほんの少し傾き始めた頃。とある公園にて女の子が3人……当時小学3年生だった理沙・理亜・理多の3人が、同年代と思わしき少年5人と対峙していた。

「つるせえなッ！！ お前らもそれでいいつったから3対3でやつたんだろ！？ 負けたんだからせつたけどっか行けよ…！」

リーダー格らしき気の強そうな、他の少年と比べても一際発育のいい少年が顔を不機嫌でいっぱいにして吼える。生まれつき体が大きく発育もいい理亜は、そこら辺の小学生なら身長では負け知らずなのだが、そんな彼女でも萎縮してしまった迫力があるそれには他の2人もうつと詰まってしまう。

「で、でも……そっちの2人のジャッジだつておかしいじゃない！  
！ 明らかに虜虜してた…！」

それでも負けじと、理沙がニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべて後ろに控えている男子2人を指差して叫ぶ。その2人は人数調整のために審判となつたのだが理沙たちのファウルは過剰に取り、逆に少年たちのファウルやヴァイオレーションには触れもしなかつた。

「 McConnellなんてしてませーん！ そつちがそう思い込んでるだけだろーー！」

だがそんなささやかな反抗すらも、彼らの嘲笑の種にされてしまった。

悔しさに歯を食いしばる3人。あまりにも悔しそうで言葉が出ないようだった。

「ほりやつせと出でけよ！ これからここは俺たちのナワバリだ！」

「ちょ い、痛い！！ 離しなさい！！」

「あーーー ロラさつちゃんを離せつ！！」

「……暴力反対！！」

バーンッ！！

「ギャアギャアギャアギャアうるせーHなアーー！」

シン……

あと一步で乱闘沙汰となるところ。突如現れたバスケットボールが木製のバックボードに打ちつけられて破裂音にも似た大きな音を立て、さらに現れた少女の怒鳴り声が辺りを包む。突然の第三者の介入に驚き、とつさに声を出すことが出来る猛者はこの場にいなかつた。

腕を組んで佇むその少女は頭にバンダナを巻き、バスケットユニフォームの下に緩い半そでシャツを着たカーボパンツ姿で、緑地に黒いラインの入ったバンダナからは染物ではない綺麗な金髪が溢れていた。顔立ちも日本人離れした彫りの深い左右対称。一見少年に

「な、なんだよお前はー！」

「……」  
「うわあ、この上位々堂が試合ついでにヒートを勝ち取ったんだぞ……」

「何が“正々堂々”よ!! この不正審判!!」

五月蠅し

シン

太陽を背にしているので顔に陰がかかり、さらに俯いているので表情は見えない。だが、その声色からイライラしているのがはつきりとわかる。そのドスのある声は、まだ幼い少年たちを黙らせるには十分だった。

「…チツ」

さうやく顔を上げ、8人の少年少女を見回すといふ場にいふ全員に聞こえるくらい大きな舌打ちをする。

「アンタ、うるさい……」

そして口を開いて声をかけた先は、理沙・理亜・理多の3人。

「話し合って勝負形式を決めた上で負けて…………敗者のくせにい

「……………」

まさか自分たちが責められると思つてなかつた少女たちは、思わず絶句してしまつ。名も知らぬ外人の後ろからニヤニヤと指をさされ、屈辱に顔を赤く染めた。

「…………で、次はアンタらだ」

ぐるりと一八〇。体を回転させると、少年たちの方へ向き合つた。

「アンタもさあ、女の子相手に正々堂々勝負する氣ないわけ？あんな一方的なジャッジ、賄賂を貰つた不正審判ですらしないね」

「…………んだとッ！？」

容赦ない、トゲのある言葉に激昂し、今にも掴みかかるとばかりに詰め寄る。慧は動じないどころか、眉間の皺を深くしますます不機嫌そうにする。

「……ちばいライラしてるのでに無様な試合見せつけやがつて……これならまだ素人同士のバスケのほつがマシだ」「ケンカ売つてんのかッ！？」

先ほどのコーダー格の少年が、怒りに体を震わせて更に一步。

「…………いいよ  
『…………はっ』

無表情な瞳が一転、見下すように細められ口は嘲笑にゆがむ。

「試合…………<sup>ケンカ</sup>売りつけじゃないか」

足元に転がっていたボールを掴み、リーダー少年に投げ渡す。

「ただし、見物料は高いよ」

その瞳が移すのは、ゆるぎない自信だった。

scene・2 ケンカ＝試合（後書き）

この時慧が何故イライラしていたかは、他の章で触れます。

### scene・3 ローカルルール（前書き）

はいっ。更新です。

昨日は更新できなくてすみませんでした……。今後、こうじつこと  
がないよう気をつけます。  
これからも応援していただければ嬉しいです。

## scene・3 ローカルルール

「もちろん。バスケでだけじね」

「なんだよ……10人1でもやろうつか?」

「それじゃあつまらないでしょ? そうだね……3対1でいいよ

少年たちを指差し、その後自分を指差す。

自信満々で見下すような笑みからは、「3人束になつても勝てない」と暗に言つてゐるような気がしてしまつ。そんな慧の態度に、少年たちは更に苛立つ。

「はあ!? ナメンのもいい加減にしろよ……」

「そ、そうですよ。いくらなんでも3対1だなんて……」

今まで言葉を発せずにいた理沙たちだが、慧の無謀な宣戦布告に、おずおずと声をかけた。

「別に諒めてなんかないさ。自分の実力とかつき見た君たちのプライを見てそつ判断しただけだよ」

なんでもないような顔で言つ。それに対して少年たちの眉間の皺が更に深くなるが、慧の口ぶりはそれをわざと楽しんでいるかのようだつた。

「それとも何かい? 3人がかりでも僕には勝てる自信がない?」

「じゃあやつてやるよ……!」

同じような年齢の、しかも女子からの挑発。女子に対して強い態度を取りたがる年頃の少年たちがそれに耐えられるわけがない。ト

ドメの一言に怒りが爆発し、リーダー格の少年が声を荒げて怒鳴つた。それに対しても理亜や理多がピクッときびえてしまうが、慧は正面から受け止めてケロッとしている。

「…………OK・Come on」

一ヤリと口を歪め、短いながらも流暢な英語応えた。

「……と、その前に。悪いけどルールはこいつに決めさせてもらいつよ」  
「は？ ルール？」  
「そう。特別なルールでやらせてもらいつ」  
「…………なんだよ？ 特別なルールって」  
「まあそう難しく考えなくてもいい。決闘用のローカルルール……」  
“スラム・ストリート・バスケ”だ  
「スラム……ストリート？」

聞いたことの無い名前に、全員がいつせいに首をかしげる。慧も気にするそぶりなく説明を続けた。

「大体は普通のバスケと同じだけ……そうだね。一言で言えば荒っぽい。トラベリングやダブルドリブル等の基本的なヴァイオレーションは取るけど、それ以外のファウルなんかは一切取らないルールのことさ。相手を押そ่งが手を引っ叩こうがファウルは取られないと。まさに決闘用のルールさ」

それを聞くと、少年たちの顔にニヤニヤと怪しい笑みが戻る。頭

の中でも、今まで散々自分たちを「負けにしてきた慧をビシビシして甚振りつか構想を練っているのだろう。

「……ま、インテンショナルやアンスポートマンファウル【凄く悪質なファウル。一発で退場】なんかは取るからそこは注意しなきゃいけないけどね」「

加えつけた慧の言葉に、彼らは少し肩を落とした。

……それなら、わざとらしく慧に暴力を「えればいい。やつ

考えて再び座しく笑う。

「審判は……公平にするために彼女たちにさしつけてもらおう。時間は無制限。1ゴール1点の3点先取で勝利。それでいいね?」

「ああ。構わねえよ」

「ひして、慧と少年たちの戦いが始まった。

「それでは、始めます」

ハーフコートなので、ジャンプボールではなくじゅんけんで先攻後攻を決める。先攻は慧だ。

相手の3人は、しつかり作戦会議をしてのベストメンバー。先ほどのリーダー格の少年（仮に少年A）と、背はあまり高くないが足に自信がある少年（仮に少年B）に、少年たちの中でも2番目に背の高い少年（仮に少年C）の3人だ。しつかりと慧に仕返しもするつもりなのか、3人ともギラギラした目をボールではなく慧に向けている。

そして慧が持っているボールを少年Bに渡し、それを返す。所謂ワンタッチをして試合開始。

「へへっ。抜けるものなら抜いてみるよ」「いや、必要ないし」

ひゅっとボールが放られ、バックボードに当たリネットを揺らした。溜めが一切無しのノーモーションでショートを打ち、楽々先制点。

あまりにもあつさりと入れられてしまい、あんぐりと口を大きくあけてボールを見つめる少年たち。コートの横から見ていた理亞たちはきやあきやあと声を上げていた。

「す、す”ーい！！」

「……男子わら」

「ほら、攻守交替だよ」

いつまでたつても彼らが動かないで、痺れを切らした慧がわざわざ「ゴール下まで行きボールを拾つた。それを少年Aに渡しもとの位置へと戻つていく。ボールを受け取つてようやく意識を戻した少年たちも、オフェンスをするべく位置取りをする。  
背の低い少年Bをトップにロー・ポストに2人。ワンタッチが終わつたらすぐにどちらかへパスをするハラなのだね？」

「……ふうん」

そんな3人を見て、どこか納得したような顔の慧。

「ほらよ

少年Bからボールを受け取り。

「はい」

それを相手の胸投げ返す。

「へへっ。それじゃ早速

「うわっ！？」

「ボールキープが甘い」

オーバーヘッドで投げるために頭の上へとボールを上げようとしました瞬間。一気に距離を詰めてきた慧に奪われてしまった。その行動を読んでいたかのような見事な手際で、一切の抵抗も出来ずに攻守

交替。

「……へへ。わたくしのはマグレだ」

慧の攻撃。ワンタッチの後、今度はショートを打たれないようになると距離を詰めてディフェンスをする。後ろの2人もいつでもカバーに行けるよう前衛姿勢。

「ま、そつなるだろうね」

ショートを打つ気が無いかのように、ボールを腰の右横にキープする。フェイクもフェイントもなく、ただにらみ合つ2人。やがて我慢できなくなつた少年Bがボールめがけてステイールを仕掛ける。その瞬間に慧はボールハンドリングの要領で背中を通して逆側の左手へと渡し、綺麗に抜き去る。

「いじに2人いるの忘れんな！！」

そしてすぐに2枚の壁が立ちはだかる。一瞬だけ動きを止める慧だが、すぐに左から抜くべく少年Aの側へ抜きにかかる。だが彼も抜かせまいと食らいつくが慧の方が早い。

ここで決められたらもう後がなくなつてしまつ。焦る少年がとつた行動は……。

「 つ つ！」

「よつしゃとつたーー！」

ファウルだった。慧の腕ごとボールを叩き弾いたのだ。

「ああーー！」

「ひ、ひどいっ……」

「……下衆……」

ゴール端から少女たちのヤジが飛ぶ。だけど、このファウルは合法だ。

慧自信がそう設定したのだから仕方が無い。

「へへっ。いい氣味だぜ」

たらりと汗を流し、少しそれじゃない笑みを浮かべながら吐き捨てる。

一方慧は、叩かれて少し赤くなつた自分の手を見ていた。

「……ふうん」

発した言葉は、ただそれだけだった。いや、むしろそれしか発する必要が無いとでも言いたそうな表情だった。

そしてまた、攻守交替。

「ほらよ」

少年Bからボールを受け取り、

「 ん」

そのボールを投げ返す……と思ひきや、それを転がして返していった。

少年Bはこんなアリなのかと思いながらも、膝と腰を少し曲げてボールを広い上げる。その瞬間、

「……っ！」

えつ？

痛つ……」

ボールを地面から少し上げたところを狙いすまして、慧が握りこぶしをハンマーのようにしてボールめがけて振り下ろした。開いた状態で叩く高い音ではなく、本当に鈍器で殴ったかのような低い音がなつたそれは、地面へぶつかっても勢いは消えず、所持していた人間に講義するかのように顎へクリーンヒットした。

そして跳ね返ったボールは、真正面にいる慧の手の中へすんなりと入つていった。

「はい、攻守交替」

さつきの仕返しなのかどうかはわからないが、少年たちは慧のその笑みにぞくりとした寒気を感じた。

### scene・3 ローカルルール（後書き）

「スラム・ストリート・バスケ」ルールは、私が考えたものなので実際にあるかどうかはわかりません。

## scene・4 ラフプレイ（前書き）

はいっ。更新です。

お気に入り登録件数が70件になりました！！

こんなにもたくさんの方々に応援していただき、感無量です。  
つまらない作品ですが、これからもお付き合いでいただければと思います！

「くつ…… も、さつきからキタネエぞー！ 不意打ちばっかりしゃがつてー！」

たまらず少年Aが叫んだ。2度の不意打ちで自分たちが碌にオフェンスが出来ていないのでそうとう頭にキているようだ。だが、それも所詮逆ギレというものだ。先ほど彼もルールで取られていないとはいえ、わざとファウルをして慧を止めたのだから。

「ふつ…… だつたら真似をすればいいじゃないか」

だから、慧は嘲笑するように鼻で笑つて見せた。

【慧1・男子0】

そして慧のオフェンス。慧に挑発され、だつたらやつてやるひじやないかと少年Bはワンタッチを転がして返し、慧の隙をうつかがう。

パンツ！！

「うわつ！！

だが、最初からやつてくるとわかっている相手に対し奇襲が成功するわけもない。ボールを拾う寸前で慧は少年Bの目の前で手を

叩く 所謂猫だましで相手を驚かせた。ボールにばかり集中していた彼は驚き、大きな隙が生まれる。それを慧が見逃すわけも無く……結局今回も抜かれてしまった。

「何やつてんだよバカ！！」

そしてそのまま進むと、先ほどのように前に2つの壁が立ちはだかる。2人の少年は情けなくも抜かれてしまつた仲間に悪態をつきながらも、目の前にいる慧に集中する。

今回もどうせ抜いてくるだらうと考え、両手を広げてコースをなぐすように自分の体を大きく見せる。

何としても止めてみせる

その瞳はそう語っているようにも見えた。

慧は2人の前に立つと、また一瞬だけ立ち止まつた。

フイツ

「あつ！！」

瞬間、慧の顔がシユートを狙つよう『ゴールの方へと向けられた。シユートを打つのだと思い飛びつくようにジャンプをするが、むなしい声が響いただけだった。

顔と目線だけのフェイクで相手2人をジャンプさせ、自分はあつさりと右から2人を抜いてレイアップ。ノーマークでそれを外すわけも無く、これで慧はリーチとなつた。

【慧2・男子0】

もう後がない男子。しかも自分たちの得点はいまだに〇だ。しか  
もろくにドリブルすらついていない。

再び慧が何かをやつてくるだろうと思い、ワンタッチから気を抜  
くことは出来ない。案の定、今回は前回とは真逆の上に放ったふん  
わりとした返しだった。だが、少年Bもこれまでただ黙つてやられ  
ていたわけでもない。彼なりに対策は考えていた。

バスを貰つた瞬間叩き落されるなら、叩き落とされる前に抜き去  
ればいい。

ボールが手に触れた瞬間、トップスピードで慧を右から抜きにか  
かる。

「……はあ、わかりやすいね」

だが、慧という少女はさらにその上を行っていた。少年Bが慧か  
らボールを受け取る時、視線が自分の左側にそれているのが見えて  
いた。そこから、すぐに抜いてくると読んでいたのだ。

予想は的中。気付いたのが直前だったので少し後れを取つたがし  
っかりと少年に付いている。しかも慧のほうがスピードが速い。

そして慧の左手がボールめがけて伸ばされたとき……顔に衝撃が  
走つた。

「い　　たつ」

「へへ、ワリ」

少年Cのスクリーンアウトだった。それは必要以上に肘を張つた  
状態で、非常に危険だった。しかも、入るのが遅すぎるので明らか  
にファウル。だが、これも慧が定めたルールの影響でファウルには  
ならない。

先ほどの慧の真似をするように、レイアップで楽々と、だがよう  
やく1点を取ることに成功した。

「ナイススクリーン」

「当然」

そこによつやく、慧に視線をやる。

……慧の左頬がひどく腫れていた。ほとんどトップスピードで突っ込んだので、その怪我は大きいものだった。頬の内側も切つてしまつたのか、ペッと地面に向かつて血を吐き出していた。

「最低！… 女の子の顔に傷つけるなんて！…」

「男の風上にも置けないよつ！…」

「……………」の暴漢！…」

理沙たちが思い思いのヤジをぶつける。

「うるせえな！… 事故だよ事故！…」

「外野は黙つてろバーク！…」

「な、なんですつてええ！…？」

まあ少年たちもそれに対して黙つているわけもなく、ヤジにはヤジで返す。

あまりの言い草に理沙が飛び出しそうになるが、慧に無言で視線だけで制された。勝負の邪魔をするなど。

ボールを持つたままエンドラインに立つ慧。やはり頬が痛むのか少し顔をしかめている。それでも、普通にワンタッチを始める。先ほどのような余計なことはせず、普通に放つて返すだけのワンタッチ。

「……………何やってんだ？」

そして、次の行動に疑問の声が出てきた。慧が急にボールハンドリングを始めたからだ。本来、それは試合中にやるようなものではない。

やるようなものではないが、そんなことはこの際どうでもいい。

隙だらけなのだから、ボールを狙うチャンスだ。

少年Bはそう思い、慧の胴周りをくるくると回っているボールめがけて手をのばす。背中を通して右側から前へと出でてくるといふ、ボールを片手で持つている瞬間を狙つたので楽々ボールを奪える……

……そう考えたが、それが間違いだった。

慧は相手が動くと同時に右手を返し、逆回転に変えた。そしてバックチエンジのように左側へと抜き去り、その勢いで目の前にいた少年Cも抜こうとする。

一瞬反応が遅れてしまつた彼だが、抜かせまいとなんとか足を動かす。

一步早く、慧のコースをふさげたと思った少年Cだったが、それも慧の仕掛けた罠。そこに至るまでの慧のスピードは、最速のそれではなかつたのだ。すぐさま体を反転させてバッククロールターン。少年Cが大きく右に出ていたために、少年AとCの間には大きな隙間があつた。その間からまんまと2人を抜き去りこれで最後だと右足に力を込めた瞬間

慧の体が、コートの外へと突き飛ばされていた。

scene・4 ラフノート（後書き）

中途半端などいひで終わってしまい申し訳ございません……。

意外と荒っぽいストーリーって書くの難しかった…………。  
しかもなんか若干少年たちが小学生っぽくないといひこの真実！  
うう……はやくつまく書けるようになりたい！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2130w/>

ロウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

2011年12月1日02時53分発行